

(一) 旋火輪 火輪
車のこまを振り
する火の輪。
(二) 彈指 右手を
胎藏拳にして頭指
を弾きて音を出す
是れ諸佛を警覺す
るの義。

如く、(一) 旋火輪の如く、空谷の響の如し。是の如く觀じ已て、身心を見ず、寂滅無相
平等に住して、究竟眞實の智なりとをもへり。そのときに、即ち空中を觀するに無數
の諸佛猶ほ大地の中に滿つる胡麻の如し、みな金色の臂を舒べ(三) 彈指して警き、この
告を作して言さく、善男子、汝が所證の處は一道清淨なり、未だ金剛喻三昧と薩婆若
智とを證せず。知足を爲す勿れ、應に普賢を満足して最正覺を成すべし。
行者警を聞き已て、定中に普ねく足を禮し、
惟だ願くは諸の如來、我れに所行の處を示したまへ。
諸佛同音に言さく、汝應に自心を觀すべし。
既にこの説を聞き已て、教の如く自心を觀じ、
久しく住して諦らかに觀察するに、自心の相を見ず、
復た佛足を禮したてまつらんと想ひ、白して言さく最勝尊、
我れ自心を見ず、此の心をば何なる相とかせん。
諸佛咸く告げて言はく、心相は測量り難し、
心眞言を授與す、理の如く諦らかに心を觀せよ。

唵、質多鉢囉底、微鄧伽嚩彌。

(二) 念頃 一念の
頃のこと。

(三) 種子 第八阿
賴耶識の中に在り
て一切萬法を現起
する力のこと。

(四) 藏識 第八阿
賴耶識のこと。

(五) 能執 一切の
境を緣じて我なり
法なりと堅く分別
執着する識のこと
(六) 所執 能分別
の識によりて我な
り法なりと執着せ
らるゝ識のこと。

(一) 念頃にすなはち心を見るに、圓滿なること淨月の如し、
また是の思惟を作さく、この心は何物とかせん、
煩惱と習と(二) 種子と、善と惡と皆な心に由る。
心を阿賴耶となす、淨を修して以て因となす、
六度薰習するが故に、かの心を大心となす、
(三) 藏識はもと染に非ず、清淨にして瑕穢なし、
長時に福智を積むこと、譬へば淨滿月の若し、
體なく亦た事なし、即ち説くまた月に非ず、
福智を具するに由るが故に、自心滿月の如し、
踊躍し心に歡喜して、また諸の世尊に白さく、
我れ已に自心を見るに、清淨なること滿月の如し、
諸の煩惱の垢たる、(四) 能執(五) 所執等を離れたり。
諸佛みな告げて言はく、汝が心は本よりこの如くなれども、

國譯金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法

客塵のために翳はれたり、菩提心をば淨となす、
汝淨月輪を觀じて、菩提心を得證せよ、

この心眞言を授く、密かに誦して觀照せよ。
唵、菩提質多母怛跋娜夜彌。

能く心月輪をして、圓滿益々明顯ならしめよ。

諸佛復た告げて言さく、菩提をば堅なりとなす、

善く住して堅固なるが故に、また心眞言を授く。

唵、底瑟姪、麼折囉。

汝淨月輪を觀じて、五智金剛をして、

法界に普周せしめよ、唯一の大金剛なり、

まさを知るべし、自身即ち金剛界と爲ると、

唵、麼折囉怛麼句含。

自身金剛と爲りぬれば、堅實にして傾壞なし、

また諸佛に白して言さく、我れ金剛身と爲りぬと。

(二) 五智金剛 五智とは法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智 大日如來の具備せる智なり。今五智金剛とは五智を具へたる法身大日のこと。(三) 金剛界 金剛身則ち大日如來のこと。

時に彼の諸の如來、便はち行者に勅して言さく、
身を觀じて佛體となすべし、便はちこの眞言を授く。

唵、曳佉薩婆怛佉藥多、薩怛佉含。

心の清淨を證するを以て、自ら身を見れば佛となりぬ。

衆相みな圓備せり、即ち薩婆若を證す。

定中にして徧ねく佛を禮したてまつる、願はくは加持して堅固なしめたまへ、一切

諸佛、金剛界の言を聞しめ已て、盡く金剛の中に入り、便ち金剛心を説きたまふ。

唵、薩婆怛佉藥多、鼻三菩提涅槃茶、麼折囉、底瑟姪。

諸佛大名稱、纔かに是の明を説き已はりたまふに、

等しく金剛界を覺り、便はち眞實智を證しぬ。

時にかの諸の如來、加持して堅固ならしめ已て、

還て金剛より出で、普ねく虚空に住したまふ。

行者是の念を作さく、已に金剛定を修し、便ち薩婆若を具し、我れ等正覺を成せ

り。

(二) 薩婆若 一切智と譯し佛の智。

(三) 明 眞言のこと。

(三) 等正覺 佛果のこと。

(二) 十度 十指の
羅蜜(度)に配する
故に十度と稱す。

佛地に證入せしめんがための故に、當に金剛三昧耶を結ぶべし。

(三) 十度圓滿して外相ひ又へ、忍願幢の如くして正直にせよ、

心及び額と喉と頂とを印し、各々誦すること一遍して以て加持せよ。

眞言にいはいはく、

唵、麼折囉薩怛嚩、地瑟姪薩嚩、唵。

即ち想へ虚空の諸の如來、虚空寶を持して我が頂に灌ぎたまふと、

定慧和合して金剛縛にして、進力禪智寶形の如く、

以て額の上を印して加持し已て、(四) 五佛の智冠をその頂に在け。

便ち(五) 智拳を分て頂後に繞らせ、當に知るべし已に離垢の縉を繫けたりと。

眞言にいはいはく、

唵、麼折囉薩怛嚩、阿迦訶者給、薩婆訶捺囉迷、涅里句嚩、嚩囉迦嚩制那給。

行者また應にこの思惟を作すべし、我れ今已に正覺を成ず、當に一切衆生に大慈心を興

し、無盡の生死の中に於て、恒に大誓莊嚴の甲冑を被るべし。佛國土を淨めて、衆生を

成就し、一切の諸如來等に歷事して、悉く一切衆生をして、菩提樹に坐して、天魔を降伏

(三) 五佛の智冠
大日如來・阿閼如
來・寶生如來・彌
勒如來・釋迦如來
の五佛のその頂に
冠れる五智の寶冠
のこと。
(四) 智拳 大日如
來の結び給ふ智拳
印のこと。

し最止覺を成せしめんと欲せんがための故に、應に三世如來慈悲の甲冑を被るべし。

智拳を以て鬚頂後に繫け已て、便ち復た前に垂れて進力を舒べ、

唵砧二度を相ひ縈ひ繞らせ、緣光を絶たざること甲を繫ぐるが如し、

心・背・臍・腰・兩膝の上、喉・項・額の前・及び頂の後。

悉く進力を以て三たび旋繞らし、掌を散じて前に下りて天衣を垂る、

即ち能く普ねく諸の衆生を護り、一切の天魔壞すること能はず。

眞言にいはいはく、

唵、麼折囉迦嚩制、麼折囉句嚩、麼折囉、麼折囉嚩含。

次にかの歡喜の印を結ぶべし、定慧二羽三たび相ひ拍て、

拍印を以て加持するに由るが故に、一切の聖衆皆な歡喜す。

眞言にいはいはく、

唵、麼折囉都使解。

行者次に、應に成所作智三摩地を以て想ふべし、己身の前に於て無盡乳海を觀せよ、大

蓮華王を出生し、金剛を莖となし、量法界に周ねく、上に七寶珍妙樓閣を想へ、天の

(一) 輪字門 大日
如來の種子のこま
(二) 五如來の冠
五佛の寶冠のこま

如意寶を以て莊飾となし、華雲・香海・妓樂・歌讚あり、寶樓中師子座上淨滿月の中より妙白蓮華を現んじ、(一) 輪字門を觀せよ。大光明を放て、普ねく法界を照し、毘盧遮那如來と爲る。身色月の如く、首に(二) 五如來の冠を戴き、妙紗縠天衣を垂れ、瓔珞を以て身を嚴り、光明普ねく照せり。

無量無數の大菩薩衆は前後に圍遶し、以て眷屬となる。行者一切如來をして威な集會せしめんと欲せんための故に、次に金剛王菩薩三摩地を以て、諸聖を召集して、

定慧二羽金剛拳、臂を交へ胸を抱て進力を屈し、

彈指して聲を發して世界に徧せしめ、諦らかに觀せよ佛海普ねく雲集したまふと。

眞言にいはいはく、

唵、オン 麼折囉、マゼラ 三麼惹弱。

(三) 金剛鉤 以下
は鉤索・鎖・鈴の内
の四攝の菩薩なり

次に(三) 金剛鉤大印を結べ、一切如來鉤召の智なり、

定慧和合して外相又へ、進度鉤の如くして獨り三たび屈せよ。

眞言にいはいはく、

唵、オン 阿夜係弱。

次に金剛索の大印を結べ、尊の身を智體に引入せよ、

前印の禪度定掌に入れ、力智相捻して環勢の如くにせよ。

眞言にいはいはく、

唵、オン 阿係吽吽。

次に金剛鉤鎖の印を結び、能く本尊をして堅固に住せしめよ、

禪智進力相ひ鉤結ぶ、これを金剛能止の印と名づく。

眞言にいはいはく、

唵、オン 係薩怖吒、ケイツホカ 唵。

次に金剛妙磬の印を結び、能く諸の聖をしてみな歡喜せしめよ、

禪智屈して金剛縛に入れ、これを金剛歡喜の印と名づく。

眞言にいはいはく、

唵、オン 健吒惡惡。

次に平等性智の定に入り、闍伽の衆香水を捧持して、

諸聖無垢の身を浴すと想へ、まさに灌頂(一) 法雲地を得べし。

(一) 法雲地 菩薩
の修行すべき階程
に十地ある中の第
十地ないふ。

眞言にいはく、
唵、オム 麼折囉娜誑吽。

(二) 金剛法歌詠
以下は歌・舞・嬉・嬉・
聖の外の四攝の普
薩を明す。

次に(二) 金剛法歌詠を以て、如來の諸の福智を讃揚したてまつる、
諦らかに相好を觀じて清音を運びて、以て如眞性の理に契かふべし。

眞言にいはく、

唵、オム 麼折囉薩怛嚩、オム 僧葉囉訶、オム 麼折囉囉怛娜、オム 麼努怛嚩、オム 麼折囉達麼誑也奈、オム 麼折囉羯麼
羯囉婆嚩。

次に金剛嬉戲の印を結び、如來の内眷屬を成就せよ、

定慧和合して金剛縛にして、禪智二度心に當て、豎てよ。

眞言にいはく、

唵、オム 摩訶囉底。

嬉戲を以て供養するに由るが故に、久しからず當に金剛定を證すべし、

次に金剛華鬘の印を結び、觀せよ妙雲法界に普ねしと、

前印を改めずして捧げて前めよ、想へ寶鬘を奉じて用て首を嚴れると。

眞言にいはく、

唵、オム 略波戌鞞。

金剛鬘を結ぶ供養に由て、當に灌頂法王の位を受くべし。

次に金剛歌詠の印を結び、妙音聲を以て佛智を讚せよ。

前印臍より口に至て散じ、妙樂音を演べて聖會を娛ましめよ。

眞言にいはく、

唵、オム 秣嚩怛囉燥谿。

金剛歌を以て供養するに由て、久しからずして當に如來の辯を具すべし。

次に金剛舞の妙印を結び、觀せよ妙妓雲を以て普ねく供養すと、

定慧心に當て各々旋舞して、金剛合掌を頂上に置け。

眞言にいはく、

唵、オム 薩婆補而曳。

妙舞を以て供養するに由るが故に、當に如來意生身を得べし、

次に焚香を結する外の供養あり、此を以て普ねく佛海會に熏す、

和合金剛にして掌を下に散せよ、想へ妙香雲法界に周ねしと。

眞言にいはいはく、
唵、鉢囉訶羅你爾。

焚香を以て供養するに由るが故に、即ち如來無礙智を得。
次に金剛散華の印を結び、此を以て諸の世界を莊嚴せよ、
縛印を上にに散すること華を獻する如く、芬馥たる華雲法界に徧し。

眞言にいはいはく、
唵、頗囉譏弼。

金剛華を結ぶ供養に由て、速かに如來(一)四八相を證す。
次に金剛燈明の印を以て、普ねく佛會を照して光顯ならしむ、
禪智前に逼めて金剛縛にして、摩尼の燈光法界を照す。

眞言にいはいはく、
唵、蘇底惹佐哩。

この金剛燈を以て供養すれば、速かに如來の(二)淨五眼を具す、

(一)四八相 三十二相にして佛の圓滿の相好のこころ。

(二)淨五眼 肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼。

次に金剛塗香の印を結び、以用て諸佛の會を供養せよ、
金剛縛を散すること香を塗るがごとく、香氣十方界に周流す。

眞言にいはいはく、
唵、蘇嚩盪儂。

金剛塗香の印を以てに由て、(三)五分法身智を具することを得、
是の如く廣く佛事を作し已て、(四)次に應に諦心して念誦をなすべし、
先づ當さに一縁に本尊を觀すべし、四明を以て己體に引入し、
身と尊と二つあることなし、色相威儀みな與とに等し、

衆會眷屬自ら圍遶して、(五)圓寂大鏡智に住すと知る、
定慧の二羽金剛縛にし、忍願は刀の如く進力を附けよ、
先づ金剛百字明を誦せよ、加持して傾動せざらしめんために。

眞言にいはいはく、

唵、麼折囉、薩怛嚩、三麼耶、麼努播囉耶、麼折囉薩怛嚩、底尾努播、底瑟姪、涅里住、弼婆嚩、素都使、喻弼婆嚩、阿努略訖都弼婆嚩、素補使、喻弼婆嚩、薩婆悉地彌、鉢囉也瑳、薩婆羯

(一)五分法身智 五大五智を以て成れる法界身のこころ。
(二)應諦心云々 入我我入觀を明す。

(三)圓寂大鏡智 中央大圓鏡智なり。

國譯金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法

摩訶遮引、止多室利藥句嚩、吽呵呵呵呵斛薄伽梵、薩婆怛佉葉多、麼折囉麼寐悶遮、麼折囉婆嚩、摩訶三麼耶、薩怛嚩惡。

摩訶衍那、百字真言を以て加持するに由るが故に、設ひ、五無間罪を犯し、一切諸佛及び方廣經を謗すれども、本尊己身に堅住するを以ての故に、現世所求の一切悉地す、いはゆる最勝の悉地金剛薩埵悉地乃至如來最勝の悉地なり。

(一) 金剛界の大印を改めず、便ち本尊根本明を誦せ。

真言にいはいはく、
唵、麼折囉駄都給。

(二) 定慧の二羽に珠鬘を捧げ、本真言七徧を加へ已て、捧げて頂上に至れ復た心に當て、堅く等引に住して念誦せよ。

舌端微動して唇齒合せ、(三) 逆順に身を循らして相好を觀せよ、

(四) 四時勤修して間あらしめず、千百を限りとなして復た是れを過ぎてもせよ。一切の神通と及び福智と、現世に徧照尊に同じ。

行者念誦分限畢已んば、珠を頂上に捧げ、勤に大願を發せ、然してのち三摩地の印

(一) 定慧二羽是れは正念誦觀なり

(二) 逆順に云々下より上に至り逆上より下に至り逆順順に五大五智を觀じて自身即ち大日と成ると觀する法。(四) 四時 朝・晝・黄昏・夜半。

(一) 入法界體性三昧の字輪觀にして深秘の法なり。(二) 五字陀羅尼阿尾羅吽欠の五字のこゝ。

結びて(一) 法界體性三昧に入り、(二) 五字陀羅尼を修習せよ。

諸法は本不生なり、自性は言説を離れたり、清淨にして垢染なし、因業なり、虛空に等し。

旋て復た諦かに思惟せよ、字々に眞實を悟れ、初後差別すと雖も、所證はみな一に歸す、

是の三昧を捨てず、兼ねて無縁の悲に住し、

普ねく願くは諸の有情、我が如くにして異あるなからんと。

行者、三昧より出で已て、即ち根本印を結び、本明を誦すること、七徧せよ、また八大供養を以て、諸佛を供養し、妙音詞を以て、稱揚讚歎して闕伽水を獻じ、降三世の印を以て、左に旋らして解界し、即ち金剛解脱の印を結び、諸聖を奉送せよ。各々本土に還へり、印は前三昧耶の印を結び、忍願華を承けて頂上に至りて散せよ。真言にいはいはく、

唵、訖里妬嚩、薩嚩薩怛嚩、悉地捺多曳佉努誑、藥磔特鏝、沒駄尾灑焰、補娜囉誑、那也都、唵、麼折囉薩怛嚩、穆。

(一) 歡喜地 初地
金剛薩埵の位のこ
(二) 後十六生 十
六大菩薩の功徳を
圓滿成就すること

是の法を作し已て、重ねて三昧耶印を以て、加持の明を誦して、以て四處を印し、然るのち灌頂して、金剛の甲冑を被、前の四禮に依て、四方の佛を禮して、懺悔發願等をなし、然る後、閑靜の處に依て、嚴るに香華を以てし、本尊三摩地に住して、方廣大乘經典を讀誦し、意に隨て經行せよ。

若し衆生有て此の教に遇ふて、晝夜四時に精進して修すれば、現世に(一)歡喜地を證得し、(二)後の十六生に正覺を成ず。

國譯金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法終

國譯略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門

唐大興善寺三沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

乾七、縮四二、藏二
十七卷一。題號の意は金剛界
三十七尊の聖徳を
修し證すること略
分別する法門を略
述する故に、分別
聖位修證法門と云
ふなり。
(一) 夫れ眞言の以
下初に眞言宗の大
意を表す。

(三) 然も如來以
下第二に變化身説
法得益の相を明す

(一) 夫れ眞言陀羅尼宗とは、是れ一切の如來の秘奥の教にして、自覺聖智の頓證の法門なり、亦是れ菩薩の具さに淨戒無量の威儀を受け、一切の如來の海會の壇に入て、菩薩の職位を受け、三界を超過して、佛の教敕を受くる三摩地門なり。是の因縁を具すれば、頓に功德廣大の智慧を集めて、無上菩提に於て皆退轉せず、諸の天魔と一切の煩惱と、及び諸の罪障とを離れ、念念に消融して、佛の四種身證す。謂く自性身と受用身と變化身と等流身となり。五智二十七等の不共の佛の法門を満足す、(二)然も如來の變化身は、閻浮提摩竭陀國の菩提道道の中に於て等正覺を成し、地前の菩薩と聲聞と緣覺と凡夫との爲めに三乗の教法を説き、或は他意趣に依て説き、或は自意趣にして説き給ふ、種々の根器が種々の方便をもて、法の如く修行すれば、人天の果報を得、或は三乗の解脱の果を得、或は進み或は退て無上菩提に於て、三無數大劫に修行し勤苦して、方に成佛することを得、王宮に生れ雙樹に滅して、遺身の舍利を塔を起て供

(一) 報身 以下第
三に他受用身の説
法得益を明す。

(二) 自受用 以下
自性自受用佛の説
法得益を明す。

(三) 最上乘者 密
教實類の機を云ふ
なり。

(四) 五解脱輪 金
剛界曼荼羅の五大
月輪なり。

養すれば、人天勝妙の果報を感受す、及び涅槃の因なり。(一) 報身の毘盧遮那色界の頂
き第四禪阿迦尼吒天宮に於て、雲の如く集まれる盡虚空徧法界の一切の諸佛と、十地
を満足する諸の大菩薩をもて證明として、身と心とを警覺して、頓に無上菩提を證す
るには同じからず。(二) 自受用佛は心より無量の菩薩を流出す、皆同一性なり。謂く金
剛の性なり、徧照如來に對して灌頂の職位を受く、彼れ等の菩薩、各の三密門を説て
以て毘盧遮那佛及び一切の如來に獻して、便ち加持教勅を請す。毘盧遮那佛の言はく、
汝等も將來に無量の世界に於て、(三) 最上乘者の爲めに現生に世間出世間の悉地成就を
得せしむべし、彼の諸の菩薩如來の勅を已て、佛足を頂禮し毘盧遮那佛を圍繞し已て、
各の本分本位に還て五輪と成り爲て本標幟を持せり、若は見若は聞き若は輪壇に入り
ぬれば、能く有情の五趣輪轉の生死の業障を斷じ、(四) 五解脱輪の中に於て一佛より一
佛に至るまで供養承事して、皆無上菩提を獲得して決定の性を成せしむ、猶し金剛の
沮壞すべからざるが如し、此れ即ち毘盧遮那の聖衆の集會なり、便ち現證空塔波塔と
爲る、一一の菩薩一一の金剛、各の本三昧に住して自解脱に住す、皆な大悲願力に住
して廣く有情を利す、若は見若は聞く、悉く三昧を證して功德智慧頓に集て成就す。

矣。爾の時に金剛界の毗盧遮那佛、色界の頂きの阿迦尼吒天宮に在して、初め受用身を
もて等正覺を成し、一切の如來の平等智を證得し給ふ。即ち一切の如來の金剛平等智
印三昧耶に入り、即ち一切の如來の法平等自性光明智藏を證し、等正覺を成し給ふこ
と已て、一切の如來、薩埵金剛より、虚空藏大摩尼寶を出だして、以て其頂きに灌ぎ、
觀自在法王智を發生せしめ、一切の如來の毗首羯磨善巧智を安立し給ふ、須彌山頂の
金剛摩尼寶峰樓閣に往詣せしめ、聖衆を集め已て、是に於て毗盧遮那佛、一切の如來を
加持して、四方の座たる師子座を施設し給ふ。時に不動如來と寶生如來と觀自在王如
來と不空成就如來と、復た毗盧遮那佛を加持し奉る。然も受用身に二種あり、一には
自受用、二には他受用なり。毗盧遮那佛内心に於て、自受用の四智を證得し給ふ。大圓
鏡智と平等性智と妙觀察智と成所作智となり、外には十地を満足する菩薩をして他受
用せしむるが故に、四智の中より四佛を流出して、各の本分に住し本座に坐す。毗盧遮
那佛内心に於て、五峰金剛の菩提心の三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に、五峰金
剛菩提心の三摩地智の中より、金剛の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一
切の衆生の大菩提心を淨めて、還り來て一鉢に收まりぬ。一切の菩薩をして三摩地智を

受用せしめむが爲めの故に、金剛波羅蜜の形と成て、毗盧遮那如來の前の月輪住にす。内心に於て虚空寶大摩尼功德三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に、虚空寶大摩尼功德三摩地智より、虚空寶の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の衆生をして功德を圓滿せしめ、還り來て一體に收まりて、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛寶波羅蜜の形と成て、毗盧遮那如來の右邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、大蓮華智慧三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に、大蓮華智慧三摩地智より、蓮華の光明を流出して、徧く十方の世界を照し、一切の衆生の客塵煩惱を淨めて、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に。法波羅蜜の形と成て、毗盧遮那如來の後邊の月輪に住す、毗盧遮那佛内心に於て、羯磨金剛大精進三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に羯磨金剛大精進三摩地智より、羯磨の光明を流出して、徧く十方の世界を照し給ふ。一切の衆生をして一切の懈怠を除て、大精進を成せしめて、還り來て一體に收まりぬ。一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に。羯磨波羅蜜の形と成て、毗盧遮那如來の左邊の月輪に住す、毗盧遮那佛内心に於て、金剛薩埵の勇猛菩提心三摩地智を證得し給

ふ。自受用の故に、金剛薩埵の勇猛菩提心三摩地智より五峰金剛の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の衆生をして、頓に普賢の行を證せしめ給ふ。還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に。金剛薩埵菩薩の形と成て、阿閼如來の前の月輪に住す、毗盧遮那佛内心に於て、金剛鉤の四攝の三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に、金剛鉤の四攝の三摩地智より、金剛鉤の光明を流出して、徧く十方の世界を照し、四攝の法を以て一切の衆生を攝して、無上菩提に於て安置し、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛王菩薩の形と成て、阿閼如來の右邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛愛の大悲箭の三摩地智を證得し給ふ。自受用の故に、金剛愛の大悲箭三摩地智より、金剛箭の光明を流出して、徧く十方の世界を照し、一切の衆生の無上菩提に於て、厭離の心ある者を射害して、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛愛菩薩の形と成て、阿閼如來の左邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛善哉の歡喜踊躍三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛善哉の歡喜踊躍三摩地智より金剛善哉印の光明を流出して、

徧く十方世界を照し、一切の衆生愛感して、普賢の行に於て、下劣の意を生ずる者を照して、身心踊躍地を得せしめて、還り來て收て一體と成りぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛善哉菩薩の形と成て、阿闍如來の後邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛寶の灌頂三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛寶の灌頂三摩地智より、金剛寶の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の衆生の頂きに灌灑して、菩薩の不退轉の職位を獲得せしむ、還り來て收て一體と爲て一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛寶菩薩の形と成て、寶生如來の前の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛威光の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛威光の三摩地智より、金剛日の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の衆生の無明の愚暗を破し、大智光を發し、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛威光菩薩の形と成て、寶生如來の右邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛寶幢三摩地を證得し給ふ、自受用の故に、金剛寶幢三摩地智より、金剛幢の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切衆生の意願を満ちて、還り來て一體に收まりぬ、一切

の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛幢菩薩の形と成て、寶生如來の左邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛笑印の授記三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛笑印の授記三摩地智より金剛笑印の光明を流出して、徧く十方の世界の不定性の衆生を照して平等の無上菩提の記を授與し、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛笑菩薩の形と成て、寶生如來の後邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛法の清淨無染三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛法の清淨無染三摩地智より、金剛法の光明を流出して、十方の世界を照して、一切の衆生の五欲を淨除す、身心清淨にして猶し蓮華の塵垢に染せざるが如し、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛法菩薩の形と成て、觀自在王如來の前の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛利劍の般若波羅蜜三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛利劍の波羅蜜三摩地智より、金剛利劍の光明を流出して、徧く十方世界を照して、一切の衆生の結使を斷じて、諸の苦惱を離れしめて、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛劍菩薩の形と成

て、觀自在王如來の右邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛因の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛因の轉法輪三摩地智より、金剛輪の光明を流出して、能く十方の世界を照して、能く一切の衆生の惡の種子を除き、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛因菩薩の形と成て、觀自在王如來の左邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛密語の離言說三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛密語の離言說三摩地智より、金剛舌相の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、能く十方の一切の衆生の惡慧を除き、四無礙解樂說辯才を得せしめて、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛語菩薩の形と成て、觀自在王如來の後邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛業の虛空庫藏三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛業の虛空庫藏三摩地智より、金剛業の光明を流出して、徧く十方の世界を照し、一切の衆生をして、一切の如來と、諸の菩薩の所とに於て、廣大の供養を成せしむ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛業菩薩の形と成て、不空成就如來の前の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金

剛護の大慈莊嚴甲冑の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛護の大慈莊嚴甲冑三摩地智より、金剛甲冑の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、能く暴惡恚怒の衆生を除て、速かに大慈心を獲せしめて、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛護菩薩の形と成て、不空成就如來の右邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛樂又の方便恐怖三摩地智を證得し給ふ、金剛牙の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、剛強難化の衆生を降伏し、菩提の道に於て安置して、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に。金剛樂又菩薩の形と成て、不空成就如來の左邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛拳印の威靈感應三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛拳印の威靈感應三摩地智より、金剛拳の光明を流出して、徧く十方の世界を照し、一切の衆生の業障を除き、速かに世間と出世間との悉地圓滿を獲せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛拳菩薩の形と成て、不空成就如來の後邊の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛嬉戲法樂標幟三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛嬉戲法樂標幟三摩地智

より、金剛嬉戯標幟の光明を流出して、徧く十方世界を照して、一切の如來に供養し、及び凡夫の世樂に貪染するを破して、嬉戯法圓滿安樂を獲得し、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛嬉戯天女菩薩の形と成て、毗盧遮那如來の東南隅の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て金剛華鬘の菩提分法三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛華鬘菩提分法三摩地智より、金剛華鬘の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養して、諸の衆生の醜陋の形を除て、三十二相八十種の隨形好の身を獲得せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛華鬘天女菩薩の形と成て、毗盧遮那如來の西南隅の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛歌詠淨妙法音三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛歌詠淨妙法音三摩地智より、金剛歌詠の光明を流出す、徧く十方の世界を照して、一切の如來を供養し、能く衆生をして語業の戲論を破し除きて、六十四種の梵音具足することを獲得せしむ、還り來て、一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛歌詠天女菩薩の形と成て、毗盧遮那如來の西北の隅の月輪に住す。毗盧遮那佛内心

に於て、金剛法舞神通遊戲三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛法舞神通遊戲三摩地智より、金剛舞の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養し、及び一切の衆生の無智の無明を破し、六通の自在遊戲を獲得せしめ、還り來て一體と成て、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛法舞天女菩薩の形と成て、毗盧遮那如來の東北の隅の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛焚香雲海三摩地を證得し給ふ、自受用の故に、金剛焚香雲海三摩地智より、金剛焚香の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養し、及び一切の衆生の臭穢の煩惱を破し除き、適悦無礙智の香を獲得せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛焚香侍女菩薩の形と成て、東南の角の金剛寶樓閣に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛覺華雲海三摩地を證得し給ふ、自受用の故に、金剛覺華雲海三摩地智より、金剛覺華の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養し、及び一切の衆生の迷惑を破して、心華を開敷して無染智を證せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛覺華侍女菩薩の形と成て、西南の角の金剛寶

樓閣に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛燈明雲海三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛燈明雲海三摩地智より、金剛燈明の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養して、能く一切の衆生の無明住地を破して、如來清淨の五眼を獲得せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛燈明侍女菩薩の形と成て、西北の角の寶樓閣に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛塗香雲海三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、金剛塗香雲海三摩地智より、金剛塗香の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來に供養し、及び一切の衆生の身と口と意との業の非律儀の過を破し、五分無漏の法身を獲得せしむ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛塗香侍女菩薩の形と成て、東北の角の金剛寶樓閣に住す。毗盧遮那佛内心に於て、請召金剛鉤三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、請召金剛鉤の三摩地智より、金剛鉤の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來を金剛界の道場に請召し給ふ、及び一切の衆生を惡趣より拔て、無住涅槃の城に於て安せしむ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、

菩提心の戸を守る金剛鉤菩薩の形と成て、東門の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、金剛引入方便絹索の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、引入方便絹索の三摩地智より、金剛絹索の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の如來聖衆を引入し、及び一切の衆生を絹索して、二乘實際の三摩地智の淤泥を脱せしめ、覺王法界の宮殿に安置して、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、功德の戸を衛護する金剛絹索菩薩の形と成て、南門の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、堅固金剛鎖械の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、堅固金剛鎖械の三摩地智より、金剛鎖械の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、已に一切の如來聖衆の金剛界道場に入れるものをして、大悲の誓を以て繫縛して而も住せしめ、及び一切の衆生の外道の諸見を摧きて、無上菩提の不退堅固の無礙の大城に住せしめ、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛鎖械菩薩の形と成て、智慧の戸を守て西門の月輪に住す。毗盧遮那佛内心に於て、般若波羅蜜金剛鈴の三摩地智を證得し給ふ、自受用の故に、般若波羅蜜金剛鈴の三摩地智より、金剛鈴の光明を流出して、徧く十方の世界を照して、一切の

如來海會の聖衆の、金剛界道場に住し給へる者を歡喜せしめ、及び一切の衆生の二乗の異見を破して、般若波羅蜜の宮に安置して、還り來て一體に收まりぬ、一切の菩薩をして、三摩地智を受用せしめむが爲めの故に、金剛鈴菩薩の形と成て、精進の戸を守て、北門の月輪に住す。若し次てに依て説かば、前後の差あり、報身の佛に據らば、頓に身と口と意との三種の淨業を證し、法界に徧周して、一一の法門一一の理趣一一の毛孔身分相好に於て、虚空界を盡くして想ひ障礙せず、各の本位に住して、以て徧照光明毗盧遮那の自受用身他受用身と成る。若し二乘に依て次第に而も説かば、若し具さに三十七菩提分法を修せずして、道果を證得すといはば、是の處りなけむ。若し自受用身の佛を證するには、必ず三十七の三摩地智を須めて、以て佛果を成す。梵本の入楞伽の偈頌品に、自性と及び受用と、變化と并に等流との佛德三十六なれども、皆自性身に同じ、法界身を併せて、總じて三十七を成すと云ふなり。

(二) 最初に無上乘に於て、菩提心を發して、阿閼佛の加持に由るが故に、圓滿の菩提心を證得す。寶生佛の加持に由るが故に、内には菩提を證し、外には空中の寶生佛の灌頂し給ふことを感じて、三界法王の位を受く。觀自在王佛の加持に由るが故に、語輪

(二) 最初以上は三十七尊の修證を明し、自下は加持の功徳を明す。

に能く無量の修多羅の法門を説く。不空成就佛の加持に由るが故に、諸佛の事及び有情の事に於て、行する所の利樂皆悉く成就す。金剛波羅蜜の加持に由るが故に、法界に周く虚空に徧せる大圓鏡智を證得し圓滿す。寶波羅蜜の加持に由るが故に、無邊の衆生世間、及び無邊の器世間に於て平等性智を證得す。法波羅蜜の加持に由るが故に、無量の三昧陀羅尼門と、諸の解脱の法とに於て妙觀察智を證得す。羯磨波羅蜜の加持に由るが故に、無量の安立の雜染世界と清淨世界とに於て成所作智を證得す。金剛薩埵菩薩の加持に由るが故に、刹那の猛利の心に頓に無上菩提を證す。金剛王菩薩の加持に由るが故に、諸の有情の利樂門中に於て、備さに四攝の法門を具す、金剛愛菩薩の加持に由るが故に、無邊の有情に於て、無緣の大慈會て間斷することなし。金剛善哉菩薩の加持に由るが故に、諸の善法に於て渴仰して厭くことなく、微少の善を見ても即便ち稱美す。金剛寶菩薩の加持に由るが故に、無染智を證得して、猶し虚空の廣大圓滿なるが如し。金剛光明菩薩の加持に由るが故に、慧光を證得すること、喻へば日輪の照曜せざることなきが如し。金剛幢菩薩の加持に由るが故に、能く有情の世間と出世間との所有の希願を満すること、眞多摩尼寶幢の心に分別することなれども、

皆満足せしむるが如し。金剛笑菩薩の加持に由るが故に、一切の有情、若しは見、若しは聞くもの心に踊躍を生じて、法に於て決定して法の利樂を受く。金剛法菩薩の加持に由るが故に、法の本性清淨なることを證得して、悉く能く微妙の法門を演説し、一切の法は皆筏喻の如しと知る。金剛利菩薩の加持に由るが故に、般若波羅蜜の劍を以て、能く自他の無量の雜染結使と諸の苦とを斷ず。金剛因菩薩の加持に由るが故に、無量の諸佛の世界に於て、一切の如來に妙法輪を轉じ給へと請し奉る。金剛語菩薩の加持に由るが故に、六十四種の法音を以て徧く十方に至り、衆生の類に隨て皆法の益を成す。金剛業菩薩の加持に由るが故に、大誓願莊嚴の甲冑を被て、返て生死に入て廣く菩薩と作て、衆生を引育して佛法に於て置く。金剛藥叉菩薩の加持に由るが故に、能く天魔と一切の諸の障を摧き、能く無垢の煩惱の冤敵を羸らかす。金剛拳菩薩の加持に由るが故に、三密門の無量の眞言三昧印契に於て、合して一體と成す。金剛嬉戲菩薩の加持に由るが故に、受用の法に於て快樂を圓滿して、受用智の自在を得。金剛鬘菩薩の加持に由るが故に、菩提分法の華鬘を得て、以て莊嚴と爲す。金剛歌菩薩の加持に由るが故に、如來の微妙の音聲を得て、聞く者厭ふことなく、聖徳に於て

十六の菩薩
賢劫の十六尊なり
八方等四方
四隅の八方天なり
内外の四方大護
外は八方天なり

解脱して諸の法を了覺すること、猶し呼響の如し。金剛舞菩薩の加持に由るが故に、刹那迅疾に身を分て、頓に無邊の世界に至ることを得。金剛焚香菩薩の加持に由るが故に、如來の悅意無礙智の香を得。金剛華菩薩の加持に由るが故に、能く衆生の煩惱の淤泥に覺意の妙華を開く。金剛燈明菩薩の加持に由るが故に、五眼清淨を獲得して、自利他して法を照すこと自在なり。金剛塗香菩薩の加持に由るが故に、佛の五種無漏の淨身を得。金剛鈎菩薩の加持に由るが故に、一切の聖衆を召き集むること、速疾なる三昧を得。金剛縋索菩薩の加持に由るが故に、虚空の障礙なきが如き善巧智を得。金剛鎖菩薩の加持に由るが故に、佛の堅固の無染觀察の大悲解脱を得。金剛鈴菩薩の加持に由るが故に、如來の般若波羅蜜の音聲を得て、聞く者能く藏識の中の諸惡の種子を摧く。此の三十七の内證無上金剛界分智威力の加持を以て、頓に毗盧遮那の身を證し、無見頂相より無量の佛頂法身を流出して、雲の如く空中に集りて、以て法會を成す、光明徧く覆ふこと塔の相輪の如し、十地満足せるすら能く親見する者なし、冥に有情の身心に加して、罪障悉く殄滅せしむれども能く知る者なし、知ること能はずと雖も、能く諸の苦を息めて而も善趣に生ず、光明より十六の菩薩及び、八方等の内外

の大護を流出して、展轉して光を出だして、惡趣を照觸して、以て窣堵波の階級と成る、諸佛の窣堵波法界宮殿を衛護し、全身と成り爲して、現に金剛界の如來毗盧遮那徧照の身を證する也。

國譯略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門 終

國譯諸佛境界攝眞實經卷上

○ 罽賓國三藏沙門般若 詔を奉じて譯す

序品第一

是の如く我れ聞く、一時、佛薄伽梵、金剛威徳の三摩耶智と種々の希有最勝の功徳を妙善成就し、已に能く一切如來の灌頂寶冠を獲得して、三界を超過し、已に能く一切如來の妙觀察智大瑜伽法に證入し、無礙自在に已に能く一切如來の微妙の智印を成就して、所作の事に於て善巧に諸の有情類の種種の願求を成就し、其の樂ふ所に隨ひて皆満足せしむ。大慈毘盧遮那は體性常住にして、始めもなく終りもなく、三業堅固なること猶し金剛の若し。十方の諸佛咸く共に尊重したまひ、一切の菩薩は恭敬讚歎したまふ。

時に薄伽梵、妙高山頂の三十三天帝釋宮の中の摩訶摩尼最勝樓閣に住したまふ。三世の諸佛の常に說法したまふ處なり。

柔軟なること、兜羅綿の如し、白玉の所成なり。色珂雪を瑩く、妙樓閣ありて七寶莊

乾二、縮二、續
藏經四、其相、大
此經、其相、大
方、其相、大
若、其相、大
入、其相、大
界、其相、大
日、其相、大
今、其相、大
體、其相、大
樣、其相、大
ゆ、其相、大

○ 兜羅綿、梵語
草木の花葉なり。

(一) 金剛胎菩薩
胎は即ち藏の義に
して金剛藏なり、
また虚空藏と云ふ
なり。

(三) 釋提桓因 帝
釋天なり。
(四) 摩醯首羅 自
在天。

嚴なり。寶鏢・寶鈴處々に懸列せり、微風吹動し微妙の音を出し、ソウカイドウバンケマンモウ繒蓋・幢幡・華鬘・瓔珞・半滿月等を以て而かも嚴飾を爲せり。光明照耀して虚空に遍じ、無數の天仙咸く共に稱讚し、大菩薩摩訶薩衆十六俱胝那庾多百千の菩薩眷屬と俱もなり。其の名を金剛藏菩薩・金剛弓菩薩・金剛善哉菩薩・(一) 金剛胎菩薩・金剛威德菩薩・金剛幢菩薩・金剛笑菩薩・金剛眼菩薩・金剛受持菩薩・金剛輪菩薩・金剛語言菩薩・金剛羯磨菩薩・金剛精進菩薩・金剛摧伏菩薩・金剛拳菩薩と曰ふ。是の如く等の十六菩薩摩訶薩一一に各の一億那庾多百千菩薩有りて以て眷屬たり。また四たりの金剛天女あり。其の名を金剛燒香天女・金剛散花天女・金剛燃燈天女・金剛塗香天女と云ふ。是の如く等の金剛天女に一一に各々一千の金剛天女有りて眷屬と爲りて俱もなりき。復た四たりの金剛天あり。其の名を金剛鉤天・金剛索天・金剛鑊天・金剛鈴天と曰ふ。是の如く等の金剛天に一一に各々一千の金剛天有りて眷屬と爲りて俱もなりき。復た切利天の主(三) 釋提桓因と大梵天王と(四) 摩醯首羅等の諸の大神王と及び三十三天との無數の天子有りて、無量俱胝那庾多の諸天綵女種々に歌舞して一心に供養す。復た恒河沙數の無量無邊の一切の化佛有りて閻浮提に現じて虚空に遍滿し、一一の如來、無邊廣大の佛刹を示現し、彼の佛刹の

(一) 阿鼻地獄 阿鼻は阿鼻旨なる梵語の略、無間と譯す、入熱地獄の最下なり。
(二) 阿迦吒天 色究竟天にして、色界の究竟の天なり。

(三) 右の肩の上より云々 金界の大日は東に向て坐したまふ故に、右方は南方なること知りぬべし。

中にて一一の如來無量無數の海衆の菩薩賢聖に圍繞せられて此の大法を説きたまふ。その時に毘盧遮那如來、虚空界を盡くして、常住不變にして海會を觀察して、大象王の如く、一切の虚空に遍滿し、本性を覺悟する智慧希有の金剛三昧に入りたまふ。三昧に入り已はりて、胸臆の中より青色の光を放ちて東方の無量の世界を照したまふ。此と紺琉璃の如し、其面門より足の指に至るまで一一の毛孔より青色の光を發す。此等の光明合して一色と成り、周遍せざることなく、下も(一) 阿鼻地獄に至り、上は(二) 阿迦吒天に至る。彼の諸の世界に無量の化佛有ます、一一の化佛無邊廣大の佛刹を示現したまふ。彼の諸の佛刹の中に一一の如來、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍繞せられて此大法を説きたまふ。黒闇の世界の日月無き處の諸々の有情等より生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて毘盧遮那如來の一切の化佛を見ることを得、永く衆苦を盡くして無量の樂を受く。

その時に如來、定より起ち已はりて、復た一切虚空極微塵數出生金剛威德大寶三昧に入りたまふ。三昧に入り已はりて、(三) 右の肩の上より金色の光を放ちて南方の無量の世界を照す、頂より足に至るまで一一の毛孔より此光明を放つ、是の如き光明合して

一色を成じて、南方を照して周遍せすと云ふことなし。彼の諸の世界に無量の化佛のみす、彼等諸佛は無邊廣大の佛刹を示現したまふ。彼等の佛刹に一一の如來は無量無邊の海會の菩薩大衆に圍繞せられて此大法を説き、黑闇の世界の日月無き處の一切衆生より生盲に至るまで悉く光照を蒙りて毘盧遮那如來及び化佛を見たてまつることを得、衆苦皆除きて無量の樂を受く。

その時に如來、定より起ち已はりて、復た、一切如來の諸法本性清淨蓮華三昧に入りたまふ。三昧に入り已はりて其背の上より(二)紅蓮華色の光を放ちて西方の無量の世界を照したまふ。乃至一切の毛孔より紅蓮花色光を放ちて遍く西方の盡虛空界を照して、合して一色を成じて周遍せざることなし。彼等の世界に無量の化佛のみす。彼の諸の化佛不可説の廣大の佛刹を現じたまふ。彼等の佛刹の一一の如來は無量無邊の海會の菩薩大衆に圍繞せられて此大法を説きたまふ。黑闇の世界の日月無き處の一切衆生より生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來及び諸佛を見たてまつることを得て、永く衆苦を滅し、無量の樂を得。

その時に如來、此定より起ちて、復た一切如來摩訶菩提金剛堅牢不空最勝成就種種事

(二)紅蓮花色光
深赤色なり

(二)五色光
是れ
雜色の故に黒色に
當る、已上四方の
色は青、黃、赤、黒の
第にして金界の次
くなり。

業三昧に入りたまふ。三昧に入り已はりて、左の肩の上より(三)五色の光を放ちて北方の無量の世界を照したまふ。一切の身分より毛孔に至るまで五色の光を放ちて北方の盡虛空界に遍滿せり。合して一色と成りて、周遍せざることなし。彼の諸の世界に無量の化佛のみす。彼の諸の如來は難思の廣大の佛刹を示現したまふ。彼等の佛刹の一一の如來は、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍繞せられて此大法を説きたまふ。黑闇世界の日月無き處の一切衆生より生盲に至るまで悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來及び十方界の一切の諸佛を見ることを得、是等の衆生永く衆苦を離れて無量の樂を受く。

その時に如來此定より起ちて、遍滿一切極虛空際現諸境智能善調伏盡衆生界最勝三昧に入る。三昧に入り已はりて、頂上より白色の光を放ちて十方無量の世界は一切の佛刹を照して周遍せすと云ふことなし。前に放つ所の四種の光明、四方より來りて此光の内に入り虚空に遍滿す。微塵沙數の諸佛菩薩、無邊の諸天衆、是の光明を見て未曾有なりと歎じて、各各是の念を作すらく、何の因縁を以てか此の瑞相を現すと。

その時に、佛薄伽梵、無始無終にして寂靜なる大聖主は、衆生を護念し給ひ、最勝の大仙は世界を擁護し、有情を利益し、能く父母と爲りて生死の苦を抜き、大方便をも

(二) 他心智 十智
の位下地にありて下
の力の弱き他人の現
在の心を知る智慧
を云ふ。

つて最勝安樂ならしめたまふ。大慈大悲もて(一)他心智を具したまふ。大毘盧遮那如來
大衆の心の疑ふ所を觀察して、普く一切大會の諸の菩薩摩訶薩に告げて言はく、諦か
に聽き諦かに聽け、善く思ひ之を念せよ。我れ今摩訶瑜伽諸佛秘密心地法門諸佛境界
攝眞實經を演説して永らく汝等が所有の疑網を斷せん。唯此法を修して佛道を成する
ことを得。此法は善く能く一切の菩薩摩訶薩を引導して菩提樹に坐せしむ。此法は即
ち是れ諸佛の根本なり、是の法は能く一切の惡業を滅す、是の法は能く一切の所願を滿
す、是の法は能く一切衆生の生老病死憂悲の苦海を竭くす、是の法は能く生死の曠野を
過ぐ、是の法は生死の波濤を靜む、此の法は即ち是れ諸佛の種子なり、此の法は即ち是
れ大法幢を建つ、此法は即ち是れ大師子の座なり、此の法は即ち是れ無上法輪なり、此
法は即ち能く生死長夜の黑暗を照す大智慧の炬なり、此の法は即ち是れ大法螺を吹く、
此の法は即ち是れ大法鼓を撃つ、此の法は即ち是れ大師子吼なり、能く外道を摧く。
その時に大會の無量無邊の化佛と十六俱胝那由他の諸菩薩摩訶薩と忉利天の主釋提桓
因と娑婆世界の主大梵天王と夜摩天天子と都史多天天子と樂變化天子と自在天子と及び他
方無數世界の百千萬億俱胝那由他の天子親しく佛前に對して諸佛境界大瑜伽大乘對法

(一) 曼陀羅花 花
の名、光潔にして
異香あり又其だ美
なり。
(二) 曼珠沙花 其
色白く鮮かにして
見るもの強業の三
業を離るる云ふ、
天華の名。

(三) 無上法忍 是
は初地已前にして
天華圓教の意に同
ずる也。
(四) 歡喜地 以下
法雲地に至る順次
に十地を列擧す
の階級にして、修
さば不動安住の義
なれば煩悩のため
に傾動することな
き故に名づく。

諸佛秘密攝眞實經の名を聞きて歡喜踊躍して未曾有なることを得て心に愛樂を生じて
各各に身の所着の天衣を脱ぎて、衣械を執りて空中に旋轉して以て佛に供養したてま
つる。亦た天の(一)曼陀羅花、(二)摩訶曼茶羅花、(三)曼珠沙花、(四)摩訶曼珠沙花を以て、諸佛
及び諸の大會に供養し奉る。復た諸天の上妙の伎樂百千萬種を以て虚空の中に於て諸
佛に供養し、復た天上種々の妙花を雨らして、謂はゆる瞻蔔迦花、蘇摩那花、阿提目
多迦花、婆利師迦花等を以て、佛及び諸の大會に供養したてまつる。

その時に大衆、此經の名を聞きて、無量の衆生大利益を得、恒河沙の衆生は(五)無生法忍
を得、或は菩薩ありて(六)歡喜地を得、或は菩薩ありて離垢地を得、或は菩薩ありて發
光地を得、或は菩薩ありて焰慧地を得、或は菩薩ありて難勝地を得、或は菩薩ありて
現前地を得、或は菩薩ありて遠行地を得、或は菩薩ありて不動地を得、或は菩薩あり
て善慧地を得、或は菩薩ありて法雲地を得、復た無量無邊の諸天子等ありて菩提心を
發こして永く阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。

出生品第二

その時に、佛薄伽梵毗盧遮那如來は普賢の心に住したまふ。頂上の寶冠に難思の事を

現じたまふ。一切の化佛は其中に影現したまふ。是れ諸の如來の大觀自在の大法を得、智波羅蜜多、一切如來毘須羯磨の不空無礙、能所作の事に皆善巧を得、一切の心願満足せざることなし。大神力に依りて一切の佛體を自心の中に安じて、法身を莊嚴す。是の時に如來は、一切諸佛普賢菩薩の三昧耶より出生せる金剛薩埵の廣大威徳三昧に入る。定より起ち已はりて、自心の中より祕密眞言を出生して曰はく、
唵、縛日羅、薩怛婆。

その時に、毗盧遮那如來は、此の諸佛境界眞實瑜伽祕密心地の法を説きたまふ。時に十方の無量無邊の諸佛の刹土は六種に震動し、妙高山の頂の三十三天の帝釋宮の中の大摩尼寶最勝樓閣も亦たまた震動して天より曼荼羅花・摩訶曼荼羅花・曼珠沙花・摩訶曼珠沙花を雨らして、佛の上及び諸大衆に散す。時に諸の大衆は此十方の無量無數恒河沙等の諸佛の刹土の六種に震動する見、并に妙高山頂の帝釋宮中の大摩尼寶最勝樓閣の六變震動するを見て是の念を作す。今如來、大神變を現じたまふ。何の因縁を以てか此の瑞あると。その時に如來、諸の大會の心の所念を知りて、之に告げて言はく、汝等此に於て疑惑を生ずることなかれ、我れ今已でに是の深妙の法を説けり。三世の諸

佛の心中の心なり。一切の佛法を此經に攝す。一切の佛法は此經より出づ、是の法を名づけて一切如來眞實境界大乘瑜伽微妙對法とす。これは是れ一切如來の心、金剛眞言最勝祕密なり。

その時に諸佛の心より是の法を出し已はりて、即ち是の時に薄伽梵、普賢陀羅尼の此の祕密法は、變じて無量無數の圓滿の月輪と成る。此の滿月輪は能く衆生の大菩提心をして皆清淨なることを得せしむ。

此等の無數の圓滿の月輪、一切如來の左右に在りて、此の月輪より諸の如來の無量無數の大智金剛を現す。此大智金剛滿月より出で、復た毘盧遮那如來の心中に入る。金剛薩埵の三昧の妙堅固力と及び一切如來の大威力とに依るが故に、無量無數の智慧金剛合して一聚と成る。量虛空に等して、大光鬘を現す。是の如く的光鬘、即ち變じて一切如來の妙身語意堅牢智性の五股金剛を成ずることを得。諸佛の心より出で、毘盧遮那如來の兩手の掌中に住す、此の金剛より種々色の光金剛の相貌ある無量無數の光明を出だして一切世界に遍滿して平等無礙なり。此金剛の光は復た口より出で、十方界の微塵數等の一切如來の無礙の法身の遍法界海に現じたまふ。何の因縁を以てか法界に

（二）普賢大菩薩の
身を出現す大日
上り金剛薩埵を
現する相なり此
普賢は即ち阿闍
那

遍満したまふとならば、謂はく、諸の如來は平等慧と及び大神通とを得て、現に能く一切の衆生を覺悟せしめて無上大菩提心を發さしめ、善く能く普賢の難思の種々の妙行を成就す。一切如來種性力に因りて善く能く親近して恭敬供養せり。大菩提樹に於て能く一切の惡魔波旬を滅して大菩提を證し、自ら能く覺悟して能く無上最妙法輪を轉じ、乃至、能く盡虛空界の一切衆生を護りて、能く一切の利益安樂を作す。一切の如來善く能く大智と神通との悉地を成就せり。一切の如來善く能く種々の神通を示現せり。普賢三昧の體と及び金剛三昧の微妙の堅牢和合の力に依るが故に（三）普賢大菩薩の身を出現す。その時に普賢菩薩は毘盧遮那如來の心の中に立ちて偈を説きていはく。
善い哉希有なりわれ普賢、妙體堅固にして眞實の性なり。
堅固力に由りて、形相なけれども、生を利せんが爲めの故に生身を現す。

その時に普賢大菩薩は、毘盧遮那如來の心中より出でて、諸佛の前に對して月輪の中に坐して、右の手に金剛杵を執りて掌の内に轉じたまふ。是の時に毘盧遮那如來は一切如來金剛不壞智大三摩耶三昧に入りて、是の三昧力に依て普賢菩薩の爲めに諸佛の戒・定・慧・解脱・解脱知見・蘊の微妙の大法輪を得せしめて衆生を利益し、大方便力智大

三昧耶を以て一切の盡衆生界を救護し、一切の自在主を以て一切の大安樂を深心に愛樂し乃至一切如來の平等性智と最勝の神通と大乘の對法との悉地を得しむ。是の如く等の果は是れ一切如來の悉地なり。金剛を普賢大菩薩の手に授與せんと欲するが爲めの故に、一切如來の轉輪王の體を授與せんと欲するが爲めの故に、一切如來の不可思議の佛の事業を授與せんと欲するが爲めの故に、寶冠と白繒との灌頂を授與せんと欲するが爲めの故に、毘盧遮那如來自らの兩手を以て金剛印を授與す。時に一切如來、名字灌頂を與へて金剛手と號す。その時に金剛手菩薩摩訶薩は此金剛を得已はりて、右の手に金剛杵を執りて掌中に轉じて、心に當て安置して、偈を説きていはく。

此は是れ一切の諸の如來の、最勝の金剛の大悉地なり。
諸佛我れに授くるに兩手を以てしたまふ。無相に相を現するは生を利せんが爲めなり。

金剛界大道場品第三

その時に金剛手菩薩摩訶薩は、佛の威神を承はりて、十方の無量無邊の塵數の世界の一切衆生を觀察すること掌中の阿摩勒果を觀るが如し。衆生の爲めの故に大悲心を生

以下は灌頂の義を
明す中に於て先
づ結縁灌頂なり。

じて、即ち座より起ちて、偏へに右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著けて佛に白して言さく、世尊、一切世間の諸の有情類、或は財寶に貪著することあるもの、或は飲食に貪著することあるもの、或は五欲に貪著し三寶を憎嫌することあるもの、或は歌舞を愛樂し情を恣にして遊戯することあるもの、是等の衆生は未だ曾つて眞實の妙法を見聞せずして邪見外道の法の中に入りて諸佛の梵行を修せず。彼の諸の衆生は廣く惡業を造りて地獄の因を作る。一切の餘法は救度すること能はず。唯金剛界大曼陀羅無上の大法のみ能く善く救護す。何を以ての故に、若し衆生ありて種々の罪を造りて、まさに地獄・餓鬼・畜生及び(二)八難處(一)に墮すべし。唯此法有りてのみ而かも能く拔濟す。若し衆生ありて一切の最勝の安樂を希望せんには、唯此秘密のみ善く能く圓滿す。復た衆生ありて正法を愛樂し、一切如來の淨戒と三昧と智慧との最勝の悉地を願求せんには、此秘密の法を方便の行と爲し、曾多の佛の所にて種々の行を修し、禪定・解脱等の果を求む。是の如くの衆生は此曼荼羅に入り易し。即ちたちまちに阿耨多羅三藐三菩提を證得す、いかにいはんや世間の福樂果報をや。今世尊最勝の大慈悲心を發起して斯等の事を爲し今まさに陀羅尼の法を演説す。

(一)八難處 佛を見ず法を聞くを得ざるを難と云ふ。これに八種あり故に云ふ。

(二)滅罪の印 外縛二中指蓮葉の形なり。

その時に、佛薄伽梵、金剛手菩薩に告げて言はく、善いかなく、金剛手、是の如く是の如し、汝の所説の如し。大悲を起して未來世の一切衆生の爲めに如實の道を示せ。善男子諦(一)かに聽き、諦かに聽け、善く思ひ之を念せよ。我れ今汝が爲めに次第に廣く此の曼陀羅大道場の法を説かん。善男子、若し諸佛の境界の此金剛界瑜伽大曼陀羅の法を修學することあらんものは、最初第一に何等の事をか作さん、瑜伽行者最初に道場に入らんとする時は先づ(二)滅罪の印を結ぶべし。左右の大母指・頭指を以て更互に相又へて左右の中指を以て直く豎て次に二中指の頭を以て相屈して更互に挂へ着けよ。其左右の無名指・小指は、大母指の頭の如く更互に相又へて、即ち眞言を持すべし。此の如きを名づけて三業の祕密と爲す。眞言に曰はく、唵、薩縛、婆縛、輪陀、薩嚕縛、那魯磨薩縛、婆縛、戊度、吽。一遍を持し已はりて、是の如くの想ひを作せ。一切諸法は本性清淨なり、我れ及び衆生も亦た本性清淨なり。是の想ひを作し已はりて。また次に瑜伽行者は金剛合掌の印を結べ、先づ二の掌を合し次に十指の頭を更互に相又へ右を以て左を押ふべし。即ち是れ金剛合掌の印なり。一切の印法は皆これより生

す。眞言を持していはく、
唵、縛日囉、惹哩。

眞言を持し已はりて身の五處を印せよ。一には頂上、二には右の肩、三には左の肩の上、四には心の上、五には喉の上なり。時に行者此金剛合掌の印を以て五處を加持せよ。即時に身上に金剛の甲を被て、行者及び弟子心身堅固にして、悉く安穩なることを得て、一切の惡鬼・毘那夜迦其の便を得ず。

また次に瑜伽行者、金剛縛の印を結べ、其前の金剛合掌の印を解かずして、左右の十指を更互に相握りて、右の五指を以て堅く左の手を握り、左の五指を以て堅く右の手を握りて縛著の相の如くし、眞言を持していはく、
唵、縛日囉、曼陀、怛唎吒。

最後の三字重ねて持すること三遍せよ。三字一遍を習する毎に、左右の中指を直く堅て、彈指すること一遍せよ。是の如くすること三たびに至る時に行者眞言を持し已はりて、想ひを作せ。我が身及び諸の衆生の身中所有の一切の煩惱悉く皆除滅して、内外清淨なること猶虚空の如くにして諸佛菩薩の住處たるに堪へたり。一切の毘那夜迦・諸鬼

(二) 四攝 菩薩が衆生を度脱せしむるに、先づ用ひて、衆生を攝する四種の法を施す。愛語、利行、同事、同捨なり。常の金剛起の印なり。廣澤流にては驚覺と云ふ。

(三) 金剛拳の印 亦遣出聲の印と名く、此印は即ち降三世の辟除結界の印なり。

神等悉く皆遠離し、(三) 四攝・十善・十波羅蜜の如き一切の善業は皆隨つて圓滿すること猶し衆流の大海に入るが如し。是の想ひを作し已はりて。

また次に、瑜伽行者道場に入らんとするには、雙膝を地に着け、合掌し禮拜して(三) 覺起の印を結べ、先づ金剛拳を結び、次に左右の小指を以て更互に相鉤せよ、右を以て左を鉤し、次に左右の頭指を舒べて其頭相拄へて、是の想ひを作せ。今の如く毘盧遮那如來は十方世界の微塵沙數の諸佛菩薩及び賢聖衆に救して、一切の三昧說法等の事を止めて、道場に來集し、行者を觀察し、同じく共に攝受して衆生を利益せしめたまふ。此觀を作し已はりて印を仰で外に向けて眞言を持して言はく、

唵、縛日囉、底瑟吒。
また次に瑜伽行者、(三) 金剛拳の印を結べ。先づ此の拳を以て心の上に安じ、次に右の拳を以て外邊に出せ、次に左の拳の頭指を舒べ、又右の拳の頭指を舒べて外に向けて眞言を持して曰はく、
唵。

此眞言を持すること一遍して即ち此想を作せ。我が身中並びに道場の内の所有の毗那

(二) 金剛鉤の印
四攝の中の鉤の印
なり。

夜迦・一切の惡鬼神等を逐ふと。行者此眞言を持する時右の拳の頭指を外に向へて搖動せよ、是れ驅逐の相なり。即ち遣出魔オンシュツマと名くる等已はりて。復た次に瑜伽行者(一)金剛鉤の印を結べ。先づ金剛縛の印を作り、次に右手の頭指を舒べて少しく屈して想へ。鉤印を作して諸佛菩薩・一切の聖衆を請すと。眞言を持して曰はく、

唵、縛日羅、虞遮惹。

纒ワツかに此眞言を持すれば、一切の諸佛・菩薩・聖衆降臨したまふ。

また次に瑜伽行者、(三)集會の印を作せ。先づ兩手を以て金剛拳を結べ、次に左の拳を以て右の膝の上に安じ、次に右の拳を以て臆の上にして臂を交へ心に束ねて即ち此想を爲せ。一切の如來・菩薩・聖衆悉く皆集會したまふと。此觀を作し已はりて眞言を持して言はく、

唵、縛日羅、沙摩惹。

此眞言を持し已はりて、即ち是の想を作せ。諸佛・菩薩は既に集會し已はれりと。歡喜の心を發し、兩臂を搖がさず、唯左右の拇指・頭指を以て三遍彈指せよ。その時に如來偈を

(三) 集會の印、金剛王の印なり、以上二印言は俱に召請に用ふるなり

説きて曰はく。

定慧の二翼金剛拳にして、臂を交へて心に束ねて精進の力を以て、彈指して聲を發して法界に遍す、諦かに觀じて普く諸の如來を請じたてまつる。

國譯諸佛境界攝眞實經卷上 終

國譯諸佛境界攝真實經卷中

罽賓國三藏沙門般若 詔を奉じて譯す
金剛界大道場品之餘

以下は五相成身觀を説くなり。

また次に瑜伽行者、是の如き想を作せ。諸佛菩薩は、今まさに降臨して威徳大神通力を示現したまふべしと。此想を作し已はりて、また釋迦如來の成道の法を觀察すべし。釋迦菩薩の如きは菩提樹に近きこと一由旬の中にして、諸の苦行を修し、六年を満足して願くは佛道を成せんと、菩提樹に趣き金剛座に坐し金剛定に入りたまふ。その時に毘盧遮那如來は是を觀見し已はりて、菩提樹の金剛道場に至りて無數の化佛を示現し虚空に遍滿したまへり。猶し微塵の如くにして、各共に同聲に菩薩に告げて言はく、善男子いかんがして成佛の法を求めざるや。菩薩は聞き已はりて、虔恭し合掌して佛に白して言さく、我れ今、成佛の法を知らず、唯願はくは慈悲に、菩提の路を示したまへ。時に諸の化佛、菩薩に告げて言はく、善男子心は是れ菩提なり、自心を求むべしと。恒沙の諸佛は異口同音に(一)法身求心眞言を説きて曰はく、

(一)法身求心眞言
通達菩提心なり。

唵、室多、鉢羅底、駄備、迦嚕、弭。

その時に菩薩は是の法を聞き已はりて、金剛縛の印を結ぶ。二手相又へて拳に作りて、之を安じて心に當て、一心に眞言の義趣を觀察して諸佛にまふして言さく、我れ是の法を得たりと。時に佛、問ふて曰く、何等の法をか得たると。菩薩答へて言く、心は是れ菩提なり、我れ是の法を得たりと。諸佛は更に告げて言はく、更に復た微細に觀察し分別せよ。菩薩まうして言さく、心意識の法が諸煩惱に入ると共に相和合して分別すべからず、然かも諸法の中に心心所を求むるに悉く不可得なり。五蘊の法の中に求むるに不可得なり。十二處の中にも亦た不可得なり。十八界の中にも亦た不可得なり。

乃至十八空の中にも亦た不可得なり。蘊處界の法の一一に分別するに、一切の法の體は我々所なし、(二)補特伽羅も我々所なし、心心所の法は本來無生なり。また滅處もなし、諸の世間の一切の心の中に於ても亦た見るべからず、内にもなく外にもなく中間にも亦たなし、過去の心も不可得なり、現在の心も不可得なり、未來の心も不可得なり。猶し幻化の如くにして差別あることなし。我れ今自ら證することみな悉く是の如し、世尊、我が解するが如き心心所の法は本來空寂なり、何等の法に依てか佛道を成せんことを

(二)補特伽羅は梵語、數取趣又は人語、數取す、有情又は有情の我を云ふ。

(二) 當心 心は胸に當つるなり。

求めん。諸佛は告げて言はく、心心所法の和合するの時に自ら苦樂を覺るを自ら心を悟ると名づく。唯自ら能く覺りて他の悟らざる所なり。此心に依止して菩提心を立つ。またつぎに瑜伽行者は彼の菩薩の如く心を觀察し已はりて、結伽趺座して、金剛縛の印を作りて之を(二)當心に安じ、兩目を閉ぢて諦に自心を觀じ、口に求心の眞言を習ひ、意に秘密の義を想へ。その時に世尊、偈を説きて曰はく、

行者月輪を想ふて定中に普く禮し奉る。

唯だ願はくは、諸の如來我れに所行の處を示したまへ。

諸佛は同音に告げたまはく、汝自心を觀すべし。

既に此語を聞き已はりて、教の如く觀察して、

久しく住して諦かに思惟するに、自心の相を見る。

復た佛足を禮すと想ふて、白して言さく最勝尊、

我れ自心を見ず、此心を以ていかなる相とせん。

諸佛は咸く告語すらく、心相は測量し難し。

汝に心眞言を授く、理の如く諦かに觀察すべし。

(二) 大菩提心の眞言 修菩提心の眞言なり。

またつぎに瑜伽行者は、金剛縛の印を結びて、菩提心の相狀の觀を作し、并びに眞言を習ふ。是の諸の化佛は菩薩に告げて言はく、善男子無上大菩提心を發すべし。菩薩問ふて言はく、いかなるをか大菩提心と爲すや、諸佛は告げて言はく、無量の智慧猶微塵の如し、三阿僧祇一百劫の中に精進修習して成就する所なり。一切煩惱の過失を遠離せり。福智を成就すること猶ほ虚空の如し、能く是の如くの最勝の妙果を生ず、即ち是れ無上大菩提心なり。譬へば人身の心を第一とするが如く、大菩提心もまたまた是の如し、三千界の中に最も第一たり。何の義を以ての故に名づけて第一とするや。謂く、一切の佛及び諸菩薩は菩提心よりして出生することを得。菩薩問ふて言はく、大菩提心は其相いかなるものぞ、諸佛、告げて言はく、譬へば五十由旬の圓滿の月輪の清涼皎潔にして諸の雲翳なきが如し。まさに知るべし、此は是れ菩提心の相なり。是の語を作し已はりて、無量の諸佛は異口同音に(二)大菩提心の眞言を説きていはく、
唵、謨尼、室多、牟膩婆駄野、弭。
彼の菩薩の菩提心を觀するが如くに、瑜伽行者も亦たまた、是の如くすべし、そのと
きに如來、偈を説きていはく、

一念に淨心を見るに、圓滿なること秋の月の如し。

復た此思惟を作すらく、是の心をばいかなる物とかせん。

煩惱習の種子、善惡皆な心に由れり。

心を阿頼耶と爲す。淨識がためには本なり。

六度薰習するが故に、彼の心を大心と爲る。

藏識は本より染にあらず、清淨にして瑕穢なし。

無始より福智を修すること、猶ほ淨滿月の如し。

體もなく亦た用もなし、即ち月にして亦た月にもあらず。

福智を具するに由るが故に、滿月自心の如し。

菩薩は心歡喜して、復た諸佛に白して言さく、

我れ已に心相を見るに、清淨にして月輪の如し。

もろくの煩惱の垢、能執所執等を離れたり。

諸佛は咸な告げて言はく、汝の心は本より是の如くなれども、

客塵のために翳されて、菩提心を悟らず。

(三) 堅固菩提心眞言
是れ金剛身の眞言なり。

汝、淨月輪を觀じて、念々にして觀照し、能く智をして明顯ならしめて、菩提心を悟ることを得べし。

またつぎに瑜伽行者は、金剛縛の印を結びて、前に依りて觀察し并に眞言を習ふ。前の化佛が菩薩に告げてのたまふが如く、善男子、また(三)堅固菩提心の眞言あり、曰はく、唵、膩瑟陀、嚩日囉。

そのときに、菩薩は前に依りて、觀照して佛に白して言さく、我れ今已に見る、佛の言はく、いかなるをか見たるや。菩薩答へて言はく、滿月の中の五股金剛を見るに、一切の煩惱は悉く皆摧碎す。黄金を銷すが如く其色煥然たり。此の如くの智慧は最も第一たり。即ち是れ諸佛の不生不滅の金剛の身なり。彼の菩薩の月輪を觀するが如く、瑜伽行者も亦たまた是の如し。

またつぎに、瑜伽行者自ら觀せよ、我が身は金剛薩埵なりと、并びに復た印を結びて眞言を持念せよ。金剛薩埵は即ち是れ毘盧遮那如來の變化身なり。諸の化佛が菩薩に告げて言ふが如く、善男子、復

た(三)如金剛の眞言あり、曰はく、唵、嚩日囉、陀摩虞、吽。

(三) 如金剛眞言
證金剛身の眞言なり。

いかなるをか之を見るや、答へて曰はく、法と非法と本性清淨なること、譬へば蓮華の泥中に生ずと雖も而かも塵の染せざるが如し。我れ今此れを觀すれば即ちこれ報身なり。彼の菩薩が報身の觀を作せしが如く瑜伽行者もまたく是の如し、安心端座して金剛縛の印を結びて此の想を作すべし、法と非法と本來清淨なること猶ほ蓮華の泥中に生ずと雖も塵の染すること能はざるが如し。諸佛の報身及び我が報身もまたく是の如し。衣服・飲食・諸天の音樂を受用するに似たりと雖も心染着せず。是の想を作し已はりてその眞言を習へ。

(二)またつぎに以下は化身觀並びに眞言なり。

(二)またつぎに、瑜伽行者は化身の觀を作せ、諸の化佛が菩薩に告げてのたまふが如く、善男子、化身の眞言あり、曰はく、
唵、薩嚩嚩、娑謨、吽。

その時に、菩薩は前に依りて之を觀じて諸佛にまうして言さく、我れ今已に見る。佛の言はく、いかなるをか之を見るや。答へて言はく、種々の相狀ありて人聖道を具せり。或は一々の衆生ために各々身を變化し、或は一切の有情各々一佛と成ると觀す。我れ今これを觀するに即ち是れ化身なり。その時に菩薩この眞言を聞きて、時に應じて

三身の妙果を證獲す。彼の菩薩が化身の觀を作すが如く、瑜伽行者もまたく是の如し端座し正念にして金剛縛の印を結びて是の想を作せ、我れ今自らに種々の名號と種々の色相あり、或は都史多天より降りて母胎に入り、或は壽命成就し六根圓滿し、或は日月の出現するが如く、或は菩提樹下に座し、或は四種の魔軍を降し、或は梵天王の請を受けて法輪を轉じて諸の衆生を度し、或時は論議して諸の外道を摧き、或は切利天宮より三道の寶階を下だし、或は魔醯首羅天及び諸の惡鬼神を降伏せんがための故に、金剛怒菩薩の勝於三界大曼陀羅を變化し、或は教化し已畢はりて無等々寂靜法界に入る。瑜伽行者もまたく是の如く自身を觀すべし、此想を作し已はりて此の眞言を持せよ。

(二)金剛縛印是れ降三世の印なり

またつぎに、瑜伽行者は(二)金剛縛の印を結びてまさ此想を作すべし。譬へば十方世界の虚空の無盡なるが如く、我れ三身及び三眞實を觀じて、堅固常住なることまたく是の如し。一切衆生を利益し安樂せんがための故に日夜に常に是の如くの妙觀を作すべし。是の觀を作し已はりて眞言を持して曰はく、

唵、薩嚩嚩、怛佉誑多、毗薩儼滿怛盧陀、嚩日囉、底瑟吒。

○圓滿印。是れ
闍伽の印なり。

またつぎに、瑜伽行者は○圓滿の印を結べ。掌を仰けて右手の大拇指を以て小指の上を押し、餘の三指を豎立し、掌を以て水を盛り加持すること七遍し、先づ一分を以て頂上に洒ぎ、次に一分を以て之を飲み、後に一分を以て四方に散す。散じ已はりて、まさはに是の想を作すべし、我が堅固なること猶金剛の如し、一切衆生また長壽を獲と。若し此印眞言を以て水を加持して一切供養等の物に灑げば悉く吉祥最勝の清淨を得、毘那夜迦、諸の惡鬼神汚穢すること能はず、また便を得ず。その眞言に曰はく、
唵、嚩日嚩、馱迦吒。

瑜伽行者は、是の如く、是の如く日夜に觀察すれば何の利益をか得るや。謂く是の如く是の如くの、觀察に依りて、速疾に一切諸佛の秘密の境界に入ることを得。若し瑜伽行者が此觀を修する時は諸佛菩薩は常に衛護を加へ、心に諸の願あるものは皆圓滿することを得。諸佛菩薩來り就て前の如く彈指して告げていはく、善いかな、善いかな善男子・善女人、勤めて功力を加へて此法門を修せば一切の世間の最上勝果は、求めざるに自ら得、當來世に於て速かに菩提を證すべし。

○またつぎに、瑜伽行者は毗盧遮那三昧に入りて身を端しくし、坐を正しくして動搖

○堅牢金剛拳印
これは智拳印なり
導第一の智印と名
づく。または能滅
無明の黒闇印と名
づく。

○唵、吽、惹、翳、佐
此五字は全く守護
經と同じく五佛の
種子なり、雜部の
經なるが故に五字
は胎金交入するな
り。
○菩提印 智拳
印なり。

せしむること勿れ。舌を以て上の髻を挂へ、心を鼻端に繋けて自ら想へ。頂に五寶の天冠ありて天冠の中に五の化佛あり、結伽趺坐せりと。此觀を作し已はりて、即ち堅牢金剛拳の印を結べ。先づ左右の大拇指を以て各々左右の手の掌の内に入れ、又左右の餘の四指を以て堅く指を握りて拳に作れ、即ち是れ○堅牢金剛拳の印なり。次に左の頭指を豎立して其左の拳の背を當心の上に安じ、其掌の面を轉じて左邊に向へ、即ち右拳の小指を以て握りて左の拳の頭指の一節に著けよ。又右の拳の頭指の頭を以て右の拳の拇指の一節に挂へ著けてまた心前に安せよ、是を菩提印導第一の智印と名づけまた能滅無明黒暗の印と名づく、此印の加持によりて、諸佛は行者のために無上菩提最勝決定の記を授けたまふ。即ち是れ毘盧遮那如來の大妙智印なり。瑜伽行者は此の印を結び已はりて心を運じて想を作せ、一切の衆生は同じく此印を結ぶに、十方世界に三惡道八難の苦果なく悉く皆第一義の樂を受用すと。眞言を持して曰はく、
○唵、吽、惹、翳、佐。

またつぎに瑜伽行者は、此眞言を持して一一に五字の色相を觀察せよ。

○第一に菩提の印を結び、毘盧遮那如來の三昧に入りて、まさはに唵字の色と及び我が

(一) 破魔印 阿闍
觸地の印なり。

身と十方の世界と悉く皆白色なりと観すべし。若し瑜伽行者此の觀門を修するの時は自身と及び一切衆生との所有の無明煩惱惡業は自然に消滅して、行者及び一切の衆生は速かに成佛を得るが故に。

第二に(一)破魔の印を結べ、右の手は五指を舒べて以て地を按じ、左の手の五指を以て衣の角を執持して東方不動如來の三昧に入れ、まさに、吽字の色と及び我が身と盡東方界及び九方の無量の世界の諸佛菩薩と一切衆生と山川艸木と咸く皆青色なりと觀すべし。右の手の掌の面を以て用て地を按せよ。此の印能く諸魔鬼神一切煩惱をして悉く皆動せざらしむ。是を能滅毗那夜迦及び諸惡魔鬼神の印と名づくるなり。

(二) 施諸願の印
寶生尊の與願の印
なり。

第三に(二)施諸願の印を結べ、左の手は前に同じく、右の五指を舒べて掌を仰ぎて南方寶生如來の三昧に入り、まさに惹字の色と我が身と盡南方世界及び九方の無量の世界の諸佛菩薩と一切衆生と卉木山川と皆黄金色なりと觀すべし。即ち此の想を作せ、五指の間より如意珠を雨らすと、此の如意珠は天の衣服・天の妙甘露・天の妙音樂・天の寶宮殿を雨らして衆生は一切の所樂をして皆圓滿せしむ。この印を名づけて能令圓滿一切衆生所愛樂の印と爲す。能く衆生は一切の願を滿するが故に。

(三) 除散亂の印
彌陀の定印なり。

第四に(三)除散亂心の印を結べ、先づ左の五指を舒べて、臍輪の前に安じ、次に右の五指を舒べて左の掌の上に安ず。此印を結び已はりて西方の無量壽如來の三昧に入る。まさに翳字の色と及び我が身と盡西方界ならびに九方の無量の世界の諸佛菩薩と一切衆生と山川艸木と悉く紅蓮華色と作ると觀すべし。能く行者と及び諸の衆生をして散亂の心を除きて三昧に入らしむるが故に。

(四) 無怖畏印
空成就の經無畏の
印なり、左手前の
如くさは衣の角を
執持するなり。

第五に(四)無怖畏の印を結べ、左の手は前の如く、次に右の五指を舒べて掌の面を以て外に向けて、北方不空成就如來の三昧に入れ。まさに佐字の色と及び我が身と盡北方界ならびに九方の無量の世界の諸佛菩薩と一切衆生と山河大地と艸木叢林と悉く皆五色なりと觀すべし。何の因縁を以てか無怖畏と名く。謂く四義を備へて無怖畏と稱す。一には中方の毘盧遮那如來は能く無明の黑闇を滅して盤若波羅蜜等の盡虛空界の洞達の光明を出生す。二には東方の不動如來は能く一切の頻那夜迦惡魔鬼神等を摧きて悉く動せざらしむ。三には南方寶生如來は能く貧乏を除きて天の宮殿・天の飲食・天の衣服・天の音樂を施して悉く皆圓滿せしめたまふ。四には西方の無量壽如來は能く行者に三昧の大樂を與ふ。譬へば十方の虚空の無量無盡なるが如く、また衆生の無量無盡な

るが如く、また煩惱の無量無盡なるが如し。是の如く瑜伽行者の三昧の大樂もまたまた無量無盡なり。是の如く四義具足し圓滿せり。是の故に北方の不空成就如來は行者に告げていはく、善男子・善女人、汝怖畏することなかれと。この義に由るが故に無怖畏の印と名づく。

（二）四波羅蜜天
天は稱美の詞なり、本尊を本天と云ひ、聖天と云ひ、天と云ふ等皆其徳を稱美するなり、以下これに習ふべし。

その時に、毘盧遮那如來は金剛手菩薩に告げていはく、我れ今已に五佛の契印及び眞言を説く、次に（一）四波羅蜜天の印契及び眞言を説かん。またつぎに東北の角の金剛波羅蜜天は阿闍如來に屬す。印契・想・觀皆阿闍如來に同じ、行者印を結び眞言を持して曰く、
唵、薩怛婆、嚩日哩。

またつぎに東南の角の寶波羅蜜天は、寶生如來に屬す。印契・想・觀皆寶生如來の如し。行者印を結び眞言を持して曰く、
唵、囉駄那、嚩日哩。

またつぎに、西南の角の法波羅蜜天は無量壽如來に屬す。印契・想・觀みな無量壽如來の如し。行者印を結び眞言を持して曰く、

唵、駄嚩摩、嚩日哩。

またつぎに、西北の角の羯磨波羅蜜天は不空成就如來に屬す。印契・觀・想みな不空成就如來の如し。行者印を結び眞言を持して曰く、

唵、迦嚩摩、嚩日哩。

またつぎに、金剛手、我れ今已に内供養の法を説きつ、皆これ有相月輪等の觀なり。次にまさに無相の妙觀を演説すべし。瑜伽行者は端坐し正觀して、諦かに月輪を想へ、諸の契印を結びて歌舞・燒香・塗香・花鬘・園林・城邑・聚落・河海・雪山・黑山・日月・星宿・國王・大臣・比丘・比丘尼・善友眷屬より十地の菩薩・聲聞・緣覺・四攝・十善・六波羅蜜に至る。是の如く等の數の一切の相狀より微塵に至るまで悉く皆空寂なりとおもへ。若し夢中に是の如くの相狀を見ばまた歡喜することなかれ、設ひ十方の諸佛菩薩を見、其の前に現すと雖もまた歡喜することなかれ、唯自ら一心に佛果を成せんことを求めて無分別觀にして堅立不動なること須彌山の如くして一切の妄想分別を遠離せよ。若し瑜伽行者未だ悉地を得ざれば三十七尊の相狀を觀すべし。若し悉地を證せば相狀を取らずして無上大菩提心に安立せよ、若し菩提心の相を觀せんとせば、猶し月輪と水

精と乳色との如くすべし。此等の諸相は皆是れ凡夫の所觀の境なり。若し凡夫の人は此觀門を修するに五逆一闍提等の極重の惡業を造ると雖も皆悉く消滅す。時に應じて便ち五種の三昧を獲。一には刹那三昧、二には微塵三昧、三には白縷三昧、四には隱顯三昧、五には安住三昧なり。汝金剛手、我れ已に五方の如來と四波羅蜜との眞言印法を説きつ、また各別に金剛薩埵等の眞言及び印を説かん。まさに汝が爲めに坐位の次第を説くべし。

金剛外界品第四

その時に、金剛手菩薩は佛にまふして言さく、世尊唯願はくは之を説きたまへ、唯願はくは之を説きたまへ。我れ深く渴仰し願樂して聞かんと欲す。佛の言はく、善男子然も其印法は差別の名あり、五方の如來と四波羅蜜と十六菩薩とは皆印の名を得。餘の諸の契法は印の名を得と雖も差別あり。いかなる差別ぞ、謂く五方佛と四波羅蜜と十六菩薩とを名づけて眞印と爲す。金剛嬉等を影相の印と名づく。金剛燒香等を親近の印と名づく。金剛鉤等を名づけて智印と爲す。是の義を以ての故に差別の名あり。瑜伽行者身語意の印契眞言を以て本尊毘盧遮那如來を供養すれば諸の供養の中に最も

(二)此品の意を以て見れば則ち金剛と云ふは唯中央五佛のみ歟。

第一たり。

またつぎに、西北の角の羯磨波羅蜜の三昧より東方不動如來の四大菩薩を觀すべし。金剛薩埵の三昧正觀なり。其の名を金剛薩埵菩薩・金剛王菩薩・金剛愛菩薩・金剛善哉菩薩と曰ふ。其の毘盧遮那如來は中に當りて坐して面を東方に向けたまひ、東方の不動如來は面を西方に向けたまへり。四大菩薩もまたく是の如し。

(三)またつぎに、正しく金剛薩埵菩薩を觀せよ、瑜伽行者自ら觀せよ。我が身はこれ金剛薩埵なり、我が語もこれ金剛なり、我が心もこれ金剛なり。我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川河池草木叢林と悉く皆青色なりと。此の觀を作し已はりて即ち右の手を以て金剛拳に作りて大指を以て其の掌中に入れ、餘の四指を以て堅く拇指を握りて當心に安置し、次に左の手を以て金剛拳に作りて左腰の上に安せよ、此を金剛不退轉の印と名づく。此の手印を結びて是の如くの想を作せ、我れ今成佛を得ざるよりこのかた常に退轉せず、毘盧遮那如來を恭敬し供養すれば、即ち是れ金剛不壞不退三昧を獲得すと、不退轉の印を結びて眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、娑怛嚩。

(二)またつぎに正しく金剛薩埵を觀せよ、下は四方四親近、十六大菩薩の形像、并に契明を説くなり、佛の名あり、流印、五親近印、嬉戲歌舞、佛四波羅蜜、佛形像、親近印、香花燈塗、智印、鉤索鎖鈴なり。

またつぎに、金剛王菩薩を觀せよ。瑜伽行者自ら想へ我れは是れ金剛王なりと。我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川土地艸木河池と皆悉く青色なりと。此の觀を作し已はりて、次に手印を結べ、其兩手を以て金剛拳に作り二頭指を舒べて屈鉤の狀に成して、上に仰で並べ立て其の兩拳の中指及び無名指小指を以て指の背を相著けて立て心の上に安じてまことに此の念を作すべし。諸佛菩薩を鉤を以て引き來たすと。是を即ち名づけて金剛鉤王と爲す、此の契印を結びて眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉囉惹。

また次に金剛愛菩薩、瑜伽行者自ら想へ、我れは是れ金剛愛なり。我身の色と、及び諸佛菩薩と一切衆生と、十方世界の山川、河池、土地、草木みな悉く青色なりと。此の觀を作し已て次に契印を結べ。其の二手を以て金剛拳を作り、想へ左拳は弓を把り右拳は箭を執り、慈悲の眼を以て一切の魔、貪瞋痴等一切の煩惱を射ると、この印を名けて滅瞋恚の印と名く。何の因縁を以てか金剛愛と名くる、謂くこの菩薩能く行者の所愛樂を施すが故に、此の契印を結びて眞言を持して曰く、
唵、嚩日囉、囉誑。

またつぎに、金剛善哉菩薩を觀せよ。行者自ら想へ、我れは是れ金剛善哉なりと。我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界山川河池艸木叢林と皆悉く青色なりと。此の觀を作し已はりて次に契印を結べ、其兩手を以て金剛拳に作り、先づ左の拳を以て右の臆の上に安じ後に右の拳を以て左の臆上に安じ、定慧の二は是れ法なり。金剛拳を以て臂を交へて心に束するは是れ精進力なり。即ち左右の拇指と頭指とを舒べて三遍彈指せよ。是れ歡喜の相なり。若し此印を結べば即ち無明の城を出離することを得るが故に、此の契印を結びて眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、娑努。

またつぎに東方の金剛善哉菩薩の觀より起ちまことに南方の金剛寶の觀門に入るべし。謂く南方の寶生如來の四大菩薩を觀せよ。其名を金剛寶菩薩・金剛威德菩薩・金剛幢菩薩・金剛笑菩薩と曰ふ。南方寶生如來は面を北方に向く、四大菩薩もまたく是の如し。行者自ら想へ、我れはこれ金剛寶なり、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川草木と皆黄金色なり。此の觀を作し已はりて次に印契を結びて其の兩手を以て金剛拳に作りて二拳の面を以て兩肩の上に安じ、また是の觀を作すべし。今

は我れ諸佛菩薩衆生のために灌頂すと。此契印を結びて眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、囉怛那。

またつぎに金剛威徳菩薩を觀せよ。行者自ら想へ、我が身はこれ日光天子なり、刹那
頃に於て悉く能く一切衆生の内外の黒闇を滅盡す、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切
衆生と十方世界の山川河池艸木叢林と皆黄金色なりと。是の想を作し已はりて次に契
印を結び、其兩手を以て金剛拳に作り、此兩拳を以て並べて心の上に安じ、左右の兩
拳を更互に輪轉して日の右轉するが如くせよ。是の如く三轉すればまさに日天の光明
輪と成るべきが故に、此契印を結びて眞言を持して曰はく、

唵、嚩日囉、提惹。

またつぎに、金剛幢菩薩を觀せよ。自ら想へ我が身はこれ金剛幢なり、一切衆生の所
愛樂の物を我が身の邊に雨らし、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の
山川草木と皆黄金色なりと。此觀を作し已はりて次に契印を結び、先づ兩手を以て金
剛拳に作り其拳の面を以て行者の面に向け左右の二拳を直く空中に立て、金剛幢の印
と名づく、一切衆生所愛の物を能く圓滿するが故に、此契印を結び眞言を持して曰は

く、
唵、嚩日囉、鷄觀。

またつぎに、金剛笑菩薩を觀せよ。行者自ら想へ、我が身は是れ金剛笑なり、我が身
の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川草木皆黄金色なりと。此觀を作し已
はりて次に契印を結び、其兩手を以て金剛拳に作り口の左右に安じて三遍微笑して先
づ拳の面を以て口の左右に安じて微笑せよ。次に拳の背を以て口の左右に安じて微
笑し、後に拳の面を以て口の左右に安じて微笑せよ。是の如くすれば能く十方の衆生
をして皆怡悦を獲しめ大安樂を受けしむ。此契印を結びて眞言を持して曰はく、

唵、嚩日囉、訶佐。

またつぎに、南方の金剛笑菩薩の觀門より起ちて西方の金剛法の觀門に入るべし。謂
く西方の無量壽佛面して東方に向ひたまふと、四大菩薩もまたく是の如しと觀せ
よ。行者自ら想へ、我れは是れ金剛法觀音菩薩なり、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生
と十方世界の山川草木と皆紅蓮華色なりと。此想を作し已はりて次に契印を結び、其
兩手を以て仰けて金剛拳にして先づ右拳を以て左の拳の上に安じて右轉すること一遍

せよ、次に左の拳を以て右の拳の上に安じてまた轉すること一遍せよ、また右の拳を以て左の拳の上に安じてまた轉すること一遍せよ、是れ金剛蓮華の印なり。能く衆生をして世間を厭離し出世法甘露の城に入らしむ。眞言を持して曰く、
唵、嚩日囉、駄嚩摩。

またつぎに、金剛利文菩薩を觀じて、行者自ら想へ、我れは是れ眞の金剛利なり、我れ能く一切衆生の貪瞋痴等を斷除す、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川河池草木叢林と皆紅蓮華色なりと。此觀を作し已はりて右の拳を舒べ出して即ち是の想を作せ、我れ今右の手に大利劍を執りて能く衆生の一切の煩惱を斷ずと、眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、底瑟那。

またつぎに、金剛因菩薩を觀じて、行者想を作せ、我れはこれ金剛因なり、我れはこれ世間の醍醐甘露なり、我れはこれ金剛大教法輪なり、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川河池草木叢林皆紅蓮華色なりと。此念を作し已はりて、金剛拳を結び二拳の面を以て並べて心上に安じ兩の拳の中指の中節を相著けて左右に更

互に輪轉すること三遍して、即ち是の想を作せ、我れ今三度金剛法輪を十方界に轉ずと。眞言を持して曰く、

唵、嚩日囉、翳觀。

またつぎに、金剛語言菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れはこれ金剛語言なり、我れ今能く一切衆生に蘇悉地の法を與ふ、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川河池草木叢林と皆紅蓮華色なりと。此想を作し已はりて、金剛拳に作りて、口の左右に安じて、往來の相を作すこと猶語言の如くせよ、此印を結べば能く一切衆生の語言に達す。眞言を持して曰く、
唵、嚩日囉、麼沙。

またつぎに、西方の金剛語言菩薩の觀より起ちてまさに北方の金剛羯磨の觀門に入るべし。謂く北方の不空成就如來の四大菩薩を觀するなり。其名を金剛羯磨菩薩・金剛護菩薩・金剛藥叉菩薩・金剛拳菩薩といふなり。行者想を作せ、我れは是れ金剛羯磨なり、我れはこれ金剛不空必定して果を得るはなり。我れは種々の事業を能く成就す。我れは是れ能く一切處に到る、我れは是れ能く種々の事を作す、我れは是れ能く妙事業

を成就す、我が身の色と及び諸佛菩薩と、一切衆生と十方世界の山川河池草木叢林と、皆悉く五色なりと。是の想を作し已て、金剛拳を結びて舞を作すこと三遍せよ。是を種々事業の印と名く。所以は如何ん、謂く能く種々の業を成就す。眞言を持って曰く、
唵、嚩日囉、羯嚩磨。

またつぎに、金剛護菩薩を觀じて行者想を作せ。我はこれ金剛護なり、我はこれ金剛甲なり、堅實牢固にして破壊すべからず、我はこれ金剛精進なり、我はこれ十方無量の一切衆生を守護して無怖畏を施す、我が身の色と及び諸佛菩薩と一切衆生と十方世界の山川泉源草木叢林と悉く皆五色なりと。此想を作し已て、金剛拳を結び、兩の頭指を舒べて、臍の上に安じ、拳を兩邊に分て、背の上に到らしめ、復背の上より還て臍輪に到らしめ、兩の頭指の端、相輪らすこと一遍、自ら此想を作せ、是れ繫縛の義なりと。次に二頭指を前の如くして心に當て、背に到らしめ、却き還て背に至り、二指の端を以て相輪らすこと一遍して、自ら此想を作せ。繫縛の義と。次に復頭に至り亦また是の如くし、自ら此の想を作せ。また繫縛するが如しと。眞言を持って曰く、
唵、嚩日囉、囉吉叉。

またつぎに、金剛藥叉菩薩を觀じて、行者想を作せ、我れは是れ金剛藥叉なり、所謂諸佛の大方便力神通變化なり。我が口の中に金剛利牙あり、一切の見る者、大恐怖を懷き善く能く一切の魔怨を摧滅す、我が身五色なり、諸佛菩薩と一切衆生と十方世界もまたみな五色なりと。此想を作し已はりて、金剛拳を結、左右の小指相鉤して口に著け、二頭指を舒べて左右の頬に安せよ、是れ二牙相なり。眞言を持って曰く、
唵、嚩日囉、夜吉叉。

またつぎに、金剛拳菩薩を觀じて、行者想を作せ、我れはこれ金剛拳なり、我れ能くまた諸の衆生の前に示現す、我れはこれ能く金剛の繫縛を解脱する者なり、我が身の色と諸佛菩薩と、一切衆生と十方世界とまた皆五色なりと。此の想を作し已はりて、眞金剛拳の印を結べ、左右の小指を更互に相鉤して、二拳の面を合はせ堅く握りて緩くすることなかれ、これ眞金剛拳の印なり。眞言を持って曰く、
唵、嚩日囉、散尼。

國譯諸佛境界攝眞實經卷中終

國譯諸佛境界攝眞實經卷下

罽賓國三藏沙門般若 詔を奉じて譯す

○金剛界外供養品第五

○當經には三十
七尊皆自身なりと
觀することなき
玉ふ、又此品の中
には十二供養の印
言を説きたまふ。

その時に世尊、金剛手菩薩摩訶薩に告げて言はく、我れ今已に五佛如來・四波羅蜜・四方十六大菩薩の觀門の二十五の契印眞言法則を説きたり。次に金剛嬉等の十二の菩薩外院の供養を演説すべし。佛道を求むる者を利益し安樂にして現に悉地を獲しめ、まさに菩提を證せしむべし。

またつぎに、瑜伽行者は此の北方の金剛拳菩薩の觀門より起ちて東北の角の金剛嬉戲菩薩の觀門に入りて自ら此想を作せ。我れは是れ金剛嬉戲なり、我れ今能く十方世界の諸佛菩薩衆生に嬉樂を與ふと。此想を作し已はりて金剛拳を仰げ兩の膝の上に安じて目を閉ち廻轉して遍く十方の諸佛菩薩を禮せよ。是の印を名づけて金剛嬉戲と爲す、その眞言に曰く、
唵、嚩日囉、羅洗。

○十方諸佛云云
四佛を供するを爾
準すべし、下之れに
ば即ち十方、合すれ
ば乃ち四佛なり。

またつぎに、東南の角の金剛鬘菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れは是れ金剛鬘なり、我れ今此の一切の花鬘を持って○十方の諸佛菩薩を供養すと。この想を作し已はりて、金剛拳を結び、並べて額の上に著け、また兩拳を分ちて引て腦後に至り兩拳更互に相輪らすこと兩遍、輪らす毎に一遍相結ぶ想を作せ。自ら此想を作せ、花鬘を繫縛すと、これを金剛鬘の印と名づく。

その眞言に曰く、
唵、嚩日囉、麼囉。

またつぎに西南の角の金剛歌菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れは是れ金剛歌なり、我れ今十方三世の諸佛菩薩を歌讚したてまつり、微妙の聲を發し、口中より出で、十方無量の世界に充滿すと。此想を作し已りて金剛拳を結びて口の上に安じて、漸漸に引き出すべし。即ち是れ歌讚音聲の印なり。その眞言に曰はく、
唵、嚩日囉、覓底。

またつぎに、西北の角の金剛舞菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れは是れ金剛舞なり、我れ金剛舞を作して、十方の無量の世界の三世の諸佛・一切の菩薩を供養すと。是の想

を作し已はりて、金剛拳を結び兩臂舞を作す、即ち是れ金剛舞の印なり。此舞印を作せば、諸佛菩薩即ち大に歡喜して一切の願を與へて行者の身を護る。其の眞言に曰はく、

唵、嚩日囉、徐盧底曳。

またつぎに、行者此の金剛舞の觀門より起ちて東北の角の金剛燒香菩薩の觀門に入りて、自ら此想を作せ。我れは是れ金剛燒香雲なり。十方無量の世界に充滿して虚空の中に於て十方の諸佛菩薩に供養す。此想を作し已はりて、金剛拳を結びて二拳を相並べ拳の面を下に向け、兩拳を舒べ出して是の想を作せ。無量の香雲印より上に出づ。即ち金剛燒香の印と名づく。此印を結べば即ち能く内外所有の一切の煩惱を燒滅して清淨心を得。其の眞言に曰はく、

唵、嚩日囉、怒閉。

またつぎに東南の角の金剛妙華菩薩の觀門に入りて、行者想を作せ。我れは是れ金剛花なり、我れ今十方の無量無邊のあらゆる無主の一切の妙花を採取して、十方の諸佛菩薩を供養したてまつると。是の想を作し已て、金剛拳を結び二拳を相並べて、仰で

上に舒べ出す、是れ金剛花の印なり。此の印を結ぶに何の利益がある、一切の重障を摧滅せんと欲するが爲めなり。その眞言に曰はく、

唵、嚩日囉、補澀閉。

(二) 金剛燈印、常
には二大を立つ、常
し。今は二大の沙汰な

またつぎに、西南の角の金剛燃燈菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れは是れ金剛燈なり、我れ今無盡の燈を燃して十方無量の世界の虚空の中に充滿して、十方の不可説不可説の無量無邊の諸佛菩薩を供養す。此想を作し已はりて、金剛拳を結びて兩拳を相合して心の前に近げよ。即ち(一)金剛燈の印と名づく。此燈の印を結びて何の利益があるや、現身に如來の五眼を成就す。その眞言に曰はく、

唵、嚩日囉、膩閉。

またつぎに、西北の角の金剛塗香菩薩を觀じて、行者想を作せ。我れは是れ金剛塗香なり、我れ今最上の白檀の塗香を以て十方無量の世界の大虚空の中に充滿して猶し大雲の世界に遍滿するが如く十方の諸佛菩薩に供養し奉ると。此想を作し已はりて、兩つの金剛拳を以て左右の頸より胷腹を摩せよ。即ち此念を作せ。我れ今此の牛頭栴檀の最上の塗香を持して十方の諸佛菩薩及び衆生の身に塗りたてまつると。その眞言に曰はく、

唵、嚩日囉、俄備泥。

（二）正南方金剛鉤
南西北東の順次に
鉤索鎌鈴を觀す北
方に向つて行者の
前を始て爲し、順
次にして行者の右
を終りて爲す故

またつぎに、行者此三昧より起ちて（三）正南方の金剛鉤菩薩の觀門に入りて、自ら此想を作せ。我れは是れ金剛鉤なり、我は是れ諸佛菩薩の方便智慧の大金剛鉤なりと。此想を作し已はりて兩手に金剛拳を結びて、左右の頭指を舒べて少し屈して相ひ鉤し、又左右の小指を舒べて少し屈して其二小指の兩つ頭相ひ向へて、三遍一切の諸天及び鬼神等を鉤召して道場に入らしむ。纔に此印を結べば能く行者をして大勢力を得て一切諸天神等を驅使し衆事を營辨せしむ。眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、俱奢。

またつぎに、行者此三昧より起ちてまさに正西方の金剛索菩薩の觀門を觀じて、自ら此想を作すべし。我れは是れ金剛索なり。さきに鉤召せる一切の諸天及び鬼神等在て其の未だ來らざる者をして道場に入らしめ、我れ今此の大金剛索を以て堅く縛して放たすと。此想を作し已はりて、（三）即ち前の印を以て、金剛鉤の印の頭指中指無名の三指を改めて、用ひて拳に作り、左右の大指を以て更互に相鉤して、左右の小指少屈して相向へよ。是を堅縛諸衆生の印と名づく。眞言を持して曰はく、

（二）前の印を以て
云云此印は外縛
拳に似たり、左右
各別にしては成じ
難し、更に尋決す
べし。

唵、嚩日囉、波奢。

またつぎに、行者此三昧より起ちてまさに正北方の金剛鎌菩薩の觀門を觀すべし。自ら此想を作せ、我れは是れ金剛鎌なりと。此想を作し已はりて、即ち手印を結べ。先づ左右の母指頭指を以て更互に相鉤すること鎌鎌の如し、左右の餘の指を皆以て拳に作れ是れ金剛鎌の印なり。纔に此印を結べば能く行者をして善く教習の法を與へしむ。眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、娑普吒。

またつぎに、行者此三昧より起ちて、まさに正東方の金剛鈴菩薩の觀門を觀すべし。自ら此想を作せ、我れは金剛鈴なりと。此想を作し已はりて、まさに金剛鈴の印を結ぶべし、左右の指の頭を以て、右を以て左を押してみな各相又へて、猶鈴の狀の如くせよ。纔に此印を結べば即ち諸佛菩薩の愛念を得。眞言を持して曰はく、
唵、嚩日囉、譚修吒。

そのときに、毘盧遮那如來は、此の三十七尊の眞實の契印祕密の法を説き已はりて、金剛手等の諸の菩薩に告げて言はく、若し國土・城邑・聚落ありて、一の淨信の男子女

人ありて、大慈悲心を起して四恩を報せむが爲めに道場を建立して是の法を修せば、其國中に於て七難有ることなく、國王王子日夜に廣大の福壽を増長す。ゆえいかんとなれば、是の道場の地上より金剛際に至り微塵に至るまで、國王に屬するが故に譬へば寶珠を宅中に安ずれば災難を辟除し七寶を現前するが如し。此の妙經典もまたく是の如し。若し法式に依りて此の祕密を修すれば所在の國土安穩豊樂なり。若し善男子善女人ありて、六神通力を得て一念の頃に普く十方無量の佛の所に詣でて、衆中に來集して上首と爲りて諸佛に正法輪を轉じたまへと勤請し、諸の衆生の爲めに導師を作らんと欲せば、初夜後夜に道場の中に入りて、まさに念を所歸の本尊に繋けて法に依りて觀行すべし。現身に必ず廣大の福智を得、衆生を利益するに等比あること無けん。萬億劫を経とも惡道に入らず恒に善友に遇ひて常に退轉せず。彌勒の會の中にて佛の授記を得、速かに阿耨多羅三藐三菩提を證す。善男子、若し衆生ありて此祕法に遇ひて空間に住して説の如く修行すれば、現身に極歡喜地を證得す。いかにいはんや世間の福德果報をや。若し菩薩ありて是の法を修せずして福德果報をや。若し菩薩ありて是の法を修せずして佛果を證すと云は、必ず是の處無けん。是の法をば名づけて願に菩提

二、切利天王主
王主一字の中恐ら
くは一字剩る歟。

此品には五佛の色
相を説きたふ。

を證する眞實の正路となす。そのときに大會の無量の天人、佛の所説を聞きて、悉く道果を證す。大梵天王、切利天王主、不退轉陀羅尼を證して、記別を受くることを得無量百千萬億の天人遠塵離垢して法眼淨を得たりき。

諸佛境界攝眞實經修行儀軌品第六

その時に金剛手菩薩摩訶薩、佛の廣大の自在神力を承けて、眞實瑜伽の甚深祕密を説きたまふ。行者まさに目を閉ぢ寂然にして諦かに想ふべし。眞實祕密教主の最勝最尊にして大自在を得たまへる大慈大悲毗盧遮那如來は、須彌頂の善法堂の中に在まし、十六俱底那庚多等の菩薩とともに眷屬具足し圓滿せり。頂上の天冠に五佛端坐したまへり。一切の瓔珞を以て佛身を莊嚴せり。五種の相あり、一には寂靜の相、二には瞋怒の相、三には歡喜の相、四には清涼の相、五には種々相なり。五方の如來は其色各異なり。第一は白色、第二は青色、第三は金色、第四は紅色、第五は雜色なり。東方の門首は帝釋の坐位、南方は琰摩羅王の坐位、西方は水天の坐位、北方は毘莎門天王の坐位、東北の角は大自在天の坐位、東南の角は火天の坐位、西南の角は羅刹天の坐位、西北の角は風天の坐位、上方は大梵天の坐位、下方は堅牢地神の坐位なり。我

れ今已に坐位の次第を説けり、後にまさに一一に眞言を説くべし。

因陀羅野娑婆訶 帝釋 眞言 阿祇那曳娑婆訶 火天 眞言

夜摩野娑婆訶 珠摩羅 眞言 囉哩啼娑婆訶 羅利天 眞言

嚩嚩那耶娑婆訶 水天 眞言 嚩野謎娑婆訶 風天 眞言

俱謎羅野娑婆訶 毘沙門 眞言 伊舍那耶娑婆訶 大自在 天眞言

阿膩底也野娑婆訶 日天子 眞言 捨伽陀羅野娑婆訶 月天子 眞言

捺羅那夜娑婆訶 地天 眞言 麼囉阿摩寧娑婆訶 梵天王 眞言

またつぎに、瑜伽行者道場の地を求めんと思はば、塚間・沙石・瓦礫・鹹鹵・荆棘・穢濁の地及び虎狼、諸の惡難處とを遠離せよ。是の如き地を吉祥と名づけず。若し白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・鳧・雁・鴛鴦・蓮花水地に有らば、是の如く等の地は道場を立つるに堪へたり。右の手の中の三指を以て少しく屈して大指を以て頭指の中節を捻じ、小指を以て無名指の中節を捻じ、水を盛り加持して四方に散灑せよ。眞言を持して曰く、
唵、嚩日囉、馱迦吒。

またつぎに、行者水を加持し已はりて、淨地に灑ぎて、便はち道場を立て、釋迦如來

曼荼羅道場儀軌を説きたまふに、廣狹大小、三千五百あり。第一の道場は一千由旬、是れ金輪聖王の持念の儀軌なり。次に五百・一百・五十・一十なるあり、是の如く漸く小にして、掌の中、爪甲の量にても道場を建立するに皆悉地を獲。若し第一の道場を建立せんと欲せば、金剛縛の印を結び、次に縛印を改め左右の中指を立て、少しく屈して更互に二中指の端を相捻して眞言を以て加持せよ。一切の處に於てみな通用することを得、或時には行者洗浴するに及ばず。此の法印を以て加持し眞言すれば、即ち清淨なることを得。其の眞言に曰はく、
唵、娑嚩婆嚩輸馱薩嚩馱嚩摩薩嚩婆嚩度吽。

またつぎに、瑜伽行者道場を建てんと欲せば先づ四方の界を立てよ。若し多人持念せば即ち四門を用ゐよ、若し少人持念せば意の量る所に隨へ、門外の左右に各々の柱を立てよ、一一の柱の上に五の明鏡を安せよ、満月輪の如し。左右に種々の瓔珞及び花鬘を安置せよ、七寶の香爐、金銀の燈燭を以て種々に莊嚴し、恒に鬱金・白檀・龍腦・沈水等の香を焼け、麝香を用ふる勿れ。又白拂孔雀翠羽を以て各々寶鈴を安じて左右に分列せよ。種々の牀榻、種々の裯褥、種々の音聲、種々の歌舞、種々の飲食を以て

至誠に供養せよ。道場の中に毘盧遮那佛の像を安じて其佛前に舍利を安置せよ。此の曼荼羅を金剛界と名づく。またつぎに建立すること既に畢ぬれば、瑜伽行者まさに金剛縛の印を結びて五輪を地に著け、方毎に四たび拜すべし。第一に西方を禮拜し、第二に北方を禮拜し、第三に東方を禮拜し、第四に南方を禮拜せよ。四方を禮すること已はりなば、却りて本位に就て金剛合掌の印を結びて身の四處を印せよ。一には頂、二には口、三には額、四には心なり。四處を印じ已はりて、まさに此想を作すべし。我れ今身を以て、十方三世の諸佛諸大菩薩に布施したてまつる、今日より始めて未來に至るまで永く僮僕と作りて、生々世々に常に三寶に依らん。終に天魔外道等の法に歸依せず。我れ無始の生死よりこのかた作る所の五逆及び無間の罪を、今十方三世の諸佛諸菩薩、一切の賢聖、諸の衆生の前にむかひて心を至して懇切に發露懺悔して敢えて覆藏せず、未來の罪を更に敢えて造らざらん。普く願はくは、十方の諸佛菩薩、我が懺悔を受けて、速かに最勝の悉地を獲得せしめたまへと。

諸佛境界攝眞實經建立道場發願品第七

その時に金剛手菩薩摩訶薩、諸の大衆に告げて言はく、瑜伽行者金剛合掌を作りて、

(一) 此品には道場を建立し作法するに名開利養を離れて無上菩提の爲めにせよと説きたまふ。

明かに衆聖を想ひて、此の想を作せ。我れ今道場を建立して、十方の一切の諸佛菩薩を供養して、誠を至して供養したてまつる。勝負心無く、國王と作らんことを求めず、名利を求めず、生天殊勝の妙樂を求めず、自身の種々の利益を求めず、まさに至誠に發願すべし。我れ今方に隨て建つる所の道場に於て、或は見る者あり、或は聞く者あり、或は覺する者あり、或は知る者あるをば皆殊勝の妙果を獲得せしめ、一切の所願、心に隨はずと云ふこと無けん。願はくは我れ此の身生々世々に、譬へば如意珠の能く衆寶を雨すが如く、所有の愛樂する財・法の二寶一切衆生に充足して乏しき所なからしめて、速かに無上菩提を證せんと。

諸佛境界攝眞實經持念品第八

その時に金剛手菩薩摩訶薩、大會の衆に告げて言はく、瑜伽行者一切如來の三昧及び一切智々を成就することを得んと欲せば、まさに是の曼荼羅の成佛の法を修習すべし、此の法を修する時は先づ金剛降伏の半跏趺座を作すべし。身を端くし念を正しくして、右の足を以て左の足を押せ、眞言を持つる時に心をとめ凝寂にして口に眞言を習へ、唯自らの耳に聞きて他をして解せしむることなかれ。心中に一一の梵字を觀想して、

(一) 此品には三種の修行門を五部の念珠の法を執するに五部の念珠の差別あるに依りて功徳に輕重あるを念本尊を用ひずして念誦する法等を説きたまふ。

了了分明にして錯謬せしむることなかれ、持習の時遅からず速からず、即ち是を名づけて金剛語言と爲す。

またつぎに、持習の法多種ありと雖も、今まさに略して説くべし。秘密の門の持習の要に其の三種あり。一には數、二には時、三には形像なり。いかなるを數と名づくる、謂く眞言を習ふ一十・一百・千・萬等の數なり。いかなるをか時と名づくる、所謂七日・一月・一年或はまた一生より成佛までなり。いかなるか形像か、謂く觀行を習ひて、光明を放たんことを求め若し光を放たざれば即ち休息せざるなり。是の如くの三事、行者の意に隨ひてその所願の如く法に依りて修持せよ。

またつぎに、念珠を校量するに五部の差別あり。若し佛部を持せば菩提子を用ゐよ。若し金剛部を持せば金剛子を用ゐよ。若し寶部を持せば金銀コンゴウ・頗黎ハハ種々の諸寶を用ゐよ。若し蓮花部を持せば蓮花子を用ゐよ。若し迦嚩摩部を持せば種々間錯カンサツの雜色の寶珠を用ゐよ。

またつぎに佛部の持念を作すには右の拇指頭指を以て念珠を執持せよ。餘の指は普く舒べよ、若し金剛部の持念には。右の拇指中指を以て念珠を持せよ。若し寶部の持念

(二)頗黎 此には水玉と云ふ

には、右の拇指無名指を以て念珠を執持せよ。若し蓮花部の持念には大拇指無名指小指を以て念珠を執持せよ。若し迦嚩摩部の持念には上の四種を用ゐて執持することを皆得。

またつぎに、所獲の功德を校量せんには、若し香木等の珠を以てすれば一分の福を得、若し鍮石銅鐵を用ゐば二分の福を得、若し水精眞珠を用ゐば一俱胝分の福を得。若し蓮子金剛子の珠を以てすれば、二俱胝分の福を得。若し種々の諸寶を間錯すると及び菩提子とを用ゐば無量無邊不可說不可說分の福を得。即ち是れ過去の無量恒河沙の諸佛の所説なり。一百八數を念珠の量と爲すべし。

またつぎに行者、金剛縛の印を結びて胷の前に當て、心を鼻端に繫で眞言を持して曰

唵、謨計沙摩、嚩日囉。

瑜伽行者は此眞言を持して、自ら此の想を作せ、我が心の中に一切智あり、洞達して無礙なり。

またつぎに、若し行者貧乏にして、本尊の形像を圖畫することを辨せずんば、但だ隨

て一の佛像或は菩薩の像を取りて、佛塔の前に對して心を繋けて住して、佛像を想念して、心散亂せずして常に寂然なれば即ち賢聖と異なることなし。若し心を鼻に繋ることを得るを最上品とす。便ち諸聖人に同じて定んで異なることなし。

諸佛境界攝眞實經護摩品第九

その時に金剛手菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて、一切の瑜伽を修する行者の爲めに眞實の内護摩の法を演說せん。永く煩惱の賊と及び一切の鬼神を調伏し滅せんが爲めの故に、是の護摩を作して三昧を増長すべし。各々本尊并に本方の色を觀すべし。若し佛部の成就の護摩を作さば、瑜伽行者は諦かに毘盧遮那如來を觀せよ。我れは即ち是れ金剛薩埵なり、其身中より白光を流出すること淨瑠璃の如し、内外明徹せり、月輪の中に於て結跏趺坐せり、我が身中より光燄湧出して即ち圓光と成りて自身を莊嚴すること最勝第一なり、一切の衆生悉く皆喜び見ると想へ、十方の諸佛皆悉く白色にして猶三千大千世界の微塵數の量の如くに我が身中に入ると想へ、是れを寂靜護摩の法と名づく。

またつぎに、若し調伏護摩の法を作さば、まさに東方阿閼如來を觀すべし、其身中よ

此一品は初めより終りまで、末傳法の者を除く、此品は五部の内護摩を説きたまふ。謂く息災、降伏、求財、敬愛、増益なり。

り青光を流出して、衆徳圓滿して東方の月輪の中に坐して結跏趺坐せり。圓光巍巍として自身を莊嚴すること十方世界に最勝第一なり。一切の菩薩は金剛怒と作りて我が心中に入ると想へ、煩惱と諸の鬼神を摧滅するが故に。若し求財の護摩の法を作さば、まさに南方の寶生如來を觀すべし。想へ、一切の菩薩皆悉く歡喜して、我が身中に入り自身の中より金色の光を流出し、瑩淨圓滿にして南方の月輪の中に坐し、結跏趺坐して其身を莊嚴せり。衆生見むことを喜ぶ、一切の煩惱をして心を亂ること能はざらしめ一切の惡鬼敢えて親近せず。

またつぎに、愛敬の護摩を作さば、行者まさに西方の無量壽佛を觀すべし。其身中より紅光を流出して瑩淨圓滿して西方の月輪の中に坐して結跏趺坐せり、衆生見んことを喜ぶ。自ら此想を作せ、十方世界の一切の菩薩、三千世界の微塵等の數の如く百億の寶、無數の瓔珞、無量の天衣、種々の寶物を以て其身を莊嚴すること猶無比天女の形狀の如し。悉く我が身に入りて能く國王大臣一切衆生の見る者をして悉く皆歡喜せしむ。またつぎに、若し増益の護摩の法を作さば、まさに北方の不空成就如來を觀すべし。其身中より五色の光を流出し、瑩淨圓滿にして北方の月輪の中に坐し結跏趺坐して其

身を莊嚴せり、衆生見むとを喜ぶ。十方世界の諸佛菩薩、三千大千世界の微塵等の數の如く五色の光を放ちて我が身中に入り、能く一切の事業をして通達せずと云ふことなからしむと想へ。

是の如く所説の内護摩の法は、過去の諸佛已に説き、未來の諸佛まさに説くべし。現在十方の一切世尊、現に今演説したまふ。若し觀行者常に是の如くの護摩の法を作せば、三昧・善法・福德・智慧、日夜に増長し、一切の諸佛行者に親近して摩頂し護念したまふ。若し瑜伽行者、能く是の如くの内護摩の法を作さば、現身に一一の佛刹微塵等の數の諸佛世尊を見ることを得。是の諸の如來行者を哀愍して一切の悉地を成就することを得しめん。諸天の宮殿・寶閣・金臺、諸天の甘露寶器に盈滿せる、乃至阿修羅宮にても皆心に隨ひて行者の前に現することを得。譬へば摩尼寶珠の虚空の中に懸りて能く一切衆生の愛樂の物を雨らすが如くなり。此の妙瑜伽最勝救王もまたく是の如し、能く行者をして一切の世出所の願を圓滿せしむ。瑜伽行者は常に想願すべし、我れ無始よりこのかた作る所の一切種々の善根を以て悉く皆十方無量の世界の一切の地獄・餓鬼・傍生・修羅・八難の受苦の衆生に廻施して、所有の罪障を願くは皆消滅して如意の

樂を得しめん。此の諸の衆生は所有の衆罪を以て諸苦を受くべきをも、我れ此身を以て願くは代はりて受くべし。一切衆生の罪業既に除かれて悉く成佛すべし。眞言を持して曰く。

唵、薩嚩訶、俱舍羅、謨羅備波利、那摩耶弭。

(一)その時に灌頂は灌頂の説段なり

(二)その時に灌頂の阿闍梨、弟子に告げて曰く、汝若し此祕法を修せずんば三摩耶を破して生々世々に佛種を斷滅せん。設ひ惡人ありて十方界の一切の諸佛・諸大菩薩・佛眼血肉を殺すも此罪は尙輕し、汝が罪は彼の五逆の衆生に過ぎ、地獄に墮落するも尙出期あり。若し人、三摩耶の法を破壊せば地獄に入りて出期あることなし。いかなるを名づけて三摩耶の法とするか、謂く大瑜伽眞實救王なり。いかなるをか名づけて破三摩耶とするか、謂く凡夫ありて唯能く受くることありて修行すること能はず。若し法を求むる人にして五種の灌頂法を受けざる者には、此の瑜伽の法を授くべからず。若し阿闍梨、灌頂を授與せん時は、先づ須く三月其心を觀察して、然して後に灌頂の法を授與すべし。若し善心ありて深く慚愧を懷き、調柔にして疾無きを呼びて法子とな

す、然して後に傳授せよ。世間の父子は一生を繼嗣す。今法子と爲して能く佛種を紹ぐ、夫だ成佛せざるより來た慈念を斷せず父の子を愛するが如く、子の父を敬ふが如くすべし。是の如きを名づけて三摩耶の法と爲す。金剛阿闍梨即ち弟子の爲めに眞言を説きて曰はく。

唵、阿那、三摩耶、膩賀羅、謎毘阿、吽發吒。

またつぎに、金剛阿闍梨、弟子の爲めに此眞言の深義を説きて、若し人三摩耶の法を破せば是の因縁に由りて其身破壊して碎ること微塵の如くならん。彼の人福德自然に滅盡すること猶朽樹の枝葉を生ぜざるが如くならん。若し金剛阿闍梨、弟子の爲めに灌頂を授けんと欲はん時には、まさに先づ教へて此眞言を習はしむべし。

唵、薩魯嚩、怛他藥多、補惹迦魯摩那、阿觀摩難、你哩耶、多耶頭。

また次に金剛阿闍梨、彼の弟子の爲めに此の眞言の所詮の義を説け、我れ今身を以て一切の佛に施して爲めに種々の供養の事を作すが故に、金剛阿闍梨、次に弟子に教へて眞言を習はしめよ。眞言に曰く。

薩魯嚩、怛他藥多、嚩日囉、迦盧摩、俱魯輪。

また次に阿闍梨、彼の弟子の爲めに眞言の義を説け、願はくは一切如來我れを加護して我れに金剛の事業を教へよ、金剛手菩薩の如くにして平等にして異なることなけん、乃し大菩提道を證せざる其中間に於て三寶に皈依すべしと。此願を發こし已て赤衣を著けしめ緋帛を眼に覆ひて腦後に繫けよ、時に彼の弟子金剛手の印を結べ、十指頭を以て更互に相又へて皆掌の中に内れて右を以て左を押す、此印を結びて、金剛の阿闍梨、弟子をして此の心中、心の眞言を習はしむべし。曰く。

娑摩耶薩觀婆儻。

また次に阿闍梨、弟子に教へて手印を結ばしめよ、前の金剛手の印を改めて、左右の中指を豎てよ、花鬘を繫て弟子を引導して道場の門に到りて、教へて入道場の眞言を習はしめよ。曰く。

娑摩野吽。

此の眞言を持し已る時に阿闍梨、弟子の手を執りて道場に引入せよ。道場に入り已らば便ちまさに告げて言ふ、汝今、一切如來の種族の中に入ることを得、我れまさに汝が心中に金剛の智を生せしむべし。此の智を獲るが故に一切如來の法身を證得す、いかに

いはんや世間の一切の悉地をや。善男子、汝道場に入らざる行者の爲めには此の法を説くことなかれ、若し此法を説かば三昧耶を破せんと。是の如く告げて阿闍梨、金剛薩埵の印を結びて、其兩拳を舒べて並べ仰げて弟子の頂上に安じて告げて言ふべし。これは是れ三昧耶なり。若し汝、未だ灌頂を受けざる人の爲めに此の法を説かば、金剛薩埵はまさに汝か頭を破るべしと。此の語を告げ已て、金剛合掌の印を結べ。秘密の眞言に曰く。

唵、嚩日嚩訶那迦吒。

此の眞言を以て水を加持し已て弟子の頂に與へて、爲めに持念秘密の深義を説け。汝願はくは、此の水を以て金剛薩埵汝が身中に入りたまへと。また次に金剛の阿闍梨、弟子に告げて言ふべし。今より以往、汝我れを見ること金剛手菩薩の如くにして異ることなかれ、我が言に違することなかれ、我れを輕慢することなかれ。若し汝我れに違せば命終の後に阿鼻獄に入らんと。

是の如く告げ已て阿闍梨、發願して言ふべし、一切如來は無礙力を以て大曼陀囉を加護して能く金剛薩埵をして速疾に弟子の身中来入せしめよ。是の願を發し已て、此の

召入本尊の眞言を習ひて曰はく。

唵、嚩日囉謎奢訶。

眞言を持し已んなば金剛の阿闍梨、速疾に金剛薩埵の印を結びて、此偈を説きて言く。

此は是れ金剛三昧耶なり、また金剛大薩埵と名づく。

刹那の頃に於て不退を證す、最勝堅牢智の金剛なり。

此の偈を説き已て金剛の阿闍梨、先きに結ぶ所の金剛薩埵の印を以て、左の手の拳印を弟子の頂に安じて瞋怒の眼を作し弟子を視て想を作して入と言ふべし。即ち前の眞言を習はしめよ。此は是れ莊嚴出現大乘對法の三昧耶金剛の語言なり。その阿闍梨、此の眞言を習はしむるに、三十七尊の此の弟子に於て替れ、縁ある者はまさに即ち降臨すべし。その一尊に隨ひて心に入り已んなば、まさに五通を獲、三世を了知し、不退地を得、諸の難事を作せども滯礙あることなく、刀杖・毒藥・夜叉・惡獸永く害すること能はず、一切の如來まさに護念を加ふべし、一切の悉地速疾に現前して未曾有の安樂の事を得べし。或は弟子の種々の三昧を得るあり、或は種々の陀羅尼門を獲るあり、或は一切の所願みな圓滿することを得るあり、或はまさに無上菩提を證すべきあり。

り。その時に金剛阿闍梨、弟子の頂上の金剛拳を去けて弟子の心上を印して弟子に教へて言はく、まさに願はくは金剛堅く心中に住して動せず揺せざること猶し山王の如く三世の中に於て常に我れを捨てず我が念心を加護し、及び我れに一切の悉地を施したまへ。是の願を作し已て、真言を習ひて曰く。

真言を持し已て阿闍梨、また弟子に教へて真言を習はしめて曰く。
鉢羅底室奢、嚩日囉囉。
鉢羅底室奢、嚩日囉囉。

真言を持し已て、時に阿闍梨、弟子の手を執て、道場の中に於て諸の花を散せしめよ。花の落つる處に隨ひて、即ち是れ本尊なり、此花を捧げ取りて真言を習ひて曰く。
唵、鉢囉底、疑嚩囉穩、那但嚩弭摩哈、摩訶嚩囉。

真言を持し已て、即ち本尊の頂に繋け、其花鬘を以て本尊に安じ已て、金剛薩埵、花鬘を受けて速に悉地を獲しむべし。

また次に、阿闍梨、開眼の真言を習はしめよ。
唵、嚩日囉囉薩恒嚩、娑嚩娑囉多、膩耶奢吉葛、駄譏吒那、多但摩囉、孟駄譏吒野、底

薩魯嚩吉史、嚩日囉囉奢吉葛囉怒、哆囉吽囉穩、嚩日囉囉波寫。

此の真言を持し已て、即ち兩眼を開きて弟子に告げて言はく。金剛薩埵大菩薩摩訶薩、今日よりこのかた、汝がために眼を開く、但し汝が肉眼を開くに非ず。已に五眼及び最大の金剛眼を開く。汝善男子、今のところは道場なり。是の時に金剛の阿闍梨一に道場の中の事を教示せよ。便ち一切如來の加持を得、時に應じて本尊心中に入りたまふ。或は種種の天上の宮殿を見、或は種々の光明を見、或は種々の神通を見、諸の如來の加持力に依るが故に、金剛手菩薩玄に其の前に現立して所求の事を問ふて、願に隨ひて便ち與へ、乃至大金剛智と一切種智と及び一切智とを授與したまふ。

また次に阿闍梨、諸の事を教へ已て、闍伽唐云瓶水を取りて右の手に之を盛りて灌頂の真言を習はしめ弟子に告げて曰はく、金剛手菩薩、今日汝に最勝の灌頂を與へたまふと、此語を作し已て、水を頂上に灑げ、即時に阿闍梨金剛合掌の印を作て弟子の兩手に授與して告げて言はく、一切如來灌頂を與へたまふこと竟ぬと。是の語を作し已て、阿闍梨、弟子の名の上に金剛の字を加へて之を呼べ、五股金剛を以て兩手の掌中に安じて、弟子に告げて言ふべし。此は是れ一切如來の大智金剛なり、我れ今持して

以て汝が兩手に授く、妙悉地を成就せしめんが爲めの故にと。

是の時に瑜伽行者、諸佛を送りて各々本土に還し奉る眞言を習ひて曰く。

唵、俱嚩帝嚩薩嚩嚩、薩怛嚩、嚩吒悉地、魯怛陀、阿拏多囉譚室者、觀唵沒駄毗沙、野補那、羅譚摩那野遮。

瑜伽行者、眞言を習ひ已て(一)金剛鈴を振ること三遍せよ。

即ち高聲に、十六金剛菩薩の一百八名を歌讚して、力の堪能に隨ひて種々に供養せよ。

その時に行者、金剛の一百八名を歌讚して至心に金剛縛の印を頂戴して、諸佛菩薩を送る眞言を習ひて曰く。

唵、嚩日囉、謎吉沙牟。

眞言を持し已て、即時に印を解け、行者自ら想へ、然も今此の法は大慈毘盧遮那如來、但だ鈍根の人を利益せんが爲めの故に、大智慧海の中にて祕密の法を略出したまふ。

時に行者、是の法を作し已て(二)廻向し、發願せよ。此功德に依て、第一に國王、第二には父母、第三には施主、第四には法界の一切衆生、悉く皆速に無上菩提を證すと。

その時に金剛手菩薩摩訶薩、諸大衆に告げて言はく、廣大の法は我が境界に非ず、是

(一)金剛鈴云云これ後鈴の本説なり、外に説くこと希れなり。

(二)廻向發願、四恩の廻向を説く、謂く國王父母施主と法界となり

れ佛の境界なり。我れ今、佛の大威神力を承けて、略して諸佛境界瑜伽祕密眞實の妙法大金剛界道場の法を説き已ぬ。我れ曾て過去の百千劫の中に諸の願海を修して、乃ち大慈毘盧遮那如來に遇ふまで、第一の會の中に是の法を聞くことを得、第八地を超えて等覺の位を證しき。此の祕密法は得難く、遇ひ難し、たとひ遇ふことを得るとも信心を生じ難し、汝等大衆は無量劫に於て功を積み徳を累ねて、今是の法を得たり。若し是の法に遇はば、久しからずしてまさに菩提樹下の金剛寶座に坐して、諸の魔軍を摧き、無明の叢を破し、煩惱の河を竭し、永く生死を斷じて無等等の阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。諸の衆生の爲めに大悲願を起して在在處處に廣く宣べ流布して衆生を利益し法をして久しく住せしめ、六趣を引導して菩提を證せしめよ。是の時に海會の一切の大衆、佛の所説を聞きて、皆大に歡喜し禮を作して去りぬ。

國譯諸佛境界攝眞實經卷下 終

國譯諸佛境界攝眞實經卷下

乾四、縮一、
 續二、三、
 此の經は大日經第
 七の同本異譯なり
 故に處々文に異り
 あり二本相照して傳
 ふべし。滿淨は眞如の
 理を全分契證せる
 なり。即ち佛のこゝ
 分淨は眞如の理を
 一部分契證せるも
 の即ち菩薩のこゝ
 なり。今滿分の淨法身
 は大日如來のこゝ
 なり。我は吾我の
 眞字なり。即ち文殊
 の自稱なり。大日經の
 こと。悉地成就の
 意なり。佛果を成ず
 ること。信解經文を
 深く信正しく了
 解すること。弘誓
 願のこゝ。大悲漫荼羅
 胎藏漫荼羅のこと
 なり。

國譯大毗盧遮那要略念誦經

菩提金剛三藏 譯す

(一) 滿分の淨法身と 毗盧遮那遍照智と

妙覺を開敷したまふ光明眼 修廣なること猶し青蓮葉のごとくなるを歸命したてまつる、

(二) 我れ今經に依て要略して 自利利他 悉地の法を説かん、

眞言の次第方便を行せんには (三) 信解と (四) 勝願門とを發起し

先づ自心をして塵垢を離れしめんとして 佛を觀じ印と及び眞言とを想ひ、

深經と律藏と勤勇尊とを 一心に隨順し恭敬して禮したてまつる、

會し灌頂して傳授せしめ 妙眞言の支分を知るものあらん、

この勝人を見て應に敬事すべし 瞻仰すること猶し世尊師の如くせよ、

會て經に殊勝の意を發起せば (五) 大悲漫荼羅に入ることを得しめ

對して三昧及び眞言を授くべし 爾して乃ち應當に爲めに

正眞言の平等の行を攝することを宣説すべし 饒益有情の心間こゝろあらざれ、
三乗の梵行輕毀することなかれ 六和敬の法、心に捨つることなかれ
愚人所行の事を習ふことなかれ 瞋恚を生じて諸根を敗ぶることなかれ
歷劫所修の功德門 一念の因縁悉く焚盡す

菩提妙心の如意寶は 能く諸願を満し塵勞を滅す

三昧の徳藏これに由て生ず この故に當に勤めて守護すべし。

衆生の根の利鈍を觀念し 慈心にして饒益し瞋喜を現せよ、

(一)少分も(二)貪恚癡を以て 一念相應して燒行を行することなかれ、

恩に背く有情の過を念せずして (三)四無量を以て群生を攝すべし、

若は無力に由り或は時を得ば 心常に菩提所に安住せよ、

如來これに萬行を具し 諸度を満足すと説きたまへり、

大乘道にして讀誦し思惟して正受に入らしめ 根塵に著せずして等引を修すべし、

貪欲を遠離すること毒と火との如くし 諸の酒を遠離すること霜雹の如くし、

我慢を増して高牀に處することなかれ 自損損他みな遠離すべし、

(一)少分 微塵も
の意 (二)貪恚癡 根本
煩惱なり (三)四無量 慈悲
喜捨之れを四無量
心と云ふ化他の心
なり

(一)修多羅 經典
のいひ

また當に毀犯の因の 懈怠し忘念し惡儀を習ふことを遠離すべし、

我れ已に正しく三昧の道に依て 戒慧の處に住して略して宣説す、

復た佛説の(一)修多羅に於て 廣く開解して決定を生せしめん、

眞言妙門の三昧の法 其所應に隨て之れを思念せよ、

諸の福慧を以て遍く莊嚴し あらゆる蓋障をして消盡せしむべし、

觀察し相應すれば法を成就す 親たり尊の所ところに於て其の明を受け、

安住して次第に眞言を奉すれば 即ち此の生に於て悉地に入らん、

智者最勝の業を修せんと欲はゞ 先づ尊者を禮して方便を問ひ、

師の許しを蒙り已て尤も勝處の 妙山と峯阜と巖窟との間だ

華池と洌渚と河岸の邊り 樹林扶疎たる悦意の處ろ、

祥茅と乳木とありて人無き地 復た寒熱虫獸の災ひなく

聖賢の往昔に居遊したまふ所 (二)蘭若仙巖塔寺の内、

此の勝たる時處に心安住し 三昧相應して悉地を修すべし、

設ひ疲苦及び飢渴を逕とも 念慧を具足して堪忍すべし、

(一)蘭若 寺院精
舎の總名

如來菩薩の教に隨順して 伴有るも伴無きも其の意を堅くして
 眞言の妙法常に手に居き 淨念慧を具して恒に觀察し
 勇進堅牢にして怯弱なく 世間諸有の福に着せず
 眞言門に於て深く信解し 自他安樂の業を成就すべし、
 是の如く修行するを勝伴と名く 諸天守護して威力を増す。
 次に下の九種は方さに業障を淨除し三昧耶を増益する門なり、而も頌を爲して曰く、
 虔誠と諸罪を懺すると 歸依と身供養と 發心と及び隨喜と 勸と請と廻向の法と
 是の如くの九種の門 次第に相應して説かん。
 彼れ念誦の處に依て 日夜に時分を作し 寢息し及び經行せんに 障を爲すものを
 辟除し、
 根を寂にし念慧に住して 能く放逸の僣アヤマちを除け、
 常に大悲心を起して 衆生界を解脱せよ、
 若しは浴し若しは浴せずとも 三業淨を本となす、
 空閑精舍の中に 如法に經像を安じて、

(二)五輪 五体即
 身體のこと。

(三)三業 身、口、
 意の三業なり。

十方刹の 諸佛前に現したまふと思惟し 諦かに自の身心 分明に其の所に在りと
 想ひ、
 虔誠に恭敬を作し 妙香華を布散して、
 種々に勝莊嚴し 一心に而も敬禮したてまつり、
 面て隨て東向に坐し 本所尊の明印修多羅を瞻仰して、
 (一)五輪地に投げて禮すべし。
 一切の佛と及び本尊と并に諸の菩薩と眞言と契印等を禮したてまつる時に同じく此の
 明を誦して曰く、
 唵、オン 娑麼薩嚩縛、サマサハバ 怛他葉多迦也、タナタガ 嚩訖質多播唵唎能難、ワキツシタハムダマムダナラ 迦路弭。キヤロミ
 若し此の明を誦して而も禮拜を作せば、能く遍ねく十方の諸佛を禮せしむ、
 復た次に懺悔の法とは、謂く親たり佛前に於て右の膝を地に着け合掌して思惟せよ、
 先世より已來及以此の生の貪瞋癡等、身心を覆蓋し煩惱を積集し、無明增長し(三)三業
 を不善にせしこと無量無邊なり、佛と正法と賢聖師僧と父母と宗親と善知識とに於て
 是の如くの所に於て極重罪を造り、善友の言に違ひ、生死に淪溺す、いま十方の佛善

薩の前へに對して心を披き懺悔して敢て復た造らず、是の言を作し已て、此の明を誦して曰く。

唵、薩婆耨跋、室普吒訶爾、跋日囉耶、莎訶。

明三遍を誦すれば、悔する所の罪一時に滅盡す、決定して疑ふことなかれ。

復た次に歸依法とは、

爾の時に是の思惟を作せ、十方三世の一切の諸佛、及び深法藏と、勝願を成就したまふ諸の菩薩衆とに、我れ心にみな悉く歸依したてまつる三たび此の明を誦して曰く。

唵、薩婆勃駄、慕地薩唾嚙難、捨羅囉葉車弼、跋日羅達摩、紇哩。

復た次に分身供養とは、

當に想ふべし自の身口意已に諸垢を離れて、其の身を運散すること、微塵數に過ぎたり、十方刹に遍すること猶し雲の雨を散して化を施すが如く、種種の諸の供養の具となつて用て佛に獻じたてまつる、此の明を誦して曰く。

唵、薩嚙嚙但他孽多布社、鉢羅囉喇但那夜南、爾里耶但夜弼、薩囉嚙但他孽多室柘地底瑟吒難、薩囉嚙但他孽多喏南、謎伽阿微設覩。

(二) 蘊處界五
界、十二處、十八
一切諸法。宇宙間の

復た次に發勝菩提心とは、

爾の時に當に自心は猶し寶月の空に淨く凝滿せるが如しと、復た當に(二) 蘊處界等は、無始妄執の纏繞する所なりと、我れ今此の無知に害せらるゝを覺る、是の故に菩提の淨心を觀察すべし、菩提心を觀察するとき此の明を誦して曰く。

唵、嚙地質多、沒嗒波施夜弼。

此の明三遍を誦すれば、能く速に菩提の心を見せしむ、菩提の心とは、一切の相を離れ自身平等にして本より生滅せず、我人能執所執有ることなし、過去の諸佛及び諸の菩薩此の心を發すが故に、道場に至ることを得たまふ、我も亦是の如く菩提心を發す、一切衆生我に歸依するもの、諸の方便を以てみな解脱せしめん。

復た次に隨喜功德とは、

是の如く思惟すべし、十方刹土の中の、一切諸佛の種々の方便の功德海雲及び諸の菩薩の最勝の福業、我れ今ま至心に悉くみな隨喜す、此の明を誦して曰く。

唵、薩嚙嚙但他孽多、味爾也喏那拏慕施娜、布社謎伽三母捺囉薩頗囉拏、三摩曳、吽。

復た次に勸請德雲とは、

作法已て心念し口言す、我れ今一切如來と諸の大菩薩とを勸請したてまつる、普く十方に於て大法雲を興し、大法雨を降したまふ、救世の大悲願我が請に隨ひたまへ、我れ此の中に於て願速に成就せん、此の明を誦して曰く。

唵、薩嚩嚩怛他蘩多、地曳瑟囉、布社謎伽三母捺羅、薩嚩囉拏三麼曳、吽。

復た次に請佛住世とは、

爾の時に行者心念口言す、我れ今一切如來を請し奉る、我れ凡夫の爲めに世間に住して我等と一切衆生とを饒益したまへ、我れ及び衆生は凡夫地に住して衆苦の所集なり、云何んが無垢處に至ることを得て、清淨法界の身に安住せん、唯願くば如來我を捨てたまはざれ、此の明を誦して曰く。

唵、薩嚩嚩怛他蘩多、地曳灑夜弭、薩嚩嚩薩埵、係都嚩他也、達嚩摩駄切、悉迺底嚩婆伐視。

復た次に廻向菩提とは、

當に一心に合掌してこの念言を作す、我が所修の一切の衆善と、功德方便を生起して諸の衆生を利益する福とを以て、並に同じく廣大の菩提に廻向す、願くば自他をして

速に生死を離れしめん、此の明を誦して曰く。

唵、薩嚩嚩怛他蘩多、爾里也拏慕統娜、布社謎伽三母捺羅、薩叵囉拏三麼曳吽。

如上の諸の方便は能く遍ねく身心を淨む。

復た自他を攝んが爲に 安坐して三昧に入り

内外の地を加持して 諸の如來を供養し 密印と及び眞言と 次第に相應して作せ、

而も頰を爲て曰く、

三昧と淨法身と 金剛輪と甲冑と

法界と大護等と 及び無動威怒との

七種の結護門 受持して次第の如くせよ。

初に秘密三昧耶を結ぶとは、前の如く廻向し已て、想ふて身心を運び、遍ねく諸佛と一切賢聖とを禮し、便即ち端心にして(二)結跏趺坐し、三昧の印を結て身の(三)五處を印すれば、三業を淨除す、其の印相とは、二手を以て常の如く合掌して二大指を標り立つる、即ち是なり、三たび此の明を誦して曰く。

(一) 結跏趺坐 佛の座法なり左足を右足の膝の上に壓し、右足を左足の膝の上に壓し、互に結ぶ座なり。
(二) 五處 心を額、頂、兩の肩、

施、戒、忍辱、精進、
禪定、智慧。
六波羅蜜

ナラマサラバタキヤイセ、
娜麼薩嚩嚩怛他蕤帝鼻庚、微濕嚩目契婢也、唵、阿三迷嚩哩三迷、三麼曳、莎嚩訶。
五處とは、謂く心と額と頂と二つの肩となり、若し更に餘印有て、之れを結んと欲は
ゞ、亦た先づ此の印を結び已て、然して後に之れを結べ、此の印の威力、能く佛地を
して顯現せしめ、障り無くして六波羅蜜具足圓滿し、三三昧耶速に成就することを得。
次に清淨法身の印を結ぶとは、先づ二手を以て四指各の大指を握て拳に爲し、二頭指
を舒べて側ばめ相ひ著けよ、即ち此の印を以て舉げて額の上に安じ、即ち復た印を以
て手を翻し、内に向けて額より下に向けて自身を縁じ、おもむろに之を散せよ、三た
び此の明を誦して曰く。

ナラマサンマンダボダオン、
娜麼三漫多勃駄南、達嚩麼駄觀跋嚩婆嚩句唎。

是を見法界明の印と名くるなり、此の明印を以て身に旋轉して、即ち自ら思惟すべし
自性法身無盡界に亘る、是の故に速に清淨法身を見る、此の明印の力に由るが故に、
是の如く見ることを得れば、常に法體に住して猶し虚空の如しと、以て自ら加持すべ
し。

復た次に金剛法輪印は、是くの如く當に自ら諦かに堅牢法身を觀すべし、即ち左右の
手を以て腕を交へ背け相ひ著け、右の腕左の腕を押せ、頭指より已下の四指兩々互相
に及び鈎し、右の大指を屈して掌中に於て下に向けて手を翻へし輪印、身を縁じ、其の
二手をして拳に結ばしめ心に當て、左の大指と右の大指と相合す、是を法輪金剛智印
と名く、此の明印の力、最勝吉祥なり、若し人暫らく結はゞ自在者に同じく大法輪を
轉じ久しからずして寶輪を轉ずるものを成就す、三たび此の明を誦して曰く。
ナラマサンマンダボダオン、
娜麼三漫多跋曰羅赦唵、跋曰羅答摩响唎。

その時に行者、法性に住して諦かに觀せよ、此の身は執金剛に同じく等ふして異なる
ことなし、一切の天魔及び諸の異類此の人は是れ金剛の身なりと見る、決定して現世
に大法輪を轉ず、疑惑を生ずることなかれ。

次に金剛甲冑の印を結ぶとは、かくの如く當に明印を以て想ふべし、甲冑と成り自身
に振きて遍ねく光燄を起し、惡心の魔類四もに散し馳走す、縦ひ相近著すとも、みな
自ら歸伏せんと、常の如く合掌して、二頭指を以て各の中指の上節の背の文に附け、
二大指を以て掌中に並べ堅て、此の明を誦して曰く、

娜麼三漫多囉日囉赦、唵囉日囉却囉遮、吽。

次に法界清淨の字を想ふとは、當に囉字を想ふべし、加ふるに空點の圓なるを以てすれば、髻珠空に明かに徹照するが如くして自の頂上に置き、白光の凝輝身心界を淨むと。この觀を作す時、百劫の重罪一時に頓に盡き、無量の福慧みな圓滿することを得。

置字の明に曰く、
娜麼三曼多勃南駄、曷覽。

この法界心は諸佛共に持す、佛加したまふが故に能く諸垢を淨む、善く思惟するものは不退地に住す、若し人一切の穢處に遊往せば、即ち其の字を想へ、赤き燄光を放て身界に遍じ穢入ること能はず、意に隨て來往するにみな障礙なし、この字の功用其の義甚深の色にして、即ちこれ法體なり、この故に法體慧身より生ず。

復た次に除障大護の明を誦すとは、諸魔を降伏し惡鬼神を制せんが爲めなり、この故に當に念すべし、難忍明王は作障の者堪忍すること無き故に大護難忍と號すと。明に曰く。

娜麼薩嚩嚩怛他葉帝鼻庚微濕嚩日契婢也、薩嚩嚩他哈堪、羅乞叉摩訶機禮、薩嚩嚩怛

他葉多、唵彌也底囉社帝、吽吽、怛囉吒怛囉吒、阿鉢囉底訶帝、娑嚩訶。

若し暫くもこの明を憶持すれば、威力の毗那夜迦、及び惡羅刹この護を聞くが故に、盡くみな四もに散じ恐懼し馳走す、威力甚だ大にして能く勝つものなし。

復た次に不動威怒の法とは、謂く處所を淨除し、法界を結護するに、自在無礙にして道場を嚴淨す、及び一切の護みな悉く通用せよ、其の印相は、各の二手の五指を以て無名小指の甲を捻して拳に爲し、各の頭中の二指を直く展べ、其の右の手の二指を以て左の手に入れて中を握り、相順して挿さんで刀の鞘に在るが如くして、自身を想ふて不動尊の如くし、八の字邪まに立て刀を抜く勢を作し、左に轉じてこれを撃し右に透してこれを結せよ、是れを結護と名く、この明を誦して曰く。

娜麼三曼多嚩日囉囉、戰拏摩訶路灑拏、馱頗吒也、吽怛利吒淖滿。

若し諸の惡鬼神來て人に向はば、この法を以てこれを逐へ、自然に散滅せん、この法は一切處にみな悉く通用す、隨て後に一一に其の功用を明すべし。

已上の七門は秘密結護の法なり、圓かに定慧を證し熾りに福慧を増せんとおもはば前の結護を作すべし。

即ち三摩地に入て、心許に通じて總別を請して随つて觀せよ、而も頌を爲て曰く、
囉字淨心法と 想立道場法と、

普觀と及び別觀との 四門次第の如し。

先づ囉字淨心を觀ずとは、前の如く結跏趺坐して當に心中に於て諦かに字を觀すべし。
それに圓點を加へて、而も光明を放つて、初日の暉りの河海を照すに、光色疑淨澄徹
して障り無きが如く、自心の體を見ること亦た復たかくの如し、染を離れて障り無し、
彼の客塵に由て顯現すること能はざりしも、我れ今この法界深心の字を觀する威力の
故に、心淨ふして垢を光らし心垢を淨め已ぬ。

(二)金剛際 無限
の時間に喩ふ。

復た次に應さに道場を建つべし、即ち面前道場の中心に於て、諦かに想へ字より疑淨
の光りを放つて空に臨む、流光遍く照して地の過を淨除すと、復た想へ沈下(二)金剛際
を過ぎて而も住し、體法界に同じくして所有の性なしと、次に彼の界に於て哈字有り
と想ふて彼の字を思惟すれば、黒光を流布して以て風輪となる、其の想字の明に曰く、
一遍を誦せよ。

娜麼三曼多勃駄難、哈。

(二)皎月 白色の
光りある月。

次に風輪の上に鍍字を思惟せよ、彎はる形の如く色牛乳の如し、淨光を流布して其れ
猶(二)皎月のごとし以て水輪と成る、此の布字の明を誦して曰く、

娜麼三曼多勃駄難、鍍。

次に水輪の上に阿字を思惟せよ、色黄金の如くして金剛輪となり、妙光流布して以て
金壇と成る、其の形方正なり是れを摩奚達羅と名く明を誦して曰く、

娜麼三曼多勃駄難、阿。

復た次に普觀莊嚴とは、謂く本尊及び諸聖の會と所居の土とを觀念せよ、自の心眼を
して了了分明ならしめ彼の前に住して佛を見たてまつるに所坐の妙白蓮華、金剛を莖
と爲して華大に開敷し、嚴り八葉にして鬚葉を具足し、衆寶の色を現じて無量の光を
放つ、大蓮華より周匝して復た千百億數の寶蓮華座を生ず、觀せよ華臺の上に寶玉を
もて交飾して、師柱構へて宮殿と成し、師子の座に於て華臺四もに周りて衆寶あり、
寶柱の間に遍ねく幢蓋を垂る、復た座の上に於て珠網寶幔交絡して彌布し、寶帶垂れ
て璫と華鬘と交へ連ね、繽紛として綺錯し嚴麗殊特なり、内外の室中に華雲變隄し、
上下に香雲遍滿して氛馥たり、虛空の中に於て仙天競て無量の音樂を奏する解脱の妙

(二)賢瓶、賢は善の義なり、善瓶、徳瓶等名く、如意瓶、天神に祈りて此の瓶を感得する時は、瓶より出ずる如く瓶より出ずと云ふ。

(二)普觀佛會、此の三昧に入る時、能く念々の中、於て善眼を以て、通觀すること、具足して明了なり。

聲あり、(一)賢瓶と寶盤と周布し布列して、百寶樹王の華果開敷し、支葉相ひ次ぎ光明交映し重々行列して覆ふに寶網を以てす、寶網より妙摩尼を垂れ、摩尼珠の光り佛の宮殿及び彼の世界を照すこと、百千の日の共に虚空に處する如く、光明彼れに過ぎたり喩となすべからず、諸の綵女有て佛智より生ず、菩提の妙華而も嚴飾をなして各の華座に居す、定より起つが如く方便力を以て、妙音聲を出して佛徳を歌讚す、言詞清雅にして句義深遠なり、この觀に入る時斯の如き事を見れば、當にこの念をなすべし、我が至願を以て佛の加持を蒙る、如來力と及び法界力とに由て、今我が所觀觀に如て而も住すと。その時に行者三昧の中に於て當に念すべし、一切如來及び彼の聖衆を供養したてまつると、即便ち合掌して金剛印を作して想へ衆の妙華、印より發生して普く佛會に散して而も供養を爲すと、此の明妃を誦して以て用て加持せよ。明に曰く、
娜麼薩嚩怛他葉帝鼻庾、微濕嚩日契婢也、薩嚩他欠、搗捺葉帝、薩頗羅伽、伽那鉢、莎訶。

當に三遍を以て而も加持を用ふべし、彼の所生に隨て善願みな成ず、是を等虚空力虚空藏明妃と名け、是を(二)普觀佛會と名け竟ぬ。

(二)三輪、身口意の三業なり、佛の三業清淨の力を以て、凡夫の惑業を斷ずるなり、又三密とも云ふ。

(三)素月、白き光りある月。
(三)天冠、殊勝の寶冠なり、人中の所有にあらざる故に天と云ふ。

復た次に別觀諸聖とは、謂く前の如く八葉妙華の中に一の阿字を觀じて是の思惟を作せ、諸法は不生にして本性寂の故に、これ眞實の義なり、字より而も轉じて盧舍那と成ると、諦かに觀せよ如來結跏趺坐して三昧の相を作す、閻浮檀の微妙の金色の如し、素疊を身に被、髮髻肩に垂れて以て頭冠と爲したまへり、圓光の内に於て無量の佛刹及び諸の佛會みな中に於て現す、光明遍ねく衆生界を照盡す、斯の光に遇ふもの性に隨て開曉すること、朝日の光り蓮華に觸れてみな悉く開發するが如し、如來(二)三輪一切處に遍して常住不滅なり、是の故に無生阿字心より、而も轉じて如來の身と成る、若し此の中に於て釋迦牟尼佛を觀せんと樂ふものは、彼の蓮華座に一の婆字を想へ、一切の色を具せる如來の身を起す、諦かに觀せよ佛身は猶し紫金の如し三十二相八十種好あり赤袈裟を被跏趺して坐す、千百億の身もみな此の字轉じて盧舍那の本體に依て流出す、次に北方の華座の上に於て諦かに索字を觀せよ、光り(三)素月の如し、轉じて觀音大悲聖者と成て、白蓮華に坐す、身相また同じ、(三)天冠の中に於て無量壽自在如來を現す、次に盧遮那の南方の華座に於て諦かに嚩字を觀せよ、光り碧玉の如く外に餘光を放つ華に坐せる身相も亦復是の如し、次に本華の東の蓮花坐に諦かに暗字を

觀せよ光の色鮮白なり、一切如來此の字より轉ず、其の北隅の華座の上に、諦かに我字を觀せよ流光金色なり、一切佛母これより而も轉ず、身相光明及び衣服一切みな白なり、本華の東南の蓮華座の上に諦かに伽上字を觀せよ、白光流布して諸佛の豪相あり大威德尊この字より轉ず、身相及び華みな悉く白色なり、本華の西南の槃石の上に、諦かに哈字を觀せよ、色黒雲の如し、聖者不動この字より轉ず、童子の形の如くして猛犍外に熾かんなり、本華の西北の蓮華座の上に、諦かに訶上字を觀せよ淺碧の光を放つ、降三世尊其の字より轉ず、二身の色相各の本字の如し熾熾外に發す、北方の所有の觀音の眷屬左右に侍衛するもの、みな此の字より起る、謂ゆる瞻字は(一)多羅菩薩此の字より轉ず、字の光り淺白にして身相亦然なり、妙衣鮮白にして歡喜し合掌して右邊に而も座す、次に此の右の華に諦かに勃哩合字を觀せよ、字の光り凝白にして毗俱胝を起す、身相亦然して圓光雜れり、毗俱胝の右に諦かに索字を觀せよ、字の光り黃白にして(二)得大勢至此の字より起る、身金色の如くにして白衣服を被れり、次に觀音の左に諦かに破咩合字を觀せよ、字の光り身相悉くまた白色なり、この故に此の字より身相を轉じて次に其の右に居す、諦かに哈字を觀せよ色白光の如し馬頭聖者これよ

(一)多羅菩薩觀音院の一尊なり、多羅觀音に同じ觀音に定慧の二德あり、多羅は定德を主る。
(二)得大勢至大勢至菩薩のこと、胎藏曼荼羅觀音院の一尊なり。

り而も轉ず、二の怒牙ありて口の角より現す焰光威赫にして身相亦然なり、次に南方に金剛の眷屬を觀せよ、左の執金剛の左右の蓮華座の上に、諦かに一の咩字を觀せよ字の光り亦赤色なり、一切の金剛同じく此の字より起る、身相亦た然なり光熾外に發す。右邊の聖者の初に金剛母、次に大刀針左邊の聖者を金剛鏢と名く、自眷屬とともに瞻仰して而も住せり。

復た次に東方の白蓮華の上に、諦かに摩咩合字を觀せよ、金色の光を放つ、(三)吉祥童子これより而も轉ず、身儼金の如くにして圓光普く照す、左右の眷屬互相に輔翼し各々字に依て轉ず、復た南方の蓮華座の上に於て諦かに映去字を觀せよ、この字より起るを除蓋障と名く、左右の眷屬各々字に依て轉じて而も相ひ輔翼す、復た北方に於て寶蓮華に據て諦かに伊上字を觀せよ、地藏菩薩此の字より轉ず、身光遍ねく繞つて雜寶色の如し、左右の眷屬各々字より轉じて而も相ひ輔翼す、復た西方の寶蓮華の上に於て諦かに伊字を觀せよ、聖者虚空藏、字より而も起る、身金色の如く被るに白衣を以てす、衆多の眷屬左右に輔翼す、一一みな以て字に依て而も轉ず。

復た次に東門に嚩上字を觀せよ無畏大護生す、左右に釋梵衆、月天眷屬等あり、南門

(三)吉祥童子將に成道せんことを祈る時、吉祥草を奉りて童子。

に曠字を觀せよ、金剛無勝を起す、焰魔眷屬等、左右に而も行列す。

北門に跛字を觀せよ、能壞諸怖者の身彼れより生起す、淨居の諸の天衆、華を左右に持せり。西門に索上字を觀せよ、最勝降伏者彼れより而も身を出す、諸龍及び月天左右にして常に護る。

東北に係舍尼 東南に火神王。

西南に係際底 西北に風神王。

各の本所標を執して 威嚴にして隅角を護る。

是の如くの廣大の衆 みな字光より轉じて

佛神力加持して 願に隨てみな満足せしむ。

上の如く諦かに總別を觀察して相應せしむべし。

三昧の中に止住して 歡喜して而も迎請せよ。

若し迎請せんと欲は、先づ應に備ふる所の香華燈明、及び諸の飲食、一切の供具擬して將て奉獻すべし、當に不動瞋怒明王を用ふべし、以て其の過を除いて身の右に置け、復た明印を以て處所を辟除し、然して後に迎請せよ、次に下の迎請の法は至願を

成就し福慧を圓滿すと謂ふべし、都て十七門之れを勤めよ、翼くは修行者諸の錯謬無るべし、而も頌を爲て曰く。

攝除迎請の法と 及び示三昧耶と。

たてまつるに、^(二) 遏迦水を以てすると 尊に華座を奉つる法と。

復た攝除護身と 凡を轉じて聖となる法と、

被鎧と及び摧魔と 周ねく大界を結する法と、

普ねく心に恭敬して禮したてまつると 復た遏迦をたてまつる法と、

別して香華を供養すると 運心普供の法と、

正向と、及び歌讚と 願つて自他を滿する法と、

心に隨つて念誦に入ると 總別を受持する法と、

是の如く諸の次第 智者善く應に持すべし、

初に攝除迎請とは、謂ゆる先づ攝除し、後に迎請せよ、其の攝除とは不動の刀印を用て此の明を誦して、曰く

娜麼三曼多囉日囉囉戰拏摩訶盧灑拏、^{ナラマツサマンダバハラダンセンダマカロシヤダ} 馱普吒也、^{ンバタヤ} 咩怛囉吒、^{ウムタラタ} 啤滿。^{カンマム}

^(二) 遏迦水 佛前に供ふる水。

此の明印を以て諸の供養に觸れ、及び左右に廻轉せよ、これを辟除結護と名く、或は降三世の明印を用ゐ、以て結護をなせ、後に當に説くが如し、彼れを取て而も用ゐよ。復た次に明印を以て而も本尊を請せんには、應に一一の佛菩薩の本明印法に隨ふべし。若し本印明を結ぶこと能はざるものは、應さに都てこの一切の諸佛菩薩を請する法を結ぶべし、その印相は、二手を以て十指内に向へて相ひ交へて金剛縛に作りし、右の頭指を豎て、由鈎形の如く舒べ屈して來去せよ、金剛鈎請と名く此の明を誦して曰く。
ナラマサマンダボダナ 娜麼三曼多勃駄喃、アラサラバ 吠薩囉嚩、ダラ 怛囉鉢羅底喝多、タタギヤタウツヤ 怛他莫當响勢、ボウヂシヤリヤ 冒地遮哩也、ハハリホ 跋哩布囉迦、ソハカ 莎訶。

この明鈎印にて明七遍を誦すれば、一切の佛及び諸の菩薩を請す、十地の菩薩及び難調伏のもの諸惡鬼神、みなこの印を以てすれば而も追ふてこれを一に攝すべし。

第二に三昧耶示尊の法とは、謂く諸尊至り已ぬれば前に説く所の三昧耶の印を結で此の明を誦して曰く。

ナラマサマンダボダナ 娜麼三曼多勃駄喃、アザンマイ 阿三謎、チリサンマイサンマエイソハカ 底哩三謎三麼曳莎訶。

かくの如くの正等示三昧耶は、能く普遍く有情の願を満す、能く本尊をして歡喜せしむ、法を持し奉るものを安し速に悉地を満することを施す。

復た次に上以過迦法とは、明を以て如法に加持して妙香水を淨めて奉上を至し、本尊及び餘の諸佛と一切菩薩とを浴すべし、不動の印を用て過迦器の如く、誦するに此の明二十五遍を以てせよ、明に曰く。
ナラマサマンダボダナシヤヤナ 娜麼三曼多勃駄囉咖那、サンマサンマソワカ 三麼三麼娑婆訶。

過迦器 供佛の水を盛る器。

復た次に奉尊華座法とは謂く世尊所座の大蓮華臺なり密印を以て加持せんに、先づ奉獻の次第を以て、如法に諸座を安布せよ、其の印相は先づ二手を以て虚心合掌して合蓮華の如くし、頭中名指を散して開敷せしめ、華を開かんと欲するが如く鈴鐸の形の如くして、二大小指兩兩相合し、以て華臺となして先づ佛の座を置き、次に餘座に及び一に明を誦して用て加持せよ、華座の明に曰く。
ナラマサマンダボダナ 娜麼三曼多勃駄喃、アラ 映。

復た次に攝除護身とは、復た無動の明印を以て其の處を辟除すべし、前の刀印是なり明に曰く。

ナラマサマンダボダナ 娜麼三曼多囉日囉囉、センダマカ 戰拏摩訶露灑拏跋普吒也、ウムダラキヤ 怛囉迦、カンナム 湲滿。

此の明印を以て左に辟し右に結す、復た自身の(一)一切支分に加すれば、諸の難調惡鬼神等有て、同じく是の處を見るに金剛の焰有て一切障礙を作すものを焚燒す。

復た次に轉凡成聖法とは、其の時に智者當に自身全く鏝字と成ると想ふべし、鏝字を轉じて執金剛と成せ、復た其の字を以て支分に遍布せよ布字の明に曰く。

娜麼三曼多勃駄囉、鏝。

深くこの字を觀すれば諸相を遠離して言説あることなし、是れ即ち金剛の體不可壞の身を得るを以てなり。

復た妙印を以て是の身を加持せよ、先づ二手を以て内に向へて相交へ金剛縛に成し、

二中指を抽て、堅て、頭相合せて金剛針と成し、二頭指を起て、中指の背に於て遠ざけ而も曲げしめて三股杵と成し、二大小指各の堅て合せ五股杵と成し、心の前に之れを置いて此の明を誦して曰く。

娜麼三曼多囉日羅赦、唵、戰摩訶露灑擊、吽。

或は左の手を以て金剛拳に作し、印を以て身を印せよ、聖者加持の法と名く。

復た次に被金剛鎧とは、當に明印を以て身の支分を印すべし、各々二手を以て金剛拳

に作し、印を擧て頂より徐ろに下し足に至るまで被鎧となると想へ、或は前に説く若

甲の印を作せ其の明を誦して曰く。

娜麼三曼多囉日羅赦、囉日羅迦伐遮、吽。

是を被甲の法と名く、此の法を作し已て便ち法字を以て想ふて自の頂きに置き其の字を思惟せよ、猶し虚空の深廣にして邊際なきがごとし、諸法の深廣なることも亦またかくの如し、布字の明に曰く。

娜麼三曼多勃駄囉、欠。

復た次に摧散魔軍とは、もろくの惡心ある極猛利のもの、明印相應すれば摧伏し辟除す。其の印相は右の手拳になし直く頭指を申へ大指と相附け、其の印の手を擧げて額の上に置け、印を以て周廻右に轉して之れを揮へ、その時この處に猛焰起らん、この明を誦して曰く。

娜麼三曼多勃駄囉、摩訶囉羅襪底、捺捺囉囉、帝矯捺婆味、摩訶味底哩也、拔庚捺孽帝、莎訶。

纒かに明印を結べば無量の魔軍、及び彼の眷屬障をなさんと欲するもの、退散し馳走

して敢へて正しく視ず。

復た次に周結大界とは、降三世の祕密明印を以て大界を結せよ、難忍大護と名く、印は先づ二手を以て常の如く合掌し、二頭指及び二小指を屈して、背け相着けしめて掌中に入れ、二大指を立て、頭指の側を押し、二中指を立てて頭を合せて相着け、名指を擦り間だ相去ること半寸ばかり、印を以て心に當て明一遍を誦して、周らし轉ずること三匝、この明を誦して曰く。

娜麼三曼多勃駄難、三曼多拏葉帝、畔施斯滿摩訶三昧耶、爾嚩吐帝、駄摩囉拏阿鉢羅底喝帝、達迦達迦、遮羅遮羅、畔施畔施、捺捨苦、薩縛多他葉多、弩咩底、鉢羅嚩羅達嚩磨臘駄微社曳、薄伽嚩底、微响哩微响禮、禮嚩補哩、微响禮、莎訶。

若し略誦せんと欲はば、應に七遍に至るべし明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、禮嚩補哩、微响禮莎訶。
かくの如く二明、一明を誦するに隨て即ち結界を成す、此の明印の力十方三界悉く能く堅く護る、故に三世普降護尊と名く、或は無動の明印を用て方界を結護し及び護身すれば、一切の事を辨じまた難なきことを得む、不動の明に曰く。

娜麼三曼多囉日囉赦、哈。

前の刀印を用て即ち結護を成せ。

復た次に聖會を觀想せよ、普く心に作禮し三たびこの明を誦して曰く。

唵娜麼薩嚩嚩但他葉多、迦也嚩訖質多稀娜難、迦路彌。

復た次に復上退迦とは不動の印を以て退迦器を持し、本尊及び餘の聖衆に奉獻せよ退迦を持する明に曰く。

娜麼三曼多囉日囉囉、眼。

復た明三遍を誦したてまつるに、退迦を以てすべし、退迦の明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、伽伽娜三摩三摩莎訶。

復た次に別供香華とは、謂く前の奉獻に擬して香華飲食一一に前の無動の明印を用て香水を加持して遍ねく其の上に灑ぎ、能く光澤ならしめ、また其の印を用て一一にこれを觸れよ、無動の明印は上に已に説くが如し、また其の上に於て想ふて囉字を布せよ布字の明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、囉。

復た自持の本尊の明を誦し、名を稱し持して獻す、餘尊も亦然せよ、塗香を奉る明に曰く、
娜麼三曼多勃駄難、唵、微我施、健資捺婆嚩、莎訶。

華を奉る明に曰く。
娜麼三曼多勃駄難、摩訶味底哩也拔庚、捺葉帝、莎訶。

燒香を奉る明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、唵、達嚩摩、駄捶梅葉帝、莎訶。

燈を奉る明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、唵、他葉多、唵支跋頗囉拏嚩婆薩娜葉伽葉施哩也莎訶。

食を奉る明に曰く。

娜麼三曼多勃駄難、唵、阿囉囉迦囉囉、沫隣捺泥、摩訶沫履、莎訶當に三遍誦すべし

復た次に運心普供とは、二手を以て相ひ又へて、虛心合掌にして端坐し思惟せよ、一切佛刹の諸佛菩薩の、福力所生の幢幡、綺蓋、樓閣、寶樹、香雲、華臺、清淨嚴麗にして天仙歌詠し、珠璣連帶して光明遍ねく照し虚空の中に満てる勝妙の莊嚴をもて、諸佛及び諸菩薩に供養す、この明妃を誦して曰く。

娜麼薩囉嚩但他葉帝鼻庚、微濕嚩目契婢也、薩囉嚩他欠、椶捺葉帝跋頗囉四摩、伽伽
娜釵、莎訶。

念誦三遍して思惟し供養すれば、みな悉く充滿す、所願あるものは、速かに成就せしめむ、復たこの念を作せ、我が思惟する所のかくの如くの供養、如來と諸の菩薩衆との廣大海會の所生に依て、諸佛菩薩の神力加持を起す、我が福力と如來の力等に依るを以て、法界の如く獻する所充足す。

復た次に正向とは、當に是の念を作すべし、我が修集する所の一切の功德みな悉く廻向し、成就を求むるに至つて專注相應すれば、身中の一切の罪障を除滅す。有情を利せんが爲に無上の願を祈り、時處を念することなく吉凶を慮からず、儀式によらず、但だ能く正修し及び正廻向し、運心供養すれば亦速に成就す、若し世間の小福を成就せんことを求めば、復た専ら勤むと雖も法式に依て外相を修持せば、唯小成就せん、若し正行を修せば、先づ一月に於て身心を調伏し、心中に念誦して心をして澄淨ならしむれば第二月に於て然も儀式に於て大悉地を作す。

前の如く供養を修して 悉地を求めんと欲はんものは

當さに金剛の讚を誦して 佛菩薩を供養すべし、

これ瑜伽經に依るに 佛口より生ずるところなり、

諸佛をして歡喜せしめ 當さに速に成就を得べし、

金剛の讚に曰く、

復た次に願滿自他とは、その時に行者聖會の前に於てこの念言を作せ。

我れ今大海衆を歸命したてまつる 願くは速かに我が悉地の心を滿したまへ。

一切苦の衆生を悲愍す この故に愍愍に悉地を求む、

一切衆生諸趣に溺る 願くは形を分ち中に遍入して、

彼れに隨て多種の身を應現し 方便利樂し解脱せしめんと欲ふ、

我が莊嚴の功德力と、微妙法界の難思力と、

一切如來の常住力と 一切衆生の善根力とを以て、

自他の福慧普く莊嚴し 無量の財法みな圓備せん。

この願を作し已て、手を又へ合掌して虚空藏明妃三遍を誦して而も加持を用ひよ、明に曰く。

娜麼薩嚩嚩但他葉帝鼻庚、微濕嚩目契婢也、薩嚩嚩他欠、屋捺葉帝、葉頗羅四摩、伽
伽娜釵莎訶。

この明印の力速に能く一切の上願を満足す、決定の意を興せ疑慮を起して誹謗の心を
生ずるとなかれ、一切如來共に宣説したまふ所、この故にまさに心を至して諦信すべ
し。復た次に隨心入念誦と惣別受持法とは、その時に行者三昧の中に於て運心して一切
諸佛及び菩薩衆を敬禮したてまつり、端坐し思惟して四禪門に入り心をして喜樂せし
め初には現前に於て本尊の相を觀じ次に明印を觀じ、次に自身本尊に同すと想へ、次に
自心を觀するに猶し滿月の如し、是れを名けて四となす。即ち心月圓明の中に於て、
諦かに明の字を觀じ其をして了了ならしめ、次第に分明に持念して數を記す、時分に隨
て遍數充足す、乃至相現じて意に隨て成就せん。この中の四種、若し自身本尊に同す
と觀じて而も念誦するものは、能く少功をして速に悉地を得せしめ、福慧満足す。云
何んが觀を作さん、謂はゆる本明の中に於て一字心の明を先づ自心に置き、字より而
かも轉して本尊の形となる、此に二種あり、謂く佛菩薩なり、上に説くが如し、謂く
盧舍那釋迦牟尼なり。

復た次に類を擧ぐれば文殊の如し、自身をして彼れに同せしめんと欲はんものは、當に滿字を以て菩薩の心に入るべし、置字の明に曰く。
娜麼三曼多勃駄囉、滿。

(二) 拔折囉 金剛の、(三) 施無畏の印なり。

即ちこの字より轉して文殊と成る色鬱金の如し、首べに五髻あり跏趺して坐せり、左の手を以て青蓮華の莖を持し、其の上に於て(二) 拔折囉を堅つ、其の右の手を以て(三) 施無畏に作せ、施願手と名く、此の菩薩の根本の明を誦して曰く。
娜麼三曼多勃駄囉、囉囉嚨嚨羅迦、微目吉底跋悉迫多三磨羅、三磨羅鉢羅底吽、莎訶。

(三) 支分 身體の、(四) 支分。

其の印相は、二手合掌して二中指を交へ右を以て左を押せ、右の無名指左の中の頭を捻し、左の無名指右の中の頭を捻し、二頭指を屈して背け着けしめ、二大指の頭を押す、其の形劔の如し。印を以て一一の(三) 支分を印じ然して後に念誦すべし、若し餘の佛菩薩の明印の法を持せんものは、各各に自ら本明印法に依て加持念誦せよ、廣く經に説くが如し、此れに准じて知るべし、若し以て一一別に本部の明印の法に依ること能はざるものは、即ちこの明を以て其の處に用ひ代へよ、普通佛部の心明に曰く、
娜麼三曼多勃駄囉迦。

この秘密心は、諸佛共に説きたまふ。當さに自心に置いてまた其の義を觀すべし、一切諸法は、無造無作にしてこの字より轉ず、これ即ち眞實如理の光明なり此はこれ諸佛の加持したまふ明心なり。

復た次に一切の諸菩薩の法に通ずる寶印を結ぶべし、二手十指右を以て左を押して相ひ又へ拳に爲て猶し寶形の如くし、當に指の頭を左の指の岐の間に互相に堅て持せしむ、密しく縫ふこと無らしむ、指の頭をして指の間に出さしむることなかれ、印を以て心に當て、これを誦すれば、一切菩薩等障惱を除斷したまふ明に曰く。
娜麼三曼多勃駄囉、薩囉囉他欠、微末底微枳羅拏、達囉摩駄囉、囉囉囉多僧僧莎訶。

これを思惟寶王の妙印と名く、一一の諸菩薩の形を觀するに隨てみなこの明印を用ふ。復た次に、隨心入念誦とは、その法字を自の頂上に置き、雜色の光を放つ、加ふるに空點を以てして、當に空の如しと思ふべし、復た頭の内に於て、想ふて暗字を置き、加ふるに空點を以てす、その光純白にして、猶ほ明月の百道の光明十方を照すが如し。善く觀察する者は、(二) 百法明門、此の生に速に證す、復た、眼の中に於て、想ふて覽字を置き、その字の光色猶ほ明燈の如し、此の慧明を以て、内外照明にして心月を照

(二) 百法明門 菩薩の初地に於て證得する所の智慧門なり。

(二) 無明隨煩惱
根本煩惱枝末煩惱
等一切の煩惱を云
ふ。
(三) 本明 根本の
眞言のこゝ。

(三) 懈極 疲極の
意、觀念の分別を
忘却して言亡慮絶
の處なり。
(四) 意支 内心の
こ。

らせ。復た、月の中に於て、阿字を觀せよ、その字の光明、猶ほ淨金の光色の若く、顯密ともに不生不滅なり、即ち、その時に、心を了見し、本尊の位に住すれば、光明の華輪、而も自ら圍繞し、暉焰清淨にして、能く(三)無明隨煩惱の垢を竭くす、この觀を作すとき、(三)本明を持するに隨て、心月に布し、右に旋らして行を爲し、誦らかに了し觀察すべし、若し單と句と意の所樂に隨て、若しは誦し、若しは思ひ善く氣息を調へ、その字句をして息の出入に隨て、初末相ひ隨はしめよ、若しその義を思ふことも亦た復た是の如し。

復た次に、若し自他を利用する願を成就せんと求めば、理の如く相應して、方に持誦を作せ、數終て(三)疲極せば、然も止息すべし、若し義を思ふ者は、その字句を以て、心月に布し、深く密意を淨めて、その義を思惟すべし。

復た次に、若し福慧を修して、善根を成就せんには、(四)意支を澄淨にして、而も念誦を作せ、不惡の時處ならば、亦數の限りなし、而も偈を説て言さく、

若し上中下の 悉地を成就せんと求むる者は、
皆な應に心を澄淨にすべし 時處等を求めず、

(二) 支分 身體の
こゝ。
(三) 明 眞言のこゝ。

但し(二)支分に(三)明を布して 一心に念誦に入れ、

世尊この法を説て 名けて眞實念となす、

時と相と及び數を記すべし 應さに彼の二種の人、

暖と及び煙と焰とを得 種種の諸の善相、

一月を経て滿すべし 一洛叉を誦し滿ちて、

若し是の如くの事なくんば 復た第二月に依て、

隨分に香華を奉り 前に依て念誦を作せ、

善相を得已るに隨て 具法をもて成就を作せ、

上の如く善く觀察すれば 樂ふ所自ら相應す、

若しは心念及び聲 願に應じて皆な満足せん。

復た次に、智者毘盧遮那心地の法を持せんと樂ふ者は、先づ自心に於て、一の阿上字

を置て當に思惟を起すべし、諸法は本從り無生無滅なり、前に已に説くが如し置字の明に曰はく、

娜麼三曼多勃駄難阿。

此の字より、如來の身を轉起す、是れを身密門と名く。復た、眉間に於て、身の密印

(一) 白毫相 佛の眉間にある特殊の相。

を以て、(一) 白毫相に置き、毫相の印は、右の手拳に爲して、急に大指を握り、擧げて眉間に置き。此の明を誦して曰はく、
娜麼三曼多勃駄難、唵哈闍。

(二) 明印 眞言の印契のこと。
(三) 五字 阿・嚩・嚩・唵・囉・伽・佉の五字なり、已下五字を自身に安布すること、を明す。

此の(二) 明印を以て、眉間に加ふれば、即ち如來に同じく等しくして異なることなし。便ち(三) 五字を以て身分を加持して、想て五處に置き、謂はく、身と、及び臍と心と頂と、眉間となり、この法に依て住すれば、即ち世尊に同ず、初め身下に於て、想ふて阿上字を置き、その形正方にして、黄金の色の如し。置字の明に曰はく、
娜麼三曼多勃駄難、阿上。

(四) 金剛輪 五大の中地大なり。

是れを摩系達羅字と名く、此の字より、轉んじて(四) 金剛輪と成る、即ち如來の座なり。次に、鍔字を想ふて、自の臍輪に置き、霧月の白色の光を含んで凝耀あるが如し、摩訶脩路拏大悲光と名く。置字の明に曰はく、
娜麼三曼多勃駄難、鍔。

(五) 所知障 菩提の智を障ふる煩惱に迷ふ心なり。

次に覽字を想ふて、自心に置き、その字の光色猶ほ暉日の如し、智慧の光と名づく、心より而も轉んじて(五) 所知障を破す。置字の明に曰はく、

娜麼三曼多勃駄難、覽。二初長聲に似たり。

(二) 劫災 壞劫の末に火風水の三災ありて世界を破壊す。

次に哈字を想ふて、髮際に加へよ、その光黒色にして(二) 劫災の熾起て大威勇あるが如し、自在力と名く。置字の明に曰はく、
娜麼三曼多勃駄難、哈。

次に、依法聲を帶す字を想ふて、頂上に安んじ、加ふるに空點を以てせよ、一切の色雜寶の光明を起して、一切處に遍んず、大空智と名く。置字の明に曰く、
娜麼三曼多勃駄難、依。

(三) 金剛の身 金剛の如く堅固常住の大日法身のこゝ

この五字を以て、勝身に布すれば、大威徳智慧の光明を具して、永く衆難及び三惡業なし。一切の魔軍自然に降伏し、難調の鬼神も能く障をなすことなし、唯だ赫奕たる(三) 金剛の身を見る、又た身の中に於て、想ふて阿上の暗の聲を帶す字を置き、その兩眼に於て、想ふて覽字を置き、前の如く相應して當に自身即ち如來身なりと觀すべし、無垢眼を以て、心月を照らし、相應の字句若しは誦し、若しは思ふて間斷せしむることなかれ、聲は鈴鐸の如く、智は映鏡の如し、若し佛菩薩所説の明印、樂はがひに隨て受持すれば、速に成就を得。

復た次に、若し釋迦如來の明印の法を持誦せんと樂ふ者は、先づ自心に、一の婆上字を置き、この字の光明諸の觀行を離れたり、是の如くの思を作せ、此の字より牟尼の身を轉起すと。置字の明に曰はく、

娜麼三曼多勃駄難、婆。

秘密の加持を以て、佛身を成じ、已て當に密印と又以び眞言とを持すべし、その印相は、二手臍に當て、右を以て左を押せ、猶ほ入定の如し、是れ如來鉢の印なり。此の身明を誦して曰はく、

娜麼三曼多勃駄難、薩嚩訶吉嚩、捨儻素捺娜、達嚩磨、嚩室多鉢羅跋多伽伽娜三摩、三摩莎嚩訶。

是の如く世尊の明印を受持して、成就せんと樂ふ者は、皆な本字に依て、相應して而も本尊の形を轉起せよ、復た字門を以て身の支分に布して、然して後に持誦すべし、前に已に説くが如し。

復た次に、若し此の法門を修行せんと欲ふ者は、先づ當に大迦路擊此には悲生曼荼羅に入ることを求め已て、復た閻梨灌頂を受持することを蒙り、乃ち應に具足して修行すべ

し、此の法は縦ひ持明餘の灌頂を得る者も堪へざる所なり、若し此の法門を備ふることを得る者は、諸佛菩薩皆な悉く歡喜したまふ。

復た次に、若し別明を持すとも、能く此の經所説の儀軌に依て、身の支分に於て、明の字を安布すべし、いはゆる五字等威徳を増加し、もろくの過罪を離れしむ、然れども即ち本尊の法則に依て、誦持し成就すべし。

復た次に、その本尊の明印を持誦するに隨て、漫荼羅の相、事の形色に隨ひ、坐して方便の善を起さば、この瑜伽疾く悉地を得、凡そ三品あり、いはく上中下なり、事に隨て相應するに、復た三種あり、いはゆる寂靜除災と増益と降伏となり、一種の中に隨て、復た四相を分つ、いはゆる圓相は白色、方相は黄色、蓮華相は當に赤色に作すべし、三角相は即ち黒色を布すべし、是れを四相と名く。復た次に、寂靜を修する者は、結跏趺坐して、面を北方に向け、圓相に對し、一心に縁を離れて成就の法を作すを、扇底迦センチカと名く、増益を修する者は、脚を交へ膝を堅て、而も東方に向ひ、方相に對し、歡喜して而も坐して成就の法を作すを、布瑟致迦ホシチカと名く、相攝の法を修する者は、當に兩の膝を峻ふすべし、堅く坐し相ひ怒る貌の如くして心に喜び、

(一) 凡三品已下
息災増益降伏の三
種を三品と稱し、
降伏より歡愛を聞
きて四種法をす即
ち四相に分つとい
ふなり。
(二) 圓相 息災法
を修する時の壇形
なり。
(三) 方相 増益法
を修する時の壇形
なり。
(四) 三角相 降伏
法を修する時の壇
形なり。
(五) 扇底迦 息災
法の梵名。
(六) 布瑟致迦 増
益の梵名。

(一) 幡施迦羅擊
敬愛の梵名。

(二) 阿毘遮羅迦
降伏の梵名。

及び彼の名を稱し、蓮華の相に對して、而も持誦する者を、(一) 幡施迦羅擊と名く、降伏を修する者は、空露に踞踞して面を南方に向け、三角の相に對つて、忿怒智を起し、法と相應するを(二) 阿毘遮羅迦と名く、是の如く持誦して成就を作す者は、類に隨て香華衣服に及以し、本法を稱すれば災を攘ひ、福を増し、壽を延べ、怨を降す、次第に相應して差失せしむること勿れ意に隨て成就せん。

復た次に、いはゆる明の初に、(三) 唵字を安んじ、後に所を稱して方に莎嚩訶と言ふを扇底迦と名く、明の初に唵字を稱して、後に事の名を稱し、方に鉢發吒の句を稱するを、名けて降伏阿毘遮羅迦となす。

若し明の初に娜麼の句を稱し後に、所を稱して後に娜麼の句を言ふ、是れを増益布瑟致迦と名く。

若し明の初に、鉢發吒の句を稱し、後に名事を稱して後に鉢發吒の句を言ふ、亦阿毘遮羅迦と名く。

若し明の初に娜麼の句を稱して、後に名事を稱し已て即ち鉢發吒の句を言ふ、是れを幡施迦羅擊と名く。

(三) 唵 四種法を修する時眞言加句を明す。

或は明の初に、鉢發吒の句を云ひ、名事の後に於て、親統續統親統續統と云ふ、亦た阿毘遮羅迦と名く。

如上の明法の次第色相は、皆な字に依て轉んじて本尊の形と成る、各々本法に隨て、自身を加持せよ、若は金剛薩埵、若は佛菩薩、みな應に思惟すべし、法と相應すれば成就を作す、法とはいはゆる前の如く佛菩薩衆の無量の功德等なり、復た無盡の有情界に於て、分て大悲願を興し、利樂等を作し、佛菩薩を請して、香華を辨するに隨て而も供養をなすべし、上に已に説くが如し。

復た次に、當に合掌を作して金剛の讚微妙の言辭を以て、如來の眞實の功德を稱歎すべし。所修の善を以て廻向し發願して是の如くの言を作せ、

如來所證の功德聚をもて 皆な悉く大菩提に廻向したまふ、

我れ今所修の諸の福慧を 菩提に廻向することも亦た是くの如し、

法界の衆生生死に溺れ 六道に輪廻して歸る處なし、

誓願して咸く度して菩提に至らしめ 自利利他満足せしむ、

我れ如來の大智に依て住して 一切衆生と普ねく同じからんと願ふ、

業障 惡業を行ひて正道を障礙するもの。

常に當に福德集を修集して 永く業障の諸の煩惱を離れしむべし、我等願はくは第一の樂に登り 悉地礙りなく圓成することを得、内外清淨の妙莊嚴 具足して身従り遍ねく流出せんことを、是の因縁成就するを以ての故に 衆生の所願皆な滿せしむ、是の如く廻向發願を作し已て、復た退迦及び諸の供養を上つる。上に説く便即ち合掌しが如し 十方の佛と 一切の諸菩薩とを敬禮したてまつり、是の如くの言を作す、十方の佛と 一切の諸菩薩とを敬禮したてまつる、唯だ願くは我が 最無上道を安立する處の、甚深の妙大乘を 速に我をして開解せしめ、決定の心無等にして 疑を斷じて永く盡さしめたまへ、禮を作し已て、復た當に啓白して是の如くの言を作すべし、現前の諸の如來 救世の諸の菩薩、不斷大乘の教 殊勝の位に到る者の、唯だ願はくは衆の聖尊 決定して我を證知して、

阿耨菩提 無上の覺のこと。

各々當に所安に隨ふべし 後に復た哀を垂れて赴きたまへ、復た前の初の三昧耶の印を結で、頂上に至て、之を散すべし、前の如く結護法則の次第憶持して一一に解散せよ、先きに請じたてまつる所の尊、各々宮に還らしめよ、若し解除せざれば、即ち無等の誓法のために遮せられて去りたまはず、是の如く解きて尊を送り已て、即ち後に前の所説の法界明印を結んで、自身前に已に説が如しを加持して、是の思惟を作せ、即ち我が此の身と法界の本性と、同躰にして菩提心に住すること、猶ほ金剛薩埵の如し、即ち復た想ふて唵字を置いて自の頂上に安すべし、復た甲冑明印を以て金剛甲を被よ、是の如く密嚴即ち復た自性金剛に同じて、能く壞する者なし、諸を此の人身を見聞することある者は、即ち佛及び諸菩薩を見るに同じ、若し言音を聞き或はその身に觸れば、皆な必定して阿耨菩提に於て不退轉を得、一切の功德悉く能く成就す、即ち佛身と等しくして異なることなし、是の如くし畢已て、復た増勝の心を起して事業を修行し、諸の有情のために、當に勤めて自ら勵まし懈慢を得ることなかるべし、清淨の處に於て、隨分に香華を嚴持し、供養して、當に自身佛菩薩の如しと觀すべし、所起の身、若は觀音に住し、或は諸佛勝妙の身に住し、本明印に隨て、而

(二)素字 觀音の種子なり。

も加持を用ひ、法施の心を以て、然して後に大乘方廣甚深經典を讀誦し、如來の無量の功德を歌讚し、或は心念を以て、諸の天神に請して、皆な聽受せしむべし。

復た次に、若し觀音を以て身を加持せば、而も此の菩薩は、即ち是れ如來の功德莊嚴の眞淨法身なり。若し毘盧遮那を以て身を加持せば、而も此の如來は一切の法王にして、諸法の中に於て自在を得たまふ者なり、是の故に、此の二尊に於て、隨て一尊に依て本性の相を作して、而も加持を用ふるなり。復た次に、若し觀音の性を以て、加持を用ひば、想ふて(三)素字を以て、心中に置き、置字の明に曰はく、

娜麼三曼多、勃駄難、素。

當に素の義を思ふべし、無染無着なること猶ほ蓮華の淤泥より出る性の如し、是の如く、觀音の妙形、此の字より轉ず、即ち是れ聖者にして更に凡狀なし、前に已に説くが如し。印相

は即ち前の蓮華座の印なり、此の明を誦して曰はく、

娜麼三曼多勃駄難、薩嚩嚩但他莫多、嚩路吉多、迦嚩拏、麼也、囉囉呼闍莎嚩訶。

先づ覽字を以て、頂上に置き、即ち復た此の明印を用て、自身の頂上を加持して、然して後に力に隨て經典を讀誦し、或は制底或は曼荼羅を造し、塔を造て經行し、諸の

(一)六和敬 身和敬、二口和敬、三意和敬、四戒和敬、五利和敬、六見和敬、六檀越 施主のこと。

(三)搏食 手を以て食を丸めたるをいふ。

善事業を修し、(二)六和敬をもて初て有情を發せ。

復た次に、若し食時に至らば、身を支へんがための故に、應に乞食を行すべし、或は

(三)檀越の請或は僧中に得る所の食を食せよ、當に一切の魚肉と蕪菜と、本尊の諸佛を供養せるの餘り、乃至種種の殘宿の不淨を離るべし、果木諸の漿の人を醉はすべきもの皆な受くべからず、若し如法清淨の餘食を得ば、先づ(三)搏食を以て、用て本尊に獻じ然して後に隨て食すべし、食分に餘りあらば、諸の飢乏貧窮乞食者に施し、當に是の念を作すべし、我れ身を持って安穩に道を行せんがためなり、是の故に食を受くと、滋味を以て悅澤し、心を増減せざれ、亦た車に膏ぬまさして諸物を運載すれば傷敗せざるが如しと、故に是の念を作し已て、然して後に、即ち所受の食の中に於て、想ふて覽字を置き、遍く諸食を淨む。復た想へ、自身全く鏝字と成り、此の字より轉じて羯磨金剛堅固薩埵となると、想字の明に曰く、

娜麼三曼多勃駄難、唵、鏝、莎訶。

此の明力の故に能く速に金剛の身を轉得せしむ、

復た十方の明八遍を誦して、方に乃ち之を食せよ、明に曰はく。

娜麼薩嚩嚩、勃馱胃地薩埵難、唵麼訶囉帝嚩摩、里儼莎訶。

是の本尊の瑜伽に住して、食し訖て、あらゆる餘食は、不動の心を以て、持誦一遍して、伴神に施せ、此の神歡喜して常に自ら相ひ隨て而も擁護を作す、不動の明に曰はく、

娜麼三曼多囉日羅赦、哆囉吒阿暮伽戰擊摩訶盧灑擊、馱頗吒也、叫怛唎婆也怛唎婆也、叫怛唎吒淖、滿。

(一) 初中後夜、午後八時頃を初夜、夜半を中夜、午前六時頃を後夜といふ。

(二) 右脇而坐、右の時は定門にし、左の時は定門の故に、動轉を靜むる義なり。

復た次に、食し竟て暫息して、復た當に前の如く禮拜し悔過すべし、身を淨ふして、經典を讀誦する等、常の如く作業間闕すべからず、(一) 初中後夜に應ずる所の法の如く、思惟し修習せよ、若し暫らく睡眠すれども、即ち前に説くが如く、事業金剛の明印の字等を、身に轉じ、甲を著し、金剛身の如くにして、一切佛菩薩等を敬禮したてまつり、即ち運心して身より、香華雲を起して、而も供養を爲せ、悲愍の心を作して、衆生を覆護し、大菩提を求むべし、是の念を作し已て、然して少時安寢すべし、睡眠のために而も貪著を生ずること莫れ、初に應に身の威儀を正しくして、(二) 右脇にして足を累ねて師子の臥せるが如くすべし、若し支體疲懈せば意に隨て轉側せよ、當に明

相を思ひ速に起つ心を作すべし。又復た應に妙好なる高廣の床の上に坐臥すべからず、起き已んば、初の如く修習し念誦すべし、乃至日出の法事上の如し。

復た次に持眞言者、常に應に専ら勤むべし、棄捨すべからず、三世の一切諸佛菩薩、皆な心の法を修して疾く如來の一切智地を得たまへり、若し智者有て、凡夫地より、如法に修行すれば、即ち能く此の生に遍ねく無邊の諸佛の刹土を歴ん。

復た次に、若し遍數に依て、時相の中に於て専ら勤めて修習すれども猶ほ成就せざれば、應に自ら警悟して、倍精進を加ふべし、退没を生じ、下劣の想ひを起して、而も是の法は我が堪ふる所に非ずと言ふこと勿れ、復た應に疎慢の心を作すべからず、その身力を盡して決定の意を作せば、必ず成就を取る。復た是の念を作せ、一切諸佛及び諸の菩薩は、是れ我が所依なり、我が依なるに由るが故に、無盡の有情必ず我れ度せんと希ふ。我れ誓て一切衆生を度脱すること是の如く勸誡して休息せざるが故に、諸佛菩薩、皆な其の心を知り、即ち威神の加持を以て捨てたまはず、その所作に隨て即ち成就を得るなり、

復た次に、是の中の二事捨離すべからずんば、速に成就を得。一には諸佛及び諸菩薩を

捨てざれ、二には衆生を饒益することを捨てざれ、恒に智願に依て、心傾動せざれば
それこの二行意に隨て成就す。

復た次に、此の法を修行せば、意に隨て、内外澡浴して、身心常に清淨ならしめよ、
此の中に二法あり、謂はく、内澡浴及び外澡浴なり。内澡浴とは謂はく明字を身心の
中に布するを、内澡浴と名く、上の所説の如し、外澡浴とは時に隨て盥洗す。或は河流池處なり
三昧耶を自の頂上に安じ、その覽字を以て水中に置き、無動の明印を以て、その處を
結護せよ、置字の明に曰はく、

娜麼三曼多勃駄難、覽。

此の字を置て、能く垢を離れしめよ、復た樂ひに隨て本尊の身相に住すべし、復た當
に不動明王を以て三聚の土を持して澡浴を用ふべし、不動の明に曰はく、
娜麼三曼多、勃駄難、捍。

前の刀印を結で、用て土衆に觸れて、護身結界し、意に隨て應に作すべし、復た三界
最勝の明心を用ひ、以て結護をなせ、心明に曰はく、

娜麼三曼多、嚩日囉赦、堅。

その密印とは、前の如く五股金剛是れなり、或は身明を誦して曰はく、

娜麼三曼多嚩日囉、赦、呵微麼薩嚩囉怛他莫多、微灑曳三婆嚩帶賴路枳也、微社也、
吽闍、莎訶。

是の如く浴し已て、一の淨處若は水池の中に詣り、印を以て水を掬し、如法に口を漱
げ、謂はく、印手を以て眼・耳・鼻・口・頂・喉等を沾ぎ、身衣に散灑すべし、復た以て三
昧耶を結で頂上に置き、本尊及び諸の菩薩を禮すと想へ、復た二手を以て水を掬して
三たび尊に奉獻し、以て三たび水を掬し、本尊及び三寶を浴し已り、浴處より出で、
有情を愍念し、解脱せしめんと欲ふて、精室に趣詣し、前の次第に依て念誦を作せ。
復た次に、若し水中に依て念誦を作すとき、水或は頂に至るを上成就となす、水或は
腰に至るを中成就となす、水若は膝に至るを下成就となす、是の如く三相一相を得る
に隨て、上中下に於て、皆な能く成就し、無量の重罪一時に除盡して一切智の句その
身に集在す。

復た次に、若し一切の支分を供養し、及び衆の方便を以て、次第に修行して諸相を離
れずして成就を求むる者、是れを世間の小悉地と名く、若し無相最勝の觀察に依て、深

身分に差別を顯す
一の身分も法界
なればなり。

(一) 制吒・制微共
に使者の義、制吒
は男聲、制微は女
聲。

(二) 佛母 佛眼を
以て佛部の母と爲
す。此の文を以
て證となす。

(三) 半拏羅縛悉爾
Tandarasini 白
處、白衣と譯す。白
衣觀音は觀音部の
部母となす。

(四) 忙菴鷄 譯し
て衆母、金剛部の
部母なり。

より腋に至らば中と爲し、足より臍に至るをば下と爲す。眞言の中に於てまさに三種の成就を分別すべし、斯の三部に於て各分ちて三と爲す。善く須らく三部の中の眞言を解了すべし。明王の眞言是れ上成就なり。諸餘の使者の(一)制吒・制微等は是れ下成就なり。扇底迦の法、補瑟微迦の法、阿毗遮嚩迦の法は三部の中に於て各各に皆有り應さに須らく善く知つて次第を分別すべし。若し佛部の中には、(二)佛母の眞言を用つて扇底迦の法と爲す。佛母の眞言に曰く、
那謨喃伽縛底、卽瑟泥灑野、唵嚩嚩塞普嚩、入嚩囉、底替佉、悉駄路者爾、薩末囉訖娑、駄爾、莎嚩訶。

若し觀音部の中には觀音母の(三)半拏羅縛悉爾の眞言を用つて扇底迦の法と爲す。觀音母の眞言に曰く、
那謨囉但娜囉耶野、唵、迦制彌迦制、迦縛迦瑟迦制、喃伽縛底彌惹曳、莎嚩訶。

若し金剛部の中には、執金剛母の(四)忙菴鷄の眞言を用つて、扇底迦の法と爲す。金剛母の眞言に曰く、
那謨刺但娜囉耶野、那莫室戰擊跋日羅幡擊曳、摩訶樂趁灑栖娜幡囉曳、那謨路迦駄

室囉曳、那莫商迦捺扇底迦捺、經縹經縹、具置頼伽囉野、經置底、莎嚩訶。

又佛部の中には、明王最勝佛頂の眞言を以て補瑟微迦の法と爲す。明王の眞言に曰く
那謨跋囉底歌妬、瑟膩灑野、薩囉但囉幡囉囉野、捨麼野捨麼野、扇底但底、達麼邏惹囉使惹、摩訶蜜爾曳、薩囉遏訖娑駄爾、莎嚩訶。

又觀音部の中には、明王(一)歌野圻利嚩の眞言を以て補瑟微迦の法と爲す。明王の眞言に曰く、
唵、阿蜜囉妬、幡暮囉縛、那莫。

又金剛部の中には、明王蘇嚩的眞言を以て補瑟微迦の法と爲す。明王の眞言に曰く、
那謨刺但娜囉耶野、那莫室戰擊、跋日囉幡拳曳、摩訶樂起灑栖娜幡囉曳、唵、蘇囉囉蘇囉、虎吽、圻里豐擊圻里豐擊、虎吽、圻里豐擊幡野虎吽、阿曩野抱、薄伽吽、苾地耶邏惹、虎吽拏吒。

又佛部の中には、大忿怒(二)阿鉢囉爾禪の眞言を以て阿毗遮嚩迦の法と爲す。忿怒の眞言に曰く、
唵、虎嚩虎嚩、戰擊里摩燈倪、莎嚩訶。

(一) 歌野圻利嚩
haryiva 馬頭
譯す、馬頭觀音な
り。

(二) 阿鉢囉爾禪
aparajita 無能勝
明王、密號は勝妙
金剛、大疏には釋
迦の化身なりと。

(二) 施婆轉訶
に寂留の明、此
は無量壽の定門
を主るといふ。

又蓮華部の中には、大忿怒施婆轉訶の眞言を以て阿毗遮嚩迦の法と爲す。施婆轉訶の眞言に曰く、
娜謨刺但娜但囉耶野、娜謨摩訶室里野曳、唵、鑠枳曳絳摩曳、諫弭曳、悉睇悉睇、娑
駄野、始廢始廢、始梵迦囉始梵米、阿囉歌、薩嚩遏訖娑駄頼、莎嚩訶。
又金剛部の中には、大忿怒軍荼利の眞言を以て阿毗遮嚩迦の法と爲す。忿怒の眞言に
曰く、

娜謨刺但娜但囉耶野、娜莫室戰拏、摩訶跋日囉矩嚩駄野、唵、虎嚩虎嚩、底瑟佉底瑟
佉、畔駄畔駄、歌曩歌曩、阿密囉底、虎鉢拏吒。

復眞言有て、三部に入らずんば、彼の眞言の文字に隨ひて、而も扇底迦等の三種の法
を辨せよ。眞言の中を見るに、若し扇底句嚩の字、莎悉底句嚩の字、闍菴の字、鉢囉闍
菴の字、烏波闍菴の字、莎訶の字あらば、當さに知るべし即ち是れ扇底迦の眞言なり。
若し補瑟置迦の字あらば、當さに知るべし即ち是れ補瑟置迦の眞言なり。若し句嚩の字
あらば、當さに知るべし即ち是れ阿毗柁嚩迦の眞言なり。復眞言の句義慈善なる有る
は、當さに知るべし即ち扇底迦の用に入る。若し眞言の句義猛怒なる有るは當さに知

るべし即ち阿毗遮嚩迦の用に入る。若し眞言ありて非慈非猛なるは、當さに知るべし
即ち補瑟置迦の用に入ると。若し速に扇底迦を成せんと欲はば、當さに佛部の眞言を
用ふべし。若し速に補瑟置迦を成せんと欲はば、當さに蓮華部の眞言を用ふべし。若
し速に阿毗遮嚩迦を成せんと欲はば、當さに金剛部の眞言を用ふべし。此の經は深妙
なること天中の天の如しと云ひ、上中の上と言ふことあるは、若し此の法に依らば、
一切の諸事成就せざることなければなり。此の經は金剛の下部に屬すと雖も、佛教を
奉ずるが爲めに亦能く上の二部の法を成就す。譬へば國王の教勅あるに隨つて自ら亦
依行するが如く、此の法も亦爾なり。義に准じて應さに知んぬべし。若し眞言あつて字
の數少しと雖も、初めに唵の字あり後に莎訶の字あらば、當さに知るべし此の眞言は
速に能く扇底迦の法を成就すと。或は眞言あつて初に鉢字あり後に拏吒の字あり、或
は囉普の字ある、此は是れ訶聲なり、上の如くの字ある眞言は、速に阿毗遮嚩迦の法を
成就することを得。或は眞言あつて初に唵字なく後に莎訶の字なく、又鉢字なく、亦
拏吒の字なく、及び囉普等の字なくんば、當さに知るべし此れ等の眞言は速に能く補
瑟置迦の法を成就すと。若し復人ありて諸餘の鬼魅及び阿毗舍等を攝伏することを求

めんと欲はば、當さに使者及び制吒迦等の所説の眞言を用ふべし、速に成就を得ん。若し復異部眞言ありて能く一切の事を成就すと云ふは、但だ能く本部の所説のみを成就して餘部には通せず、猶ほ經に彼れに眞言ありて毒を除き病を除くが爲めの故に之を説くと演ぶることあるも、亦能く餘の諸の苦を除く、當に即ち其れは一切に通じて用ふと知るべし。善く其の部を知り善く眞言の所應の用處を識り、亦須らく其の眞言の功力を知るべく、復須らく善く眞言を修する法を解すべし。所求の願に隨ひて當さに須らく誦持して彼の眞言を誦すべし。

蘇悉地羯羅經(三) 分別阿闍梨相品第二

(一) 分別阿闍梨相品 第三問の云何なるか阿闍梨の答説なり。(二) 謂く支體圓滿し云々已下阿闍梨の相二十三相を明す。(三) 貴族 深祕の釋によらば大菩提心を以て貴族とす。(四) 小罪 眞言門の四重禁の中若し一刹那も退轉を起せば小罪なり。

復次に我今當さに阿闍梨の相を説くべし。一切の眞言是れに由りて得るが故に、阿闍梨を知るを最も根本と爲す。其の相何ん。(一) 謂く支體圓滿し、福德莊嚴すると、善く須らく世出生の法を知解すると、恒に法に依りて住して非法を行せざると、大慈悲を具して衆生を憐愍すると、(二) 貴族に生長すると、性調ひ柔和にして、共住すること有るに隨ひて皆安樂を獲ると、聰明智慧、辯才無礙なると、能く忍辱を懷き我見を懷かざると、善く妙義を解し、深く大乘を信ずると、設ひ(三) 小罪を犯すも猶ほ大怖を懷

(一) 大乘經 祕密を修學して三乘教を誇らず。(二) 四攝 布施・愛語・利行・同事。菩薩はこの四事を以て衆生を攝化する。(三) 大法 眞言密教。(四) 小縁 小乗教。(五) 先師 傳法の阿闍梨を指す。

(六) 歸依の處 大菩提心に安住せずんば一切の所作悉く顛倒せん。

き身口意の業に善く調柔を須ふると心常に悅樂すると(一) 大乘經を讀み謹みて法教に依ると、勤めて眞言を誦して而も間斷せざると、所作の悉地皆悉く成するものと、復須らく善く解して漫荼羅を畫くと、常に(二) 四攝を具し、(三) 大法を求めんが爲めに(四) 小縁を樂はざると、永く慳悛を離ると、曾し師に従つて大漫荼羅に入つて灌頂の法を受くると、(五) 先師の爲めに徳者と讃歎せられ汝今より往き灌頂を受け阿闍梨と爲るに堪へんと、斯の印可あらば方に自ら漫荼羅の法則次第を造せしめて、乃ち弟子に眞言を授與するに合へり。若し此の者に依りて受くる所の眞言は速に成就することを得んこと疑を懷くべからず。若し和上阿闍梨の處に授からずして檀に眞言を誦せば、徒らに功勞を施して終に果を獲ず。夫れ弟子の法は闍梨に恭侍すること猶し三寶及び菩薩等の如くすべし。何を以ての故に、謂く能く授與せる(六) 歸依の處なり、諸の善事に於て而も首めの因と爲り現世は安樂にして當來には果を獲、謂く阿闍梨に依るが故に當さに嗣で久しからずして無上正等菩提を得べし。是の義を以ての故に之を敬ふこと佛の如くするを以て弟子と爲す、闍梨に承事するに懈怠あることなく、勤持して授かる所の明王及び明王妃を闕かざれば、當に悉地を得べし、必ず疑を得ることなかれ。

蘇悉地羯羅經(二)分別持誦相品第三

(一)分別持誦相品第四問の云何なるか成就者の持誦者若ふる中の持誦者成就の行相を明す金剛頂經に四種の念誦を説けり、二に金剛念誦、唯舌に動する點誦、三に三摩地念誦、心に實念誦、字義の如く修行するこれなり。當さに云々已下全品に三十の行相を明せり。

復次に我今眞言を持誦し成就する行相を説かん。(二)當さに須らく三業をして内外清淨ならしめ、心散亂せず、曾て間斷なくして常に智慧を修し、能く一法を行じて衆事を成就すべし。復慳慳を離るれば、所出の言詞に滯礙あることなく、衆に處して畏れ無く、所作皆辨す、常に慈忍を行じ、諸の諂誑を離るれば、諸の疾病無く、常に實語を行すれば、善く法事を解す、年歳小壯にして、諸根身分皆悉く圓滿す。三寶の處に於て常に敬信を起し、大乘微妙の經典を修習して、諸善功德退心を懷くこと無し、此の如くの人速に成就することを得。諸の菩薩及び眞言に於て常に恭敬を起し、諸の有情に於て大慈悲を起す、此の如く的人是速に成就を得。常に寂靜を樂つて衆中を樂はず恒に實語を行じて作意し護淨す、此の如く的人是速に成就を得。若し執金剛菩薩の威力自在なるを聞きて、心に諦信を生じ、歡喜して聞かんと樂ふ、此の如く的人是速に成就を得。若し人少欲にして一切に知足し、眞言を誦持し所求の事を念じて晝夜に絶えず、此の如く的人是速に成就を得。若し人初めて眞言經法を聞いて則ち身の毛豎ち心に踊躍を懷き大歡喜を生ぜん、此の如く的人是則ち成就を得。若し人夢中に自

ら悉地を經の所説の如くなることを見、心に寂靜を樂つて衆と與に居せず、此の如く的人是速に成就を得。若し人常に阿闍梨の所に於て敬重すること佛の如くせん、此の如く的人是速に成就を得。若し人眞言を持誦するに久しく効驗なくとも棄捨すべからず倍廣願を増し轉精進を加へて成るを以て限りとせん。此の如く的人是速に成就を得べし。

蘇悉地羯羅經分別同伴品第四

(一)福德莊嚴し云々是等は内相十七を説く。

復次に當に同伴の者の相を説くべし。(二)福德莊嚴し、貴族に生種し、常に正法を樂つて非法を行せず、復深信を懷きて、諸の恐怖を離れ、精進にして退せず、尊教を奉行して、常に實語を作し、諸根支相皆悉く圓滿し、身に疾病なく、過ぎて太だ長く、太だ短く、太だ肥え、太だ龜ならず、亦瘦せて小ならず、色太だ黒からず、亦太だ白からず、此の陋疾を離れたるは福德の同伴なり。(三)餘の諸の苦を忍び、善く眞言と印と曼荼羅と供養の次第と諸餘の法則とを解して、常に梵行を修し、諸事に順忍し、言を出すに和雅にして人をして聞かんと樂はしめ、諸の我慢を離れ強記にして忘れず、教あれば奉行して相ひ推託せず、多聞にして智慧あり、慈心ありて悲ることなく、常に布施を念

(二)餘の諸の苦を忍び云々已下は外相二十二を説く。

じ、善く解して明王の眞言を分別し、常に須らく所持の眞言を念誦して行者と同ふし、兼て結界護身等の法を明かにせん、是くの如くの伴を得ば則ち速に成就せん。三業調善にして、曾て師の所ミヤトに於て曼荼羅に入り、佛教に歸依して疏小の法を習はず、善く行者所須の次第を知り言教を待たずして所求あるに随ひ時を知つて即ち送らん、此の如きを具せる者を勝れたる同伴と爲す。身意賢善にして心に憂惱なく、決定堅固にして終に退心せず、是の如くの伴を得ば即ち速に成就す。多くの財利に於て貪着することを望まず是の如くの徳を具するを説いて勝伴と爲す。復行者に於て心に捨離すること無く、若し諸餘等の薬を成就せんと欲はば爲めに強縁と作つて自然の聖戒を捨離せしむべからざらん、是の如くの徳を具せるを説きて勝伴と爲す。行者の處に於て規求する所なく、未だ悉地成就を得ざるより以來終に捨離せず、縦ひ年歳を淹ひたくして悉地を證すること無くとも終に捨離の退心を懐かず、假令大苦及餘の難事有りて身心を逼惱すとも亦捨つべからず。是の如くの徳を具するを説きて勝伴と爲す。若し前の如く種の徳行あるは取上の勝事を成就するに堪能なり。縦ひ前の徳無くとも但し眞言成就の法則を明かにし、并に須らく善く諸の曼荼羅を解し智慧高明にして復加ふるに福德

ありて持誦者に勝らん、是の如くの伴は亦能く取上の勝事を成就す。取上の事を成就せんと欲ふが爲めの故に、其の福德の伴、半月半月に持誦者の與めに而かも灌頂と及び護摩とを作し、時に随ひて辨ずる所の香・花・燃燈・諸餘の次第に依りて擁護し簡擇し、爲すこと有る所に随つて并に須らく助作すべし。直に前の如く等の事を助修するのみにあらず、若し誦持者虧失する所有らば、其の福德の伴、經法に依り理を以て教誨し、法事をして闕くこと有ること勿らしめよ。乃至事に廣く爲めに諸行の因縁を開釋せよ。是の如きを具せる者取も勝伴と爲すべし。行者毎日持誦の時、所行の事に及び時有つて忘失せば其の福德の伴、所見の處に随つて相助けて之を作して周備せしむべし。若し薬法を成就せんと欲はん時には須く常に手を以て其の薬を按し、或は草幹を執つて用て之を按せよ。念誦作法せんには事務多しと雖も終に廢忘せず。行者持誦すること了らんと欲はん時には、其の伴當さに須らく側に近いて立ちて彼の行者の念誦既に勞るゝかを見るべし。或は神を發遣する法、數珠を置く法、及餘の法等を作すことを忘るゝを恐る、彼の忘れん處を見れば助けて之を作すべし。其の伴常に須く持誦し供養して所作の諸事をして福德を生せしむべし。並に皆な持眞言者に廻向して所求

の願を満しめよ。指授する所あらば唯伴と共に語るべし。若し寂勝の事を成就せんと欲ふが故に更に一の伴を許す。展轉し合語して參差することを得ざれ、其の伴の食する所は行者と同ふせよ。行者の所食は法に依つて制するが如し。是の如きを具せる者寂上の勝事の同伴と爲るに堪へたり。第三の同伴の福德も亦然るべし。一ら前の所説の如し。

蘇悉地羯羅經(二) 擇處品第五

(一) 擇處品上の諸品は既に所持の法能修の勝處に依り、若し勝處に依らざれば速かに成就するを得ず。即ち第五問の云何なる方所を勝處とするの間に對する答説なり。略して三十七勝處を明す。

(二) 三種の悉地息災増益降伏の三種。

(三) 八大塔 佛舍利を安置せる八ツの塔。

復次に眞言を持誦して成就する處の者を演説せん。何れの方地にか住してか速に佛の得たまへる所の道を成就することを得ん。四魔を降したまふ處寂も勝上たり、速に成就を得ん。尼連禪河の沂岸キガンの處に於てせよ、諸難なきが故に、其の地の方所は速に悉地を得ん、縦ひ衆魔ありとも障を爲すこと能はず所求の事悉地せざるることなし。是の如きの處は速に成就を得ん。或は佛の所轉法輪の處に於てし、或は拘尸那城の佛涅槃の處、或は迦毗羅城の佛所生の處、上の如くの四處は最も上勝と爲す。諸の障礙なく(三)三種の悉地決定して成ずることを得。又は諸佛所説の勝處に於てし、復菩薩所説の勝處と佛の(三)八大塔とあり、或は名山の諸の林木多く復花果多くして泉水交り流るる有ら

(一) 蘭若 梵語、阿蘭若(aranya)の略、遠離處、閑靜處、無聲響を譯す、普通は寺院を指す。

(二) 四河 旃伽河、信度河、縛娑河、徒陀河。
(三) 寒林 寒氣強き地。
(四) 迴獨なる大樹 大樹一本ありて迴に見ゆるを云ふ。
(五) 十字の大路 四ツ辻なり。

ん、是の如くの處を説いて勝處と爲す。或は(二)蘭若ランニヤの諸の花菓渠水交り流れて人の愛樂する所あらん、是の如くの處を説いて勝處と爲す。復蘭若の諸の麋鹿多くして人の採捕することなく、復熊虎狼等の獸なきあらん是の如くの處を説いて勝處と爲す。或は大に寒なること無く復大に熱すること無く其の處は人に宜く心に願ふ所の者、是の如くの處を説いて勝處と爲す。或は山の傍に於てし、或は山峰の頂の獨高臺たらん、或は山腹に於てし復流水有らん、是の如くの處を説いて勝處と爲す。復勝處あらん青草地に遍く諸の樹花多く中に其の木護摩を作すに堪へたるあり、是の如くの處を説いて勝處と爲す。或は舍利を安置せる塔の前に於てし、或は山中の舍利を安ずる處に於てし、或は(三)四河の邊、或は蘭若の種種の林木茂飾し嚴麗にして多くの入無き處あらん、或は(三)寒林の烟り絶えざる處に於てし、或は大河の岸、或は大池の邊、或は往曾多牛ありて居せし處、或は(四)迴獨かいどくなる大樹の下、神靈の所依として日の影轉せざるに於てし、或は多聚落の一つの神祠の處、或は(五)十字の大路の邊に於てす、或は龍池の邊、是の如くの處を説いて勝處と爲す。或は佛經所至の國、是の如くの方は速に成就を得、但し國土の人民三寶を信順し恭敬して正法を弘揚することあらん、是の如くの處は速

に成就を得ん。復國土の諸の仁衆多くして皆慈悲を具するあらん、是の如くの處は速に成就することを得ん。既に是の如くの上妙の處所を得ば、應に須らく地中の穢惡瓦礫等の物を簡擇すべし。曼荼羅品に一一に廣く明すべし悉地の法の如く善く須く三部の處所を分別すべし復須らく扇底迦の法、補瑟微迦の法、阿毗遮嚕迦の法、是の如くの三法を分別すべし。復須く上中下の成法を分別すべし。即ち是の處に於て心の所宜に随つて淨く塗灑し掃ひて諸の事業を作さば速に悉地の法を成就することを得。

蘇悉地羯羅經(二)持真言法品第六

復次に廣く真言を制持する儀式と法則とを説かん。若し此の式に依らば久しからずして當に一切の成就を得べし。(三)若し有智の者諸の真言を持せんに先づ瞋恚を斷せよ乃至天神にも瞋を生ずべからず、亦餘の持真言者を瞋嫌せざれ。諸の真言に於て意を擅にして乃至功能及び諸の法則之を分別すべからず。諸の真言及び法則に於て深く敬重を生じ、諸の惡人に於ても善く須く將護すべし。何を以ての故に能く大事を障へ及び彼を壞るが故に、阿闍梨の所に於て縦ひ愆過を見るとも身業に猶ほ驕慢嫌恨して種種の是非を談説することを生さず、心意に終に惡想を分別せざれ、過に於ても既に爾

(二)持真言法品第六問云何して真言速に成就するか第七問云何なるか第八問云何なるか第九問云何なるか第十問云何なるか第十一問云何なるか第十二問云何なるか第十三問云何なるか第十四問云何なるか第十五問云何なるか第十六問云何なるか第十七問云何なるか第十八問云何なるか第十九問云何なるか第二十問云何なるか第二十一問云何なるか第二十二問云何なるか第二十三問云何なるか第二十四問云何なるか第二十五問云何なるか第二十六問云何なるか第二十七問云何なるか第二十八問云何なるか第二十九問云何なるか第三十問云何なるか第三十一問云何なるか第三十二問云何なるか第三十三問云何なるか第三十四問云何なるか第三十五問云何なるか第三十六問云何なるか第三十七問云何なるか第三十八問云何なるか第三十九問云何なるか第四十問云何なるか第四十一問云何なるか第四十二問云何なるか第四十三問云何なるか第四十四問云何なるか第四十五問云何なるか第四十六問云何なるか第四十七問云何なるか第四十八問云何なるか第四十九問云何なるか第五十問云何なるか第五十一問云何なるか第五十二問云何なるか第五十三問云何なるか第五十四問云何なるか第五十五問云何なるか第五十六問云何なるか第五十七問云何なるか第五十八問云何なるか第五十九問云何なるか第六十問云何なるか第六十一問云何なるか第六十二問云何なるか第六十三問云何なるか第六十四問云何なるか第六十五問云何なるか第六十六問云何なるか第六十七問云何なるか第六十八問云何なるか第六十九問云何なるか第七十問云何なるか第七十一問云何なるか第七十二問云何なるか第七十三問云何なるか第七十四問云何なるか第七十五問云何なるか第七十六問云何なるか第七十七問云何なるか第七十八問云何なるか第七十九問云何なるか第八十問云何なるか第八十一問云何なるか第八十二問云何なるか第八十三問云何なるか第八十四問云何なるか第八十五問云何なるか第八十六問云何なるか第八十七問云何なるか第八十八問云何なるか第八十九問云何なるか第九十問云何なるか第九十一問云何なるか第九十二問云何なるか第九十三問云何なるか第九十四問云何なるか第九十五問云何なるか第九十六問云何なるか第九十七問云何なるか第九十八問云何なるか第九十九問云何なるか第一百問云何なるか

(一)普行の法なり(二)一切有情兩足の類、是れ最上勝の類、人天等なり(三)多足、人天を除き餘の有足、無足、多足、等、是等も皆如來の體性あり、未來世に必ず菩提を得ん、藥草等も諸佛の三形なり(四)大乘の正義、真言乘なり

(五)調戲 無益の談笑

る耳。況んや法に依るをや。縦ひ大なる怒を懷くも終に自の所持の真言を以て他の明王を縛し、及び損害を生じ並に苦に治罰すべからず。亦復降怨の法を作すべからず。未だ曾て阿闍梨の處に經於て真言を受けずして人に授くべからず。所受の人も三寶の處に於て恭敬を生ぜずば復是れ外道なり。阿闍梨の所にして真言を受得すとも亦た與ふべからず。乃至手印及び真言並に功能の法及び普行の法をば並に與ふべからず。未だ曾て漫荼羅に經入せざるものに亦授與せざれ。(三)一切有情兩足の類を跳蕩すべからず、乃至多足をも亦跳蕩せざれ。又諸の地印を踐蕩して過ぐべからず、謂はゆる鎚と輪と椀と杵と螺と金剛杵等なり。及び素より成せるも並に踐蕩せざれ。諸餘の藥草根莖枝葉及び花實亦踐蕩せざれ。亦不淨の穢處に棄てざれ。若し真言法を成就せんと樂はん者は應に須らく制に依るべし。(四)大乘の正義を詰難すべからず。若し菩薩の甚深稀有不思議の行を聞ては應に誦信を生ずべし疑心を懷かざれ。真言を持せん人は彼の別の持誦の人と更相に驗を施すべからず。若し小過に緣らば即ち降伏の法を作すべからず。成就を樂はん人は歌詠し言詞し(五)調戲すべからず。身を嚴るが爲めに好て脂粉花鬘を塗飾すべからず。亦跳躑し急走し邪に行かざれ、亦河中に裸形にして浮

(二) 諸餘の眞言
自所持の本尊の眞
言を除き餘尊の眞
言を以て攝伏擁護
すべからず。
(三) 若し悉地
下は第八問云何な
るか眞言を持誦す
る方便の次第の答
説。

ちに所持の眞言のみに非ず、(二) 諸餘の眞言をも亦作すべからず。所有の隨用の一切の眞言、皆頻頻に而かも作すべからず。亦人と互に驗力を諍はざれ。(三) 若し悉地を求めば當に須く三時に洗浴し三時に持誦すべし、浴する毎に眞言水を以つて之を洗浴すべし。水の眞言に曰く、
唵、虎鉞歌娜、跋日囉拏囉。

此の眞言を以つて水を眞言すること七遍して洗浴せよ。一切の魔族毗那夜迦災惱を爲さず、眞言せざる水を用ひざれ。土の眞言に曰く、
唵、頼伏曇、播素睇、莎縛訶。

此の眞言を以つて土を眞言すること七遍して當さに少水を以つて土に和して之を攪いて則ち身に塗摺し如法に洗浴すべし。一切の毗那夜迦災惱を爲さず、毗那夜迦を辟くる眞言に曰く、

(三) 唵、阿密栗底、歌曩歌曩、虎鉞柿。

此の眞言を誦すること七遍して、(四) 諸の毗那夜迦を辟けて即ち之を洗浴せよ、沐浴の眞言に曰く、

(三) 辟除の眞言なり。

(四) 諸の云云身中の毗那夜迦の難を遣除す。

(二) 軍荼利の眞言なり。

(一) 唵、阿密栗底、虎鉞柿。

此の眞言を誦すること七遍して、意に随つて洗浴せよ。洗浴の時には謾りに談話すること勿れ。心に須らく沐浴の心眞言を持念すべし。沐浴の心眞言に曰く、
唵、嚩可理理、虎鉞柿。

此の眞言之を誦し乃至浴し竟つて、次に水を掬して自ら頂上に灌げ、自灌頂の眞言に曰く、
唵、賀佉里里、虎鉞柿。

(三) 二手に云云灌頂の印なり。

此の眞言を以つて(三) 二手に水を掬して眞言三遍して自ら其の頂に灌げ、是の如く三度して次に頂髪を結べ。眞言に曰く、
(三) 唵、素悉地迦囉、莎縛訶。

此の眞言を以つて髪を眞言すること三遍して、頂に當てて髻を作せ。若し比丘ならば右の手を拳に作して大拇指を舒べ、頭指を屈して大指の頭の上を押へ頭指をして圓に曲げ、眞言三遍して印を頂上に置く。佛部の結髪の眞言に曰く、
唵、尸祇尸契、莎縛訶。

(三) 通用の結髪眞言なり。

蓮華部の結髮の眞言に曰く、

唵、尸契、莎嚩訶。

金剛部の結髮の眞言に曰く、

唵、尸佐寫、莎嚩訶。

次に應に手を洗ひ三度口を漱ぎ本尊主を浴し上る。佛部の(一)漱口・(二)飲水・(三)灑淨の眞言に曰く、

唵、摩訶、入嚩囉鉢。

蓮華部の漱口・飲水・灑淨の眞言に曰く、

唵、視視囉、矩嚩矩嚩、莎嚩訶。

金剛部の漱口・飲水・灑淨の眞言に曰く、

唵、入嚩理多、嚩日哩泥鉢。

漱口・飲水・灑淨を作し已らば、面を本尊所居の方に向け本尊を觀念して眞言を持誦し及び手印を作し、水を取り三掬して本尊を浴し并に(一)闍伽を奉るご想へ、或は水中に於て意に随つて念誦して方に道場に詣すべし。佛部の獻水の眞言に曰く、

(一) 漱口 行者の護
口の時に護摩の
摩の口を漱ぐに
の口を漱ぐに故に
と観する故に
水と灑淨は加持
む瀧ぎて清淨ならしむるをいふ

(二) 闍伽 arjita
梵語圓滿と譯す
供の意なれども今
は修法の時佛に供
し佛の身體を洗淨
し奉る水なり即
ち佛に供する水

唵、帝囉囉勃陀、莎嚩訶。

蓮華部の獻水の眞言に曰く、

唵、避哩避哩、鉢柿。

金剛部の獻水の眞言に曰く、

唵、微濕嚩、嚩日囉、莎嚩訶。

其の手印の相は二手掌を仰げ側めて相著けよ。二頭指を以て二大拇指の頭を捻して餘の六指は相著けて微し屈す。印を以て水を掬し眞言三遍して本尊を浴し奉る。此の印は三部に通じて用ふ。復其の處に於て所持の眞言を誦すること随つて多少に任す。然して始めて常の念誦の處に往くべし、乃至未だ彼の所に到らざる已來は瞋嫉を懷き(一)諸境に隨順すること勿れ。身心清淨にして敬つて(二)本神を想ふて徐く之に往く、堅く禁戒を持すること前の所制の如く常に持して忘れざれ、既に彼の所に到つては即ち應に法の如く諸の事業を修して之を念誦すべし。常に須らく法の如く漫茶羅を作つて供養し持誦すべし、若し疲倦あらば當さに須らく大乘經典を轉讀すべし、或は(三)制多を作る諸餘の善事も常に廢忘せざれ、日に須らく三たび(四)三寶に歸し三度諸餘の罪業を

(一) 諸境 色聲香
味觸法等の六境
(二) 本神 本尊を
いふ
(三) 制多 制底
同じく塔なり大
疏に制底と實多
體同じ此の中祕
密は心を佛塔と爲
すあり
(四) 三寶に歸し云
り。已下は五悔な

(一) 惠施を行じ云々
 (二) 已下は六度の善業を修す、惠施は財施、法教云々は法施共に檀度、不憚忍辱は忍度、不退精進は精進度、深信は戒度、六念は禪度、經典は般若度なり。
 (三) 比丘 梵語、必芻(Chul)淨を食と譯す、僧侶のこと。
 (四) 比丘尼 bhikkhuni 梵語乞士女を譯し、尼僧なり。
 (五) 優婆塞 upasaka 梵語在家にして佛道修行の男子の佛弟子たる女子をいふ。
 (六) 白月 月の上十五日間をいふ。
 (七) 拔折羅 梵語、今は三股金剛杵をいふ。

懺悔し三時に誓ひて大菩提心を發すべし。若し是の如くならば當に成就を得べし、三時に發願して勝事を成じ諸罪を除かんと願へ、故に應に常に教に依て諸の善業を作して(一)惠施を行じ大慈悲を具すべし。諸の法教に於て慳慳を生ぜざれ、常に忍辱を懷き精進して退せず、深く歸結を懷いて六念心に繼ぎ、所聞の經典諦に文義を思ひ、常に須らく眞言法品を轉讀すべし、當さに須らく眞言法經を供養すべし、經に依つて善く妙曼荼羅を書きて應さに須らく自ら入つて之を發すべし。初には諦信の(二)比丘を定めて之に入れ、(三)比丘尼と(四)優婆塞と(五)優婆夷とは次に隨つて之に入れよ。並に皆堅固に菩提心と決定心と正見心とを發し、曼荼羅に入り了らば應當に手印を結ぶ法及び眞言を持する次第・法則を授與す、正に廣く爲に眞言の法則を宣說すべし。(六)白月の八日或は十四日・十五日及び月盡の日或は十一月の十五日、是の如くの日倍供養を加へ法に依り持誦して護摩の法を作せ。加ふるに禁戒を持し常に勤めて憶念し倍々諸事を加ふれば即ち眞言速疾に成ずることを得べし。護摩を作すに向かん時には當さに須らく手を以て(七)拔折羅を持し、瞋怒金剛の眞言一千八十遍を誦し、或は百八遍して一切の事を作すべし。瞋怒金剛の眞言に曰く、

(一) 苦練木 アツ
 (二) 金剛杵 如來の智慧の銳利なるを表示せる法具、これに獨股・二股・三股・四股・五股・九股等數種あり。

娜謨刺怛娜怛囉耶野、那莫室戰擊跋囉囉囉、摩訶藥趁灑栖奈囉囉曳、唵、枳里枳里、跋囉囉、避塵囉撈捺囉、跋囉訖囉底、摩訶矩嚩駄弼惹野、賴訖鱗囉、虎併虎併柿柿、畔駄畔駄囉。

金剛の諸事には應に火天を用つて木を焼くべし、或は(一)苦練木或は屍を焼ける殘火の燼木を取れ、或は白枳檀木、或は紫檀木、隨つて一木を取つて刻んで三股(二)金剛杵に作れ。呼摩を作らん時及び念誦の時には常に左の手を以て執持せよ。能く諸事を成すが故に杵と號す。是れ善成就の者なり。若し常に此金剛杵を持する者は、一切の毗那夜迦難を爲す者悉く皆恐怖し馳散して去る。紫檀香の泥を以て金剛杵に塗り本尊の前に置き、當さに如上の眞言を以て花・香を眞言して供養すべし。其の諸の事業は金剛の秘密微細にして、悉く能く諸餘の事等を成就す。諸事を作さん時は常に須らく右の手に珠索を帶持して香を以て之に塗り眞言を誦すべし。眞言一百八遍し或は一千八十遍す。金剛明王の珠索の眞言に曰く、
 唵、枳囉枳囉、撈捺囉拏、莎嚩訶。

此の明王の大印をば梵莽鷄と名く、能く一切の明王の眞言を成し、亦能く増益し及び

(二) 鳴嚕捺囉叉
金剛子なり。

能く真言の字句を満足し、亦能く諸餘の法事及び護身の事を成就す。真に但是れ諸の明王の母なるのみに非ず亦是れ一切金剛の母なり。若し金剛部の珠索は一の(一)鳴嚕捺囉叉を著けて線の中に置き後に繋ぎて結と爲せ。金剛部の中既に爾り餘の二も知んぬべし。佛部の珠索は應さに佛母の真言を用ふべし、若し蓮華部の珠索ならば應さに半拏囉嚩斯泥を用ふべし、云く觀音母の真言なり、佛母の真言に曰く、
娜謨喃伽嚩底臨瑟泥灑野、唵、嚕嚕塞普嚕、入嚩囉、底瑟佉悉駄路者爾、薩嚩刺訖姿
駄爾、莎嚩訶。

觀音母の真言に曰く、

娜謨囉但娜但囉耶野、唵、迦制弭迦制、迦縵迦嚩伽制、嚩迦嚩底弭惹曳、莎嚩訶。

此の珠索を帶持する者は、毗那夜迦障を爲すこと能はず、身清淨なることを得て當さに速に諸の所求の願を成満す。作法の時は當さに茅草を用つて鑽に作り右の手の無名指の上に貫き置くべし、應に當部の三字半の心真言を誦すべし。真言一百八遍或は一
千八遍して後に指の上に安す。佛部の心真言に曰く、

唵、爾娜職。

觀音部の心真言に曰く、

唵、阿嚕力。

金剛部の心真言に曰く、

唵、跋日囉姪力迦。

若しは供養の時、若しは持誦の時、若しは護摩の時には、應に草鑽を著すべし。鑽を著するを以ての故に罪障除滅し手清淨なることを得て所作吉祥なり。復白氈の糸及び麻の縷を取りて童女をして染めて紅色或は鬱金色に作さしめ、合せて線索に作るに真言の結を作せ、一たび真言して一たび結び、一七結を満ちて本尊の前に置き真言を以て索を真言すること一千八遍せよ、念誦の時及び護摩の時、若しは消息の時午暮の時なり。皆持して腰に繋げよ眠るにも精を失せず常に應さに繋げ佩ぶべし、真言に曰く
唵、歌囉歌囉畔駄頓、升訖囉駄囉泥、悉駄刺梯、莎嚩訶。

若しは念誦の時、若しは護摩の時、若しは梳髮の時、着衣の時、偏袒の時、臥の時、洗淨の時、凡そ著し脱ぐ所の上の淨衣服皆之を真言せよ、若し大小便には應さに木履を著くべし、若し本尊の前及び和上阿闍梨の前諸の尊宿の前に詣るには皆著くべからず。

(二) 外天の形像
外道の貴ぶ日天
等なり。
(三) 伽陀 梵語
即ち經中に五言・
七言の句をなすも

(三) 本戒 真言乘
の四重の禁戒を指
す。
(四) 明王の戒の中
今の經の所説の法
則なり、明王とは
眞言をいふ。
(五) 供養花品 此
品は第九問の云何
なる花をか供養す
るの答説のこの内
に七十九種の妙花
を三部の諸尊に供
養する義を明す。

諸尊の處に於て身口意を以て之を供養せよ。若し悉地速に成ずることを得んと樂はん
者は、若し制多及び比丘僧を見れば應さに常に禮敬すべし、若し(二)外天の形像に遇ふに
は但應さに合掌し或は(三)伽陀を誦すべし、若し尊者を見ては亦應に禮を致すべし、若
し妙法を聞かば深く敬信を生ずべし。若し菩薩の不思議の相を聞き、或は眞言所成の
諸事を聞かば皆應さに歡喜し心に踊躍を懷くべし。若し成就を樂はば常に應さに勇進
すべし懈怠を生ずること勿れ。斯くの如くの所制常に須らく繼念すべし、若し爾らず
んば則ち制戒に違し大重罪を獲て成就する所無けん。身等の諸根恒常に定に在りて世
間の諸欲に貪著すべからず。常に勤めて斯くの如くの律制を依行して廢忘せざれば若
し晨朝の時に諸罪を誤犯して若し暮間に至らば即ち懺悔すべし。若し夜時に於て諸業
を誤犯せば明けて晨朝に至つて誠心に懺悔すべし。恒に須らく清淨にして法に依つて
念誦し及び護摩供養等の事を作すべし。常に(三)本戒に依つて應さに是くの如く作意し
て時日を遣度すべし。(四)明王の戒の中に常に須らく作意せば久しからずして悉地を獲
る位の中に住すべし。

蘇悉地羯羅經 供養花品第七

(二) 餘の諸法 鈎
召・敬・愛等の法を
指す。

(三) 名色の差別
白・黄・赤等の種
の色。

復た次に分別して三品の法を説かん、扇底迦の法、補瑟微迦の法、阿毗遮嚕迦の法、及
び(二)餘の諸法是を三品と爲す。三部に各の三等の眞言あり、謂ゆる聖者の説、諸天の
説、地居天の説、是を三部と爲す。聖者の説とは謂く佛・菩薩・聲聞・緣覺の説き玉へるも
の是を聖者の眞言と爲す。諸天の説とは淨居天より乃し三十三天に至るまでの諸天
の所説是を諸天の眞言と爲す。地居天の説とは夜叉・羅刹・阿修羅・龍・迦樓羅・乾闥婆・
緊那羅・摩睺羅・部多・卑舍遮・鳩槃荼等の所説是を地居天の眞言と爲す。若し扇底迦の
法を作さば、應さに聖者の眞言を用ふべし。若し補瑟微迦の法を作さば應さに諸天の
眞言を用ふべし。阿毗遮嚕迦の法を作さば應さに地居天の眞言を用ふべし。若し上成就
を求めん者は應さに聖者の眞言を用ふべし、若し中成就を求めん者はまさに諸天の眞
言を用ふべし、若し下成就を求めん者は應に地居天の眞言を用ふべし、是の如くの三部
に各の三等の成就あり。三種の法を作す中に俱に當さに等しく水陸所生の諸種の色花
を用ふべし。(三)名色の差別は各の本部に依つて善く之を分別せよ、以て花を眞言して
當さに之を奉獻すべし、是の願を發して言く此の花は清淨なり、生處復淨なり、我今奉
獻す願くは納受を垂れて當さに成就を賜ふべしと。獻花の眞言に曰く、

(一)この眞言は三部に通用す。

(二)水中の云々白蓮華のこま。

(三)是等の諸の花名は梵語にして恐らく支那に之れ無き花なる故に翻ぜざるべしと。

(一)阿歌囉阿歌囉、薩嚩鉢地耶駄囉、布爾底、莎嚩訶。

此の眞言を用つて花を眞言して三部に供養せよ。若し佛に獻せん花は當さに白花の香しきものを用つて之を供養すべし、若し觀音に獻せんには應さに(二)水中の所生の白花を用つて之を供養すべし、若し金剛に獻せんには應さに(三)種種の香花を以て之を供養すべし、若し地居天に獻せんには時に隨つて取る所の種種の諸花而も之を供獻せよ。應さに獻すべき花とは、(一)忙攞底花・簸吒羅華・蓮花・瞻蔔迦花・龍藥花・母單の花・嚩囉句藍花・俱物頭花・娑羅樹花・末利花・舉亦迦花・喻底迦花・勢破理迦花・句嚩囉劍花・迦淡聞花・末度攞拏迦花・但嚩拏花・彥陀補澁波花・本曇言花・那嚩忙里迦花・阿輪劍花・母注招難花・那菴難花・注多曼折利花・勿勒菟頰鉢羅花・迦宅嚩花・建折娜藍花・攞拏劍花・優鉢羅花・得藥嚩花・招難花・迦囉末花等なり。林・邑・蘭若・水・陸に生ずる所の上の如き等の花に於て、應さに須らく善く三部・三品・三等を知つて花を用つて供獻すべし。忙攞底花・得藥嚩花・招難花・末理迦花・喻底迦花・那龍藥花、上の如き等の花を用つては佛部に供獻せよ。優鉢羅花・俱物頭花・蓮花・娑羅樹花・勢破理羅聞底迦花・本曇言花・得藥嚩花、上の如き等の花を用つては觀音部の中に供獻するを勝と爲す。

(一)隨つて云云設使一種の花にして上中下を辨知して三部の三品に獻すべし。

青蓮花・鉢孕懼花・葉花・枝條の餘の説かざる者等を用つては金剛部の中に通じて供獻すべし。如上の花の中に白色の者は扇底迦の法を作し、黄色の者は補瑟微迦の法を作し、紫色の者は阿毗遮嚩迦の法を作せ。是の如くの花の中に味ひ甘きものは扇底迦の法を作し、味ひ辛きものは阿毗遮嚩迦の法を作し、味ひ淡きものは補瑟微迦の法を作せ。或は淨處に生ずる所の枝花あり、或は始めて芽を生ずる茅草、或は小草の花、或は中樹の花、大樹の花、種種の諸の花、類に隨つて當さに用ふべし。其の闍底蘇末那花をば唯通じて佛に獻せよ。若し紅蓮花ならば唯通じて觀音に獻せよ。若し青蓮花は唯通じて金剛に獻するを各の説いて上と爲す。佛部の中に扇底迦の法を作さんには闍底蘇末那花を用ひ、補瑟微迦の法を作さんには紅蓮花を用ひ、阿毗遮嚩迦の法を作さんには青蓮花を用ひ、餘の二部の中には此に類して之を作せ。上色の香花、中色の香花、下色の香花事に(二)隨つて分ち用ふ、或は花の條を用ひ、或は墮ちたる花を用つては以て天后に獻せよ、説いて上勝と爲す。紫・白の二色の羯囉末囉花は、用て忿怒尊主及び諸の使者に獻せよ、説いて上勝と爲す。句吒惹花・底落迦花・婆羅花・迦囉囉迦囉花・阿娑曩努嚩惹花・尾螺花・迦宅嚩花等、隨つて其の一を取り遍く三部に通じて之を供養せよ。

(一) 巷栢 岩檜葉
のことなり。
(二) 牛膝 イコッ
チのことなり。

及び上中下の除災等の三には、復種の諸花を以て合成して鬘を爲れ。或は種種の花を以て聚めて供養せよ、遍く九種に通じて用ふ。諸花の中に唯亮き花、刺樹に生せる花、苦辛の味ある花をば除く、供養するに堪へず。前に廣く花を列するに名なきものをば亦た用ふべからず。又木莖花・計得劍花・阿地目得迦花・普句藍花・倭籬花等も亦用ふべからず。長時の供養に九種に通ずるものは紅花・閃明花・鉢囉孕句花・骨路草等、及び稻穀花・油麻相和して供養せよ。如上所説の種種の花等の供養は最も勝上たり。如し此の類の諸花の獻すべき無くば但白粳米を用ひ、爛碎なるものを選んで之を供養せよ。亦九種に通じて互に諸花を用ふることを得ざれ。如し作法の時求むるに得ざらんものは所得の花に随つて亦通じて供養せよ、若し花を以て供獻せば應さに當部の花の眞言を用つて花を眞言して獻すべし、若し花の獻すべき無くば應さに蘇囉三の枝葉、或は莽嚕聞葉・灘敦葉・耽忙羅葉・訖囉瑟擊末利迦葉・忙觀禰伽葉・闍羅惹迦葉、及び蘭香等の葉を用つて替へて之を獻すべし、如し此等の枝葉なくば、嚕落迦の根・甘松香の根、巷栢・牛膝の根、及び諸の香菓の根・香菓等を用つて亦通じて供養すべし。謂はゆる丁香・豆蔻・穴豆蔻・甘蒲桃、諸の香菓等并に通じて花に替へ、用つて之を供養せよ。若し

如上の花葉・根菓の獻すべき無くば會見會聞の獻供養の花、或は自ら會て獻せし花、所應に隨て想運して供養せしめよ。最も勝上の供養尊法と爲す。前の如く花菓等の獻ありと雖も、若し能く心を至して虚虔に合掌頂奉して本尊に花菓を供養せよ。是の如くの心意の供養は最上なり、更に過ぎたるものなし、常に應さに是くの如くの供養を致すことを作すべし、疑惑を懐くこと勿れ即ち成就を得べし。

蘇悉地羯羅經(一) 塗香藥品第八

復次に今三部の塗香藥の法を説かん。(一) 諸の眞言に隨て供養すべきものは能く衆福を成せん。其の香藥を名けて曰く香附子・句吒曩吒・青木香・嚕落迦烏施囉舍哩嚕・煎香・沈香・鬱金迦・白檀迦・紫檀迦・嚕囉擊・肥嚕鉢囉囉鉢恒囉擊・劍波囉藍・五粒松・婆北嚕迦鉢特・菴劍・栢木・帶囉鉢囉拏迦利也劍・或は及里而囉・里佛刷子・丁香・婆羅門桂皮・天木・鉢孕罽闍乳難燥・囉盆泥・聞細囉囉嚕嚕・迦畢貪・唎達囉・訖囉母劍・頗里迦囉・囊里迦・始嚕擔辟・蘇嚕囉擊・除迦藍・忙觀拏伽・并皮多利・三縛娑・但囉擊忙斯・甘松香・那菴難・菴嚕聞・母羅計施耽・忙羅本囊言・翳羅米夜擦囉・曩却設癡羅嚕利嚕・澁比迦・但胡婆備闍・設多補澁波・囉蔬蹄草・拏迦脚・葱・句藍若底・頗囉諸囉劍・却泮藍娑縮孺・闍地夜菴劍・戰茶都嚕香

國譯蘇悉地羯羅經卷上

(一) 塗香藥品 第十問の云何なる香菓を今此の品は答説の今此の品は十の香菓を合して塗香と爲して諸尊に奉獻する法則を明す。法則に相應し一切の悉地を成す

瑟劍・鉢囉娑怛婆縛・計薩藍等の類及び膠汁なり。謂ゆる龍腦香・言陀羅娑・娑遮囉娑・安悉香・薰陸香・設落翅勢囉娑迦等、及び餘の膠ある樹の香ばしき者、並に本部に隨て善く須く合和して用ふべし。諸草の香と根汁の香と花等の三物和して塗香と爲したるは佛部の供養にせよ。又諸の香樹の皮、及び白栴檀香・沈水香・天木香・煎香等の類、并に香菓を以て前の如く分別し、和して塗香と爲して蓮華部に用ゐよ。又諸の香草の根と花菓葉等と和して塗香と爲して金剛部に用ゐよ。或は塗香の諸の根葉を具して先人の合はする所の香氣の勝れたるあらば、亦三部に通ず。或は唯沈水香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して佛部に供養せよ。或は唯白栴檀香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して蓮華部に用ゐよ。或は唯鬱金香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して金剛部に用ゐよ。又紫檀を以て塗香と爲し一切の金剛等に通じて用ゐよ。完豆蔻脚句羅惹底・蘇末那、或は濕沙蜜・蘇嚩哩羅・鉢孕隴等を以て塗香と爲し用つて一切の女使者天に獻せよ。又甘松香・濕沙蜜・完豆蔻を以て塗香と爲し用つて明王の妃后に獻せよ。又白檀・沈水・鬱金を以て塗香と爲し用て明王に獻せよ。又諸の香樹の皮を以て塗香と爲し用つて諸の使者に獻せよ。又所得の香に隨つて以て塗香と爲し地居天に獻せよ。或

(一) 三部九種の法
法を具するが故に
九種一切處明王
妃以外の諸の使者
を指す。

(二) 有情の身分の
香の觸るる所は諸
餘の供養の具皆悉
く穢惡となる故に
用ふべからず。

(三) 願香 丸香の
如きものをいふ。
(四) 壇を畫いて花
を爲す香を説くは
文中に花を説くは
詳かならず。

(五) 所持の眞言
行者の常に所持す
る呪を用ふべし。

單に沈水香を用つて以て塗香と爲し(一)三部九種の法等及び明王妃(二)一切處に通じて用ゐよ。若し別に扇底迦の法を作すことあらば白色の香を用ゐよ、若し補瑟微迦の法には黄色の香を用ゐよ。若し阿毗遮嚩迦の法には紫色の無氣の香を用ゐよ。若し大悉地を成せんと欲はば、前の汁香及び香菓を用ゐよ。若し中の悉地を欲せば、堅木香及びび香花を用ゐよ。若し下の悉地を欲せば根皮の香と花菓とを用つて以て塗香と爲して之を供養せよ。香を和合する分には(三)有情の身分の香を用ふべからず。謂く甲香・麝香・紫釦等の香、及びび酒酢或は分に過ぎたる者の世に愛せざる者は、皆用つて之を供養すべからず。又四種の香あり、謂く塗香・末香・願香・丸香なり。一の香を用ふるに隨て(四)壇を畫いて花と爲して日別に供養せよ。之を獻せんと欲はん時には是の如くの言を誓ふべし。此の香は芬馥なること天の妙香の如し、清淨に護持して我今奉獻す唯納受を垂れ願をして圓滿せしめ玉へ。塗香の眞言に曰く、
阿歌囉阿歌囉、薩嚩苾地耶駄囉、布爾羶、莎嚩訶。

此の眞言を誦して塗香を眞言し、後に(五)所持の眞言を誦して淨持すること法の如くして尊に奉獻せよ。若し諸香を求むるに而も得ること能はざれば、隨つて塗香を取つて

國譯蘇悉地羯羅經卷上

之を眞言し、復本部の塗香の眞言を用つて香を眞言し已つて、本尊に奉獻すべし。

蘇悉地羯羅經(二)分別燒香品第九

(一)分別燒香品第十一問の云何なる香をか燒香とするの答説、佛・蓮・金の三部により燒香の法則を説示す(二)沈水・白檀・鬱金香・何れも香料なり、沈水香は其木白楊に似て冬青の葉の小なる如し

復次に今三部の燒香の法を説かん、謂く(三)沈水・白檀・鬱金香等なり。其の次第に隨ひて取つて供養せよ。或は三種の香和して三部に通じ、或は一香を取つて隨つて部に通じて用ゐよ。香の名を列ねて曰く、室唎吠瑟吒劍汁・娑折・乾陀羅素香・安悉香・娑落翅香・龍腦香・薰陸香・語苦地夜目劍・祇哩惹密・訶梨勒・砂糖・香附子・蘇合香・沈水香・嚙落劍・白檀香・紫檀香・五葉松木香・天木香・囊里迦・鉢哩閉攏嚙・烏施藍・石蜜・甘松香及び香菓等なり。若し三部の眞言の法を成就せんと欲はば、香を合和すべし。

(三)龍腦香等七種の燒香を説く。

室唎吠瑟吒迦樹の汁香は、遍く三部に通じ及び通じて諸天に獻せよ。安悉香は通じて藥及に獻せよ、薰陸香は通じて諸天の天女に獻せよ、娑折囉娑香は地居天に獻せよ、娑落翅香は女使者に獻せよ、乾陀囉娑香は男使者に獻せよ、(四)龍腦香と、乾陀囉娑香と、娑折囉娑香と、薰陸香と、安悉香と、薩落翅香と、室唎吠瑟吒迦香と、此の七の膠香を和して以て之を燒けば遍く九種に通ず。此の七の香を説いて寂も勝上と爲す。膠香を上と爲し、堅木香を中と爲し、餘の花葉根等をば下と爲す。蘇合・沈水・鬱金等

(二)沙糖と甘蔗の根を煎じて之を作るといふ。

(三)謂ゆる沙糖等五種の燒香を説く

(三)所用に應じ部・尊の類に隨つて奉獻すべし(四)自性香・持磨せざる沈水香・白檀香等の香なり。

の香を和せるを第一と爲し、又白檀と(二)沙糖とを加へたるを第二の香と爲し、又安悉と薰陸とを加へたるを第三の香と爲す。是の如く三種の和合隨て其の一を用つて遍く諸事に通ず。又地居天等及び護衛には、應に薩折囉沙・沙糖・訶梨勒を用つて以て和して香と爲して彼等に供養すべし。又五の香あり、(三)謂ゆる沙糖と、勢麗翼迦と、薩折囉娑と、訶梨勒と、石蜜と、和合して香と爲して三部に通じて一切の事に用ゐよ。或は一の香あり遍く諸事に通ず。如上の好香は衆人の貴ぶ所の上妙の和香なり。如是の香なくば所得の者に隨つて亦三部に通じて諸餘の事に用ゐよ。上の所説の合和香の法の如く、善く須らく分別して其の(三)所用に應じて根・葉・花・菓時に合ひ持して獻せよ。又四種の香あり應さに須らく之を知るべし、謂ゆる(四)自性香と、籌丸香と、塵末香と。作丸香となり。亦須らく要らず應用の所を知るべし。若し扇底迦の法には籌丸香を用ゐよ、若し阿毗遮嚙迦の法には塵末香を用ゐよ、若し補瑟微迦の法には作丸香を用ゐよ。一切に攝通して自性を用つて、籌丸香に合して置け、沙糖を以て塵末香・樹膠香に和して、應さに好蜜を用つて丸香に合和すべし。或は蘇と乳と沙糖とを以て蜜に替へて香に和して自性香の上に少の蘇を着くべし。如し當部の所燒の香を求む

るに若し得ずんば、所有の香に随つて先づ當部に通じて先づ此の部の香の眞言を誦して香を眞言し、然して後に所持の眞言を誦せよ。合和香の法には甲・麝・紫釐等の香を置かざれ、亦末備也等を用つて香を和合すべからず、亦過分して惡氣をして香氣なからしむることを致さざれ。此の林野の樹香・膠香を以て、能く一切の諸人の意願を轉せよ。諸天の常の食をば我れ今將に獻せんとす、哀愍して受くることを垂れ玉へ。燒香の眞言に曰く、

阿歌囉阿歌囉、薩嚩苾地耶駄囉、布爾羶、莎嚩訶。

此の眞言を誦して香を眞言し、後に所持の眞言を誦し香を眞言して燒き如法に獻するが故に。

蘇悉地羯羅經(一) 燃燈法品第十

復次に當さに三品の燃燈の法を説くべし。法に依るを以ての故に諸の天仙をして歡喜し成就せしむ。金を以てし銀を以てし(一)赤と熟との銅を以てし、或は瓷瓦を以てして燈臺を作れ。此の五種の中に法に随つて取用せば本神歡喜す。(二)燈炷を作る法は白氈の花にて作り、或は新しき(三)氈布にて作り、或は薔句羅樹の皮の絲にて作り、或は新

(一) 燃燈法品第十の相の答説。十二種の香の中に二十種の諸の香油等を燃じて諸尊に供養し、悉地成就の法則を説く。今の唐金なり。(二) 燈炷 燈心なり。(三) 氈布 毛織物なり。

(一) 諸の香油の油出す油なり。樟(二) 白芥子 芥は辛子、辛性なれば調伏法に用ふ。(三) 摩訶迦羅 (Mahakala) 梵語、大黒天なり。(四) 藥叉 (Yaksha) 梵語、勇健と譯し印度の鬼神なり。(五) 麻子 麻の子なり。(六) 四姉妹・遮門茶 天等なり。(七) 吠多羅を起す死尸を起す法、犬肉の油を用ふ。(八) 聲牛の牛なり。純黑色

淨の布にて作れ。諸の香油の衆の樂ふ所の者を用ゐ、或は諸の香しき蘇油を用ゐよ。

其の扇底迦の法には上の香油を用ゐよ、補瑟微迦の法には次の香油を用ゐよ、阿毗遮嚩迦の法には下の香油を用ゐよ。若し(一)諸の香油の油をば扇底迦に用ゐ、若し油麻の油をば補瑟微迦に用ゐ、若し(二)白芥子の油をば阿毗遮嚩迦に用ゐよ。阿恒婆菓の油をば眞言の妃と后とに用ゐ、及び諸の女仙に用ゐよ。若し諸菓の油をば眞言主に用ゐよ。若し苦樹の菓の油をば諸天に用ゐ、及び(三)摩訶迦羅に用ゐよ。若し魚の脂をば鬼を祀るに用ゐよ。若し諸の畜生の脂をば(四)藥叉を祀るに用ゐよ。若し拔羅得鷄の油、(五)麻子の油は、下類の天を祀るに用ゐ、及び(六)四姉妹・遮門茶等に用ゐよ。若し寒林の中に(七)吠多羅を起すものには犬穴の脂を用ゐよ。諸油の中に(八)聲牛の蘇は上なり擇びて三部に通せよ。又白牛の蘇は扇底迦に用ゐ、黄牛の蘇は補瑟微迦に用ゐ、烏牛の蘇は阿毗遮嚩迦に用ゐよ。若し本部あらんには別に之を分別すべし、亦は彼に依て用ゐよ。若し諸の藥の中に生ずる所の油をば補瑟微迦に用ゐよ、若し諸香の中に生ずる所の油をば扇底迦に用ゐよ、若し惡しき香氣の油は阿毗遮嚩迦に用ゐよ。如上に略して燃燈の法則を説く、善く自ら之を觀すべし。縦ひ此は説かずとも當さに審かにして之を用

ふべし。燈油の部に依らざるものありと雖も、本部の眞言を以て之を眞言して亦通じて供養せよ。燈は能く障を却け然も障を淨除す。我れ今奉獻す哀愍して受くることを垂れ玉へ。燈の眞言に曰く、

唵、阿路迦野阿路迦野、薩嚩苾地耶駄囉、布爾羶、莎嚩訶。

此の眞言を誦し已つて、次に(二)本持の眞言を誦して之を眞言せよ。復た淨法を作して諸過を除くが故に、前の品に説くが如し准じて持修するが故に。

蘇悉地羯羅經(三) 獻食品第十一

復次に我れ食を獻すべき法を説き、諸の天仙をして悉く皆歡喜し速に成就することを得せしめん。略して獻食を説かん、應に(一)圓根と(二)長根と諸菓と(三)蘇餅と油餅と諸の羹臠等と、或は種種の粥と及び諸の飲食とを用ふべし。此の四種の食は通じて諸部に獻す。(四)末惹布囉迦菓は普く三部に通ず、又石榴菓・注那菓を以ては亦三部に通ず。其の次第を示さば各の一部に通ずべし、若し味ひ甘甜なるは扇底迦に用ゐ、若し味甘酢なるをば補瑟微迦に用ゐ、若し味辛淡なるをば阿毗遮嚩迦に用ゐ、若し(五)多羅樹の菓、菽子菓・尾羅菓・彌跋囉菓及び臭き菓にして衆の樂はざる所は亦獻すべからず。或

(一) 本持の眞言
(二) 獻食品 第十
三問の云何なる食
な供養するの答
説菓子餅等其數
繁多なり
(三) 圓根 芋等な
り
(四) 長根 午芎
長芋等の類なり
(五) 餅 印度の餅
は干菓子類ない
ふ
(六) 羹臠 アツモ
ノ
(七) 末惹布囉迦菓
甘草子の類にいふ
ハ多羅樹形は
圓に似て直生し
葉は書寫に用ゐら
る

(一) 梔子・杏・桃
カキ・アンズ・モモ

(二) 三部の云々
三部に各各慈尊
あり

(三) 天神 諸佛よ
り諸天に至る本尊
の
(四) 人中 夜叉・
羅刹等の如き地居
のもの
(五) 熟芋の根 煮
たる芋なり
(六) 圓根 烏芋の
類

は上味の菓あらん、世に復多く饒かにして復取貴なる、此の如くの菓を獻せば上成就を獲ん。或は諸菓あり、其の味次に美にして世に復求め易くして價貴き所なき、此の如くの菓を獻せば中成就を獲ん。或は諸菓あり其の味苦く辛く淡き等、世に復豊にして足り、價復取も賤なる、此の如くの菓を獻せば下成就を獲ん。若し意を加へて奉獻せんと欲はば、應さに女名菓を取るべし、謂ゆる(一)梔子・杏・桃等の菓は以て女天に獻せよ、諸樹より生せる菓の苦味なきもの眞言の妃と后とに獻せよ。室利泮羅菓をば通じて(二)三部の一切の忿怒に獻せよ。嚩拏菓をば唯一切の藥及に獻せよ。劫比貪菓をば室利天に獻せよ。鉢夜攞樹より生せる菓は鉢麗使迦に獻せよ。是の如くの諸の菓更に多種あり、諸の異名あるは隨て其の味を視て用つて之を獻すべし。或は村の側、或は蘭若の清淨の處に於て諸の草根ありて、其の味甘美ならば之を取つて奉獻せよ、亦成就を得ん。微那唎の根は一切に通じて用ふべし。復奇美の味ある草根・枝葉亦通じて奉獻せよ。直に(三)天神のみにあらず(四)人中にも亦用ゐよ。若し山中に生ずる所の根の美味なる者は佛部に供獻せよ。又(五)熟芋の根も亦佛部に通ず、又迦契嚩劍の根・微那唎の根・嚩也賜の根・俱舉知の根・及び餘の(六)圓根の水より生せるものは蓮花部に用ゐよ。又一

切の藥の圓根の味苦く辛く淡きと、及び多種の生芋シヨウワウとをば金剛部に用ゐよ。又色白く香しく味極めて甘美なる、是の如くの圓根は佛部に供獻せよ。又色黄にして香しく味太だ酸からず亦太だ甘からざる、是の如くの圓根をば蓮花部に用ゐよ。又赤色にして香しく味苦く辛く淡く氣臭く甘からず、是の如くの圓根をば金剛部に用ゐよ、是の如くの三部の扇底迦の法等、及び上中下に並に同じく通用せよ。略して圓根を説きつ、善く其の部に隨ひ上中下に依つて用て之を獻せよ。是の如く分別すれば速に成就を得ん。斯の圓根・長根の生長及び所用の如法の類を説くことは是の如し。若し葱蒜ネギヒルニシクの根と、及び餅の味の極めて臭く辛く苦き等をば用つて獻すべからず。莎悉底食シャシチジキ・烏路比迦食ウロヒカシキ・布波食フハシキ・嚩拏迦食ワナカシキ及び餘の粉食、或は種種に依れる胡麻團の食、或は種種に作れる白糖の食・歡喜團の食・莽度失食マウドシジキ・毗拏迦食ヒナカシキ・憤拏迦食フンニカシキ・阿輪迦修也食アリンカシキ・指室羅食シロシキ・餅食ヘウジキ・過羅叱瑟吒迦食クワラシセツカシキ・餘句離也食ヨコリヤシキ・鉢鉢吒食ハツハツカシキ・布刺拏食フサツカシキ・莽沙布波食マウシャハシキ・微諾羅迦食ヒダツカシキ・補沙嚩多食ホツヤバツカシキ・羅嚩拏迦食ワナカシキ・藥部迦囉迦食ヤクベツカシキ・俱矩知食クケチシキ・羅莽迦食ワウマウカシキ・析波食カウシャシキ・昔底迦食セキチカシキ・鉢囉香指里迦食シロキヤシキ・室利布囉迦食シロフワカシキ・吠瑟微迦食バイセウカシキ・曠諾迦食クワツカシキ・吒那囉迦食ツナラカシキ・愚拏捕囉迦食ウナツカシキ・質但囉布波食シツタラハシキ・却若囉食ケツワカシキ・愚拏鉢鉢吒失薩伽吒迦食ウナツカシキ・竭多食ケツタカシキ・種種の藥避修憤拏布波食ヤクベツカシキ・囉若析沙食ワツサシキ。

(二) 巾葉菜、葉の字恐らく刺、葉の瓶の下に敷く、薄き板の下に敷く、即ち食巾なり。

沙若迦食シャニヤクカシキ・竭囉多布囉囉食ケツタフワラカシキ・劫謨微迦食ケツモウカシキ・句莎里迦食クサリカシキ・三補吒食サンボツカシキ・捨拏嚩食セツナワカシキ・訶哩傳食カハリデンカシキ・釋句囊食シヤクナカシキ・引囊食インナカシキ・種種の鉢囉拏怛囉瑟吒迦食シユツカシキ・地比迦食チヒカシキ・若羅訶悉底憍闍食ワカシキ・羯羯囉嚩拏迦食ケツケツカシキ・嚩囉伽多食ワラカシキ・縛底微迦食バツチウカシキ・乞漉底迦食キソツチカシキ・伽若羯哩拏迦食等カワケリナカシキ等なり。上の如き等の食、或は砂糖を用つて作り、或は蘇油を以てし、或は油麻を以て和して作ること其の本部の如し。法に隨つて用ゐよ、法に依つて奉獻すれば速に成就を得。米粉の食は、佛部にして扇底迦及び上成就を作す。若し一切の麥麵ミヤクインの食は蓮花部にして、補瑟微迦及び中成就を作す。若し油麻と豆子との食は金剛部にして、阿毗遮嚩迦及び下成就を作す等なり。一切の諸の食味を用ふる中に白糖を用つて莊カサる所の者をば佛部の中に常に當さに用つて獻すべし。若し室利吠瑟吒迦食シロバイセツカシキをば蓮華部に用ゐよ。若し歡喜團の食をば金剛部に用ゐよ。若し布波迦食フハカシキをば藥叉ヤクシに用ゐよ。若し女名食ニヨミヨウシキをば眞言の妃と后とに用ゐよ。女名食とは、劔謨里食ケンボリシキ・鉢鉢微食ハツハツシキなり、是は諸食の中に最も復美味なるものなり。上成就を求むるには用つて奉獻せよ。其の次の味の如きは餘の二部に用ゐよ。此の中に具せざるをば所作の食に隨つて、八部等に用ゐよ。獻食の時には先づ(一)巾葉菜等ケツワカシキを敷いて莊嚴を爲し、先づ莎悉底迦食シャシチジキ・烏路比迦食ウロヒカシキ・布波食フハシキを置き、是の如く先づ三

(二) 粳米の飯
ルイネなり、これ
に三種あり、一に
常の米、二に六十
日にて收穫の米と
三に自然生の米と
なり。

部に作つて共に同しくし、復本部所須の飲食の如く方に随つて之を獻せよ。(二) 粳米の飯と、六十日に熟せる粳米の飯と、大麥の乳の飯と、種えずして自ら生へたる粳米の飯と、粟米の飯とを以て、須らく獻すべくんば法に依つて之を獻せよ、及び諸の香味奇美の羹臠と并に諸の豆臠とても之を奉獻せよ。乳煮の大麥の飯と及び種えざるに自ら生へたる粳米の飯とは上成就を求めよ、粳米の飯と及び六十日熟の粳米の飯とは中成就を求めよ、粟米と及び飯とは下成就を求めよ。扇底迦の法を上成就と爲し、補瑟微迦の法を中成就と爲し、阿毗遮嚕迦の法を下成就と爲す。飯食・根菓・飯粥を供獻せんことは上中下に依つて之を奉獻せよ。扇底迦の法は上にして佛部なり、補瑟微迦の法は中にして蓮華部なり、阿毗遮嚕迦の法は下にして金剛部なり。最上の悉地と及與び中下となり、善く須らく法に依り類に随つて知んぬべし。羹臠の中に味甘甜のものは扇底迦に用ゐ、味酢甜なるものは補瑟微迦に用ゐよ、味苦辛淡のものは阿毗遮嚕迦に用ゐよ。乳の粥をば扇底迦に用ゐ、石榴の粥、酪の粥等をば補瑟微迦に用ゐ、訖娑囉の粥は謂く胡麻・粳米・豆子等なり、阿毗遮嚕迦に用ゐよ。前に各の説ける諸の食味等の如く、或は方所に随つて種種に異あり上中下を觀じて之を奉獻せよ。或は諸味の衆の稱

(一) 何事をか云々
謂く敬愛・鈎召等
を指す。
(二) 何事の願増
益なり。
(三) 獻法の中此
の中に十二の獻食
法あり。

(四) 三白食 乳と
酪と蘇となり。
(五) 三甜食 蘇と
蜜と乳の飯なり。

讚する所、或は自愛の者あらん應さに持して佛に獻すべし。或は本部の眞言の所説の獻食の次第あらば宜しく當さに之に依るべし。若し彼に異ならば成就を得ず、食の中に顯なる者及び惡香をば金剛部に用ゐよ。前に説ける塗香・燈・食等各の本部に依れ、扇底迦等は當品も之に依れ。眞言の性は喜とや爲ん怒とや爲んと觀せよ、次に復之を觀せよ然も(一) 何事をか成さんと、復細しく(二) 何等の願をか満ると尋察すべし。既に觀知し已つて前に獻する所の食力に随つて之を獻すべし。(三) 獻法の中に於て迦弭迦食を用ふることありと見ば應さに沙悉底食・烏路比迦食・及び餘の力の辨する所の食を獻すべし、砂糖・酪飯・根菓・乳粥等は是れなり。此の迦弭迦食は通じて一切に獻す、唯阿毗遮嚕迦を除く。獻法の中に於て微質觀路食を用ふることありと見ば、迦弭迦食の中に三兩種の上異の飲食を加ふることを以てすべきこと是れなり。獻法の中に於て烏肥嚕食を用ふることありと見ば、前の迦弭迦食を以て倍加して多く置くこと是れなり。獻法の中に於て(三) 三白食を用ふることありと見ば、乳・酪・蘇の飯を以てすべきこと是れなり、復(四) 三甜食ありと見ば蘇・蜜・乳の飯是れなり。獻法の中に於て薩嚩薄底迦食ありと見ば、娑也里迦食・陵祇里迦食・薺沒梨耶食・底羅比瑟吒劍食・酪飯・根菓なり。前の所説の

(二) 赤粳米 赤き大唐の米なり。

食の中に於て一兩の味を取り、之を稻穀の花・諸の花及び葉に置き盛るに大器を以てし水を置きて中に満て持誦の處を遠かりて棄る是れなり。獻法の中に於て扇底迦の食ありと見ば、當さに莎悉底と、乳の粥と、稻穀の花と、蘇と、蜜と、乳と及び乳煎と、大麥の飯と、微若布羅等の食を用ふべし、決然として災を除く疑を懐くこと勿れ。獻法の中に於て補瑟微迦の食ありと見ば、應さに酪の飯と、酪の粥と、歡喜團と、烏路比迦と、砂糖と、室唎吠瑟吒迦等の食を用ふべし、決めて能く願を満たさん疑を懐くこと勿れ。獻法の中に於て阿毗遮嚩迦の食ありと見ば、應に(一)赤粳米の飯を用ふべし、或は句捺囉嚩子、或は赤色に染め作せる飯、或は油麻・餅・娑布跋迦・膺沒梨也・訖娑囉粥等を用ふよ、決めて能く魔を降す疑を懐くこと無れ。若し藥叉の眞言を持するに獻食の法なくば應さに此の法に依つて之を奉獻すべし、當さに赤粳米の飯と根と菓と蜜水と及び蜜と砂糖と米粉の餅等とを用ふべき是れなり。女天の眞言等を持せんには應さに羹飯・豆子・臛等の諸の甜漿水・鉢囉拏鉢哩瑟吒迦佉葉味等及び諸の菓子とを獻すべし。一切の女天には應さに是の食を獻すべきなり。上成就を求めんと欲はば本部の獻法のもの應さに此に依つて獻すべし。諸の飲食の根・菓・香等の衆の共に談ずる所の其

(一) 餘方 餘方の食を奉獻する法。

(二) 乳樹 汁の出づる木をいふ。

(三) 雌樹の名葉 上に女名果・女名食等といふの例なり。

(四) 水を嘔む 口を清むること。
(五) 下す 供を備ふる意。

の味の美なるもの多くして而も復貴きあり、此の如くの上味をば上成就を求めんもの而も之を奉獻すべし。如上は略して諸の獻食の法を説きつ、各の本部に隨ひ所求の事法皆已に略して陳ぶ。或は(一)餘方に於ては飲食の味異れり其の色味を觀じ類に隨つて之を獻すべし。食を獻せんと欲はん時には先づ淨く地を塗り香水を遍く灑ぎ諸葉を淨め洗ひて後に蓮の葉と鉢囉勢葉と諸の(二)乳樹の葉と或は新しき氍布等を以て其の上に敷き設けて、後に諸の餽餼を下すに之の葉を依用せよ。扇底迦には水より生ずる諸葉及び餘の奇樹の葉等、或は芭蕉等を用ふよ。又補瑟微迦には拔羅得計樹の葉・闍伽樹の葉、或は時に隨つて得んものを用ふよ。又阿毗遮嚩迦には(三)雌樹の名葉を用ふよ、謂く芭蕉の始めて生せる葉、或は蓮の葉及び苦樹の葉等なり。又女仙の眞言には鉢隸迦使乾樹の葉、又地居天等には草を以て之を用ふよ。上中下の法を求めんには善く須らく知解すべし。先づ地を塗り灑いで、後に諸葉を敷いて當さに淨く手を洗ひ口を漱ぎ(四)水を嘔むべし。次に須らく食を(五)下すに先づ莎悉底迦食を下し、次に圓根と長根と菓とを下し、次に諸の粥を下し、次に羹臛を下し、次に飲を下し、次に乳と酪とを下すべし。各本法に隨ひ此に依つて此を下せ。若しは曼荼羅を作し及び諸事を成就して